
テイルズオブヴェスペリア～ホタルブクロが咲く頃～

十握剣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブヴェスペリア〜ホタルブクロが咲く頃〜

【Nコード】

N 6 6 5 4 M

【作者名】

十握剣

【あらすじ】

あのバンダイナムコゲームスの作品、『テイルズオブヴェスペリア』の二次小説始めました！ 完全に作者が書きたくてやっています。原作のヴェスペリアにオリジナルキャラを入れた物語です。

始まり（前書き）

やっちゃいました・・・

まだまだ、他の作品が終わっていないのに、また小説作っちゃいました。

作者は基本、自由な^{フリーダム}ので書きたい小説が沢山あるのです！

許して下さい！
すんませんッ！

始まり

この世界

テルカ・リュミレース。

大地と海が何処まで続くのか、知る人はいない。

なぜなら……

世界にうごめく魔物たちに比べ、人はあまりにも弱い。

我々の住む街を守る結界、我々は己を守るためにその中で行きながらえている。

それを成す、核となる魔導器^{ブラステイア}。

世界に満ちた根源たる力、エアルを使い、魔導器は、火、水、光、繁栄に必要な、ありとあらゆるものを、今日まで我々に与え続けてきた。

わがて、いつの日か、結界の向こうに、凶暴な魔物が生息する事も我々は忘れてしまうのだろう。

繁栄と成長を続ける世界……。

すべての人々のための平和、

プラスティ
ア
魔導器の恩恵により、更なる発展を遂げていくだろう。

世界の礎である帝都ザーフィアスより願う。

『世界が穏やかであるように』

牢屋仲間（前書き）

ユーリが水道魔導器を盗んだ犯人を追いかけて、貴族の館でキュモール達に捕まり、牢屋の中にぶちまけられた場面^{シーン}です！

因みに原作に沿って物語を進めていきますが、度々オリジナルな話も入れていきます！

また因みにこの小説題名の『テイルズオブヴェスペリア』ホタルブクロが咲く頃』のホタルブクロは後から分かっていきます（＜A＞）

牢屋仲間

暗く冷たい帝都ザーフィアスの城の独房。

そこに黒い髪に黒い眼鏡をした青年がグータラと独房特有の固いベツドに頂垂れていた。

「だら〜」

黒い眼鏡をした青年は牢屋の中に居るにも関わらずだらけて居た。

「ちよーと、いつまでだらけてるの君は〜」

黒い眼鏡をした青年の牢屋の隣からなんと気のある男性の声がかかってきた。

「見えないのに分かるんだな、おっさん」

かくいう青年もやる気の無い声で返す。

「・・・おっさんは酷いなあ」

そしてまた何とも残念がつてるような芝居染みた声が返って来た。

「てか、その声って・・・」

「おう、久しぶりだな。“ヤスムネ”」

ヤスムネと呼ばれた青年はバサツとベッドから起き上がり頭を掻く、そして気だるそう立ちあがりながら独房の近くまで寄る。

「やっぱアンタ様が、何で捕まってるのよ？」

「ん〜これには深あーい訳がねえ」

「じゃあ、良いよ、話さなくて」

「ありや！？ 聞いてくれないの！？」

何だよ〜と、うさん臭そうなおっさんはドサツと固いベッドに寝ると、そこに看守がやって来た。

「オイお前ら！ 何を話している！」

「なんにも話して無いスよ、ただ隣のおっさんの加齢臭が臭くて」

「ええええ！？ ヤスムネお前無駄に酷いぞ！？」

寝ていたおっさんはズバツと起き上がりすぐに隣の青年・ヤスムネに抗議した。

「えええい！ うるさい！」

看守は手に持っていた槍で牢屋を叩く、牢屋特有の甲高い金属音が鳴り響く。

「ま、ま、落ち着いて下さいよ騎士様〜」

おっさんは騎士に話し掛ける。
ヤスムネはそんなおっさんのやり取りを見てペタツと床に座りながら牢に頭をぶつけてだらける。

（だるうゝ、まさか“この人”がザーフィアスに居るなんてなあ・・・、バレて無いよな？）

ヤスムネはそんな事を思っていると隣のおっさんは騎士と話に盛り上がっていた。
主におっさんが。

「で、その例の盗賊が、難攻不落の貴族の館から、すんごいお宝を盗んだ訳よ」

「知ってるよ。盗賊も捕まった、盗品も戻ってきただろ」

「いやあ、そこには貴族の面子が邪魔してってやつでな。今館にあるのは贋作よあ」

「バカな・・・・・・・・」

「ここだけの話な？ 『漆黒の翼』がが目の色変えて、アジトを探してんのよ」

「例の盗賊ギルドか？」

「マジで！？ あの『漆黒の翼』が？」

とそこにヤスムネも入って来た。

「おお、そうよん。何でもそのお宝は国一つ買える程の価値とか」

「おおお！ やべえじゃねえかソレツ！」

「く……国一つだと!？」

とわざとらしく驚くヤスムネと素で驚く看守。

だがつつい聞き入ってしまった看守は、はっとして我に返り。

「あーゴホン。大人しくしてろ。もうすぐ食事だ」

と言に残して看守は去って行く。

すると、うさん臭そうなおっさんが隣に話し掛けた。ヤスムネの方の隣では無い隣です。

するとそこからまたもや別の青年の声が返ってきた。

「そついう嘘、自分で考えんのか？ おっさん、暇だな」

「おっさ……!？ まったく最近の若人^{わこいつ}は酷いな。おっさん傷つくよ。」

「アンタ今自分でおっさん言つたの分かったか？」

とヤスムネはおっさんにツッコミを入れる。

「おっさん以外にも誰か捕まってるのか？」

「ちいーす、また牢屋仲間が増えて自分嬉しいッス。あつ待って、今自分で牢屋仲間って言つて傷付いた……」

ズーンと自分で言った言葉に傷付いたヤスムネは床に寝そべった。

「訳分からん奴まで居るのか、独房ひとりぶは」

「おっさんはこの青年と一緒にされるのは嫌よ？」

とヤスムネの隣の隣の青年はおっさんと何か話している中、ヤスムネはずっとネガティブになっていた。

「やべーよ、本当にやべーよ。今の俺の状態ヤバくねえか？ ヤバいよな？ ヤバいって・・・・・・・・」

と何がヤバいのか分からないがとにかくヤバい状態のヤスムネはずっと落ち込んでいると隣から独房の牢が開く音がした。
開けた人は白髪の騎士の男性だった。

（んん！？ あれ、騎士団長アレクセイか？）

白髪の騎士・アレクセイは牢屋の中に居るおっさんを面倒臭そうにしながら見て言葉を出す。

「出る」

「いいところだったんですがねえ」

おっさんはアレクセイの言葉に従い、牢屋から出てきた。

「おっと」

おっさんは話していた青年の独房の前でわざとらしく躓く。

「騎士団長直々なんて、おっさん、何者だよ」

「……女神像の下」

おっさんはその言葉と共に青年に二つの鍵を投げ入れる。二人のやりとりで騎士団長が割って入る。

「何をしている」

「はいはい、ただいま行きますって」

騎士団長とおっさんはそんなやり取りをして出て行った。

そして青年はおっさんから貰った二つの鍵の一つを鍵穴に差し込んで回すと、扉は音を立てて開く。

「マジで開くのな」

青年は少し驚きながら牢屋から出る。するとずっと黙っていたもう一人の青年・ヤスムネが牢屋からぶらぶらんと手を出して牢屋から出た青年に話し掛ける。

「うおおーい、オレも出してくれよ。もう独房飽きたあ」

「オイオイ、どんだけ居たんだよ、アンタ」

まあ良いか、と青年がヤスムネの前まで来るとガバツとヤスムネの目が見開いた。

「ぬああああ」　君はもしかして、もしかしたら」

「なっ……なんだ!？」

青年は急に大声を出してきたヤスムネに驚いた。

「お……おん……女の子ですかあ!？　その黒く美しい長くて艶やかな髪はそんなアナタにお似合いですよ!」

ヤスムネは瞬時に近寄って来た青年の手を握ってそう言ってきた。だが青年は冷静に、

「悪いが、男だ」

と言った途端にピシッと固まってしまった。

「鍵は渡したぞ、と。悪いが俺はちよっくら下町の様子を見に行つて来るぜ。流石に脱獄罪の上乗せは勘弁して欲しいからな。朝までに戻って来る」

そう青年が言うのと固まっていたヤスムネが再起動した。

「待ってくれって、言つたろう。独房ひとばらは飽きたって、だから一緒に行かせてくれよ」

「はあ？　なんでそうなった？」

「面白そうだからだバカヤロー!」

と何故か逆ギレしながら牢屋の鍵を開けて出てきたヤスムネに青年

は溜め息を吐いた。

「はぁ、アンタと居ると疲れそうなんだけど」

「ハハハ、大丈夫だって」

何が大丈夫なのか理由を言わないで大丈夫と言うヤスムネに少し疑いの眼差しを向ける青年に手を差し伸べる。

「オレの名前はヤスムネだ」

ヤスムネは青年と握手をしたのか、ずっと手を出している。
だが青年はヤスムネを怪しがり中々手を出さないで居ると、ヤスムネはバツと青年の手を掴みブンブンと上下に揺らして挨拶した。

「ヨロシクね」

にこやかに挨拶をするヤスムネに青年はまた溜め息を吐きながら仕方なく名前を告げる。

「ユーリだ、ユーリ・ローウェル」

そう青年・ユーリが言つとヤスムネは笑いながら頭を掻く。

「牢屋仲間同士、ヨロシクな！」

「いや、牢屋仲間って……」

牢屋仲間（後書き）

どうだったでしょうか？

何処がおかしくありませんでしたか？

夏休みに入っただのでドンドンと書いていききたいと思っています。感想やコメントを宜しくお願いします！ 感

牢からの脱出（前書き）

全然まだまだ、てか大した進みません。

それもこれも夏のせいです！

もう！

自分夏嫌いです！

牢からの脱出

「下町がそんな事になつてたのか！」

「ああ、だからそのモルディオって奴を追いかけようとしたらキュモールの野郎がよ……」

「アイツか、アイツは確かに面倒くせえよな」

軽い自己紹介を仕合つた二人の青年は取り上げられた荷物を回収していた。

「あつた、あつた、ヤスムネの方も見つかったのか？」

ユーリは自分の武器である刀「ニバンボシ」を見つけて左手に持つ。ヤスムネもガサゴソとあさっていると、

「あつたあ！　ちょー久しぶりだ」

と手に持つて上げたのは黒い鞘に入れられた刀だった。柄は赤色と黒が混ざつた感じで鍔は無かった。

「ひゃーホコリ被つてらあ、ウケる！」

ワハハハとヤスムネが笑いながら鞘に掛かっているホコリを息で吐いて振り払う。

「オイオイ、本当にただ独房ひとりぶどうに居たんだよ、アンタ」

「いや、武器はここに置いてあっただけでオレは何回も出入りしてよ」

色々とツツコミを入れようかとユーリが思っているとヤスムネは自分の得物である刀を肩に担いでさっさと独房から出ていった。ユーリもすぐにヤスムネの後を追いかけて行くと、

「キヤアアアアアアアアア！」

と奇声を上げたヤスムネが騎士に追われていた。

「また逃げ出す気か、この眼鏡野郎！」

「なんだと！ 眼鏡なめんなバカヤロー！ テメエみたいなサブなんか俺の眼鏡の偉大さに比べればなあ……」

「きき……貴様言つてはいけない事をオオオオオ！」

騎士は剣を振り回しながらヤスムネを追いかけて回す。ヤスムネは「殺されるうううう！」と言いながら逃げているとユーリが騎士に向かって青い風のような衝撃破を放つ。

「蒼破刃！」

「ぐはっ」

騎士は蒼破刃を喰い、壁にぶつかりと気絶してしまった。

「ハアハア……そうだ、独房の入口には騎士が居るって事を忘

れてたぜい」

息をとぎらせながらヤスムネはゼエゼエとしていた。ユーリは、はあゝとまた深い溜め息を吐いた。

その後は騎士に見つからないようにユーリとヤスムネは城内を進んで行った。

「広いなー」

「腹減ったあ」

ユーリは城内の回りを見ながら呟くがヤスムネは腹を摩りながらぼやく。

すると道の先から何か聞こえた。

「もう、お戻り下さい」

「今は戻れません」

ユーリとヤスムネは壁に隠れて声のする方を見てみるとそこには騎士数名とドレスを纏った女性が騎士達に追われていた。

「これはあなたの為なのですよ」

「例の件につきましては、我々が責任を持って小隊長に伝えておきますので」

騎士達は必死にドレスを纏った女性に呼びかけるが女性はそれでも逃げようとする。

「そう言つて、あなた方は何もしてくれなかったではありませんか」
騎士達はそれぞれ顔を見合わせて女性ににじり寄る。そして女性は
すかさず持つていた剣を構える。

「お止めになられた方が．．．．．お怪我をなさいますよ？」

「剣の扱いは心得ています」

「致し方ありませんね。手荒な真似はしたくありませんでしたが．．
．．．．」

騎士たちは剣を抜き、遠くからまた数名の騎士たちやって来る。

「おい、いたぞ！　こっちだ！」

どんどんと騎士たちが集まって来て女性を囲んでいく。

「お願いします！　行かせてください！　どうしても、フレン
に伝えなければならい事が」

と『フレン』という言葉に反応したユーリは思わず声を出す。

「フレンだって？」

「おい、どうし——」

ヤスムネが急に声を出したユーリに驚くが次の行動にヤスムネもび
つくりした。

「てあつ！」

ユーリは続々と集まってくる騎士たちに蒼破刃を繰り出す。

「うわあつ！」

「がつ！？」

蒼破刃を食らった騎士たちは吹っ飛ばされ簡単に気絶していく。

「フレン……！？ わたしを助けに……？」

女性はユーリの方を振り向くとそのにはフレンじゃない全然違った人物が居た。女性は目を見開いて驚いた。

「だ、誰？」

女性はいきなり現れたユーリに驚いていると、まだ残っていた騎士たちがユーリを囲むように集まってくる。

「貴様、何者だ！！」

「ったく、こつそりのはずが、いきなり厄介ごとかよ」

ユーリは愛刀である「ニバンボシ」を鞘から抜いて戦闘体勢に入る。

「こいつ、ブラステイア魔導器を持っているのか」

「二人でかかれば問題ない」

二人の騎士は協力仕合ってユーリを抑え込もうとするらしい。

ヤスムネも出て来たが全然と戦う気が無いのか、刀は鞘に入れたままで女性の近くまで近寄る。

「やあ、こんにちは」

「えっ、あの・・・」

「まあ見てようよ」

とそこまで言うと言とヤスムネは女性の近くでぺタリと座る。

女性は「？」といった感じに混乱していると、戦闘をしているユーリが余裕なのか騎士に声を掛ける。

「ったく。それが騎士のやることかよ」

と巧みな剣さばきで騎士たちを圧倒する。

騎士たちと焦っているが上手く攻防と分けて戦っている、だがユーリの方が強かった。戦闘はすぐに終わってしまった。

「おおー！ 強いな」

ヤスムネはパチパチと拍手をする。

「お前も戦えよ」

「ふっ、オレはさ。無用な戦いは避けてんだぜ」

と何処かを見ながら言っているヤスムネをスルーしてドレスを纏っ

た女性にユーリは尋ねる。

「なあ、あんた――」

とユーリが聞こうとした瞬間、

「ユーリ・ローウェール！　どこだあー！」

「不届きな脱走者め！　逃げたしたのは分かっているのである」
とユーリを探している騎士たちの声が聞こえた。

「ちっ、またあいつらか。もう牢屋に戻る意味なくなっちまったよ」

「この声は、ルブランとアデコール、ボツコスのか」

ヤスムネは声のした方を見ながら呟くと混乱していた女性が口を開いた。

「ユーリ・ローウェル？　もしかして、フレンのお友達のか」

「ああ、そうだけど」

「なら以前は騎士団にいた方なんですよね？」

「ほんの少しだけだな。それフレンから聞いたのか」

「はい」

「ふん、あいつにも城の中に、そんな話する相手いたんだな」

「あのユーリさん！ フレンのことで、お話が！」

「ちょい待った。あんた一体なんなんだ？ フレンの知り合いなのは分かったけど、どうして騎士団に追われてんだよ」

二人が話しているとルブランたちとは別の方向から騎士の声が響く。よっこらせ、とヤスムネは刀を杖代わりにして立ち上がるとパンパンと手を叩いて提案を出す。

「まあお互い事情も聞きたいけど、のんびりは出来ない。だから取りあえずそのフレンっていう人に会いに行けば収まるだろ？」

ユーリと女性は互いに顔を見合わせてコクリと頷く。

「そんじゃ取りあえずフレンのところに案内すれば良いか？」

「あ、はい！」

「おう、それで良いぜい」

三人はさっそくその場を後にしてフレンという人の部屋を目指すことにした。

「で、フレンはどこ?。」

三人は城内を探索してやっとフレンの部屋に行き着いてと思えば部屋の中には誰も居なかった。

「部屋がやけに片付いてるな、こりゃあフレンのやつどっかに遠出かもな」

「そんな・・・間に合わなかった」

とドレスを纏ったピンク色の髪をした女性はフレンが居ないことに落ち込む。

「いったいこの娘はそのフレンって言う子に何の用なのかね」

「俺に聞くなよ」

ヤスムネとユーリが話していると女性はいきなり声を出してきた。

「あの！　ユーリさん！」

「なんだよ、急に」

「ホントに急だったな、びっくりした」

ヤスムネとユーリが驚いていると女性は真剣な眼差しでユーリに伝える。

「詳しいことは言えませんが、フレンの身が危険なんです。わたし、それをフレンに伝えに行きたいんです」

「行きたきゃ、行けば良いんじゃないのか？」

「それは……」

「オレにも急ぎの用事があるんだ、なるべく早く下町に戻りたいんだよ」

「だったら、お願いします。わたしも連れて行って下さい。今の私には、フレン以外に頼れる人がいないんです。せめて、お城の外まで………お願いします、助けて下さい」

「訳ありなのは分かっただからせめて名前くらい聞かせてくんない？」

やっと女性の名前が分かるのかあ、とヤスムネが思っているといきなりフレンの部屋のドアが吹き飛ばされる。

「ひゃあっ」

「ぐぎゃっ!?!」

そして見事にその吹き飛んだドアがヤスムネにぶつかって押し倒すようにヤスムネの上にドアが倒れる。

（何故えええ！？）

ヤスムネはしたくもないドアとのキスをしたらしく、口を押さえながら起き上がるとすると、

「死ねえ、フレン・シーフォ……！」

ドシャッ！

「ぐばあっ！？」

とドアごとヤスムネは誰かに踏まれた。

そして何で金属音がぶつかり合っている音が聞こえるのか、疑問に思いながらずっと悶えている。

そして色々と声がしたと思ったらいきなり消えていった。

「や……つと終わったか？」

ヤスムネはドアを持ち上げて立ち上がる。

「あ、あの。大丈夫ですか？」

ピンク色の髪をした女性はドアごと吹き飛ばされたヤスムネの事を心配してくれたらしい。

「ううう！　　ありがとう！　　女の子最高！」

最後の言葉は意味が分からなかったが、ユーリからさっきの事を聞くとヤスムネは少し反応した。

（黒装束だど・・・・・・まさかな、まさか）

ヤスムネは一人で考え込んでいると女性がヤスムネに訊ねてきた。

「あのう、貴方のお名前を教えてもらっても宜しいでしょうか？」

「えっ、あれ？　　まだ名前言ってなかったっけ？」

コクコクと可愛く頷く女性に微笑みながらヤスムネは己の名前を女性に告げる。

「ヤサムネさんですね」

「あつごめん、違うよ。ヤ“ス”ムネだよ」

「あつ、す・・・すみません」

「大丈夫、大丈夫。やっぱ言い辛いよね、オレの名前・・・」

大丈夫と言っているが、当人はかなりネガティブになっていた。だが女性もすぐに自分の名前をヤスムネに教える。

「あ、あの。わたしの名前はエステリーゼと言います」

「うん、ヨロシクね。エステリーゼちゃん」

名前を間違えられたがすぐに機嫌が治った。その理由は、

「てかめちゃめちゃ可愛いねエステリーゼちゃん!」

女の子が大好きだからであった。

「えっ!　　そ、そうでしょうか／＼／＼」

エステリーゼは頬を赤らめていた。その仕草も可愛い過ぎたのか、ヤスムネは少しテンションが上がっていた。

「オーイ、お前ら。早くここから移動すつぞ、おっさんの情報だ。この城の何処かにある女神像の話に賭けて、さっさとおいとまするぞ」

「あの、ユーリさん」

「分かったよ。ひとまず城の外までは一緒だ」

「はい、あの、わたしエステリーゼっていいいます」

「よっしゃ、そんじゃ行こうぜお二人さん」

ヤスムネが立ち上がり部屋から出ようとするが、

「待って下さい、ドア直さないと・・・」

ズルッとヤスムネは転けてしまった。

「えええ！　今かい？」

「んなことしてる場合じゃねえだろ」

「でも……」

呆れながらユーリがそう言つとヤスムネと顔を見合わせて。

「直そうか……」

「……しゃあねえな。待つてな」

ヤスムネとユーリは手早くドアを直す。

「ふう、直った」

「ほらよ、さ、行くぞ」

「は、はい……！」

「どうでしょうか？」

今居る場所はエステリーゼの部屋の前である。

そして何故エステリーゼの部屋に来说いるかと言つとドレス姿では派手だし動き難いとユーリが判断して今に当たる。

今のエステリーゼの姿はさっきよりは動きやすい服装だった。スカート部分がちよつとチューリップっぱいなとヤスムネは思つていた。

「……いや、似合つてねえなと思つて」

「アホかお前は！？　　すげえ可愛いだろうが！」

見て分かる通り、前者はユーリで後者はヤスムネだ。

「あ、ありがとうございます！」

エステリーゼは少し嬉しそうにしていると、ユーリに手を差し出す。

「何、これ？」

「よろしくつて意味です」

ユーリはおざなりにエステリーゼの手をつかみ、すぐに放す。

「よろしくです」

「ハイハイ、よろしくね、と」

エステリーゼとヤスムネが握手するとやっと本題の『女神像』に向かうことになった。

城内のホールまで行くとそこには大変立派で美しい白い翼を生えた『女神像』があつた。

「あれだな」

「おつ、見つけたかユーリ」

「この像に何か秘密があるんです?」

「秘密があるんだと」

ヤスムネとユーリが女神像の回りを探し始める。

(ん・・・?)

ヤスムネが女神像の床がすれていたの、女神像を思いっきり引張ってみると、ズサーと見事に動いた。

「秘密の抜け道つか」

「まさか……」

「すげえな」

下へと続く階段はとても薄暗く、危なそうな場所だ。

「もしかして、ここから外に？」

「保証は無いけど、行く価値あるだろ。どうするエステリーゼちゃん、ユーリは行くだろ？」

「当然だ」

「……行きます」

エステリーゼは少し悩んだが行くと決心した。

「なかなかの勇気のある決断だね、ま、ユーリが居るから大丈夫っしょ」

ヤスムネは完全にユーリに頼っていた。ユーリも今日で何回目になるのやら、また溜め息を吐いた。

さっそく下に下りようとすると、エステリーゼは急にユーリの手を掴んだ。

「どうした？ やっぱり、やめんの？」

「いえ、手、ケガしてます。ちょっと見せて下さい」

そうエステリーゼが言うくと周囲に光が発生して術式のようなものが現れ、ユーリの傷が治った。

「んっ？」

ユーリはとっさにエステリーゼの手をつかんでその胸についた魔導^{イデア}器を見た。

「きゃあっ！」

「あ、悪い、きれいな魔導器だと思ったら、つい、手が」

「本当に、それだけです？」

「ほんとにそれだけだ、手ありがとな」

「・・・い、いえ、これくらい」

「あとヤスムネ、そんな怖い顔しながらオレを睨むなよ」

ユーリがエステリーゼの手をつかんで一番に反応したのがヤスムネで、手には刀の柄を握っていた。

「ハハハ、斬るところだったよ」

「いや、そんな満面な笑顔で怖い事さらりと言っなよ」

そんなやり取りをして三人は薄暗い地下道へと下りてそのまま通っていたら魔物と遭遇してしまう。

だが、戦闘にはユーリとエステリーゼが戦っていて、ヤスムネはズババツと逃げまくって居た。

そして薄暗い地下道を突き進み、外へと繋がるはしごを見つけて一人ずつ上って出口から出る。

どうやら外はもう朝になっていたらしく、太陽の光がヤスムネたちを照らし出す。

「うわ、まぶしっ・・・あゝあ、もう朝かよ。一晚無駄にしたな」

「おおう、久しぶりの外だぜい。くっ・・・太陽光がオレの身体を蝕んでいくうううう」

と一人太陽の光を浴びて苦しがつているヤスムネをほつといてユーリは最後に上ってきたエステリーゼに手を取ってあげる。

「窓から見るのと、全然違って見えます」

「そりゃ大げさだな、城の外に来るのが、初めてみたいに聞こえるぞ」

「・・・そ、それは・・・」

エステリーゼは少し黙っていると無視されて精神的ダメージを受けたヤスムネがユーリに話し掛ける。

「外に出られた事でオレは自由を手に入れた、お前たちのお陰だぜい」
そしてオレはこれから別行動させてもらうヨ」

ヤスムネは黒い眼鏡をクイツと上げて「そんなら、ばいにやら」と

言って貴族街に向かって行こうとするが、ある程度進むとユーリ達に振り向き、

「また、どこかで会えるからなあ。そんな時までバイバイだ、エステリーちゃんも『外』では気をつけてなあ」

そう言うのとバツと一瞬に消えた。

「結局アイツは一体何者だったんだ？」

「えっ？　ユーリさんのお知り合いじゃなかったのですか？」

「いや知らねえよ、牢屋に捕まってたから一緒に逃げ出した仲だな。ヤスムネ曰くオレとアイツは『牢屋仲間』らしい」

ユーリはフウ、と溜め息を吐いたが、少し微笑んでいた。

「ふふふ、牢屋仲間って、何だか可笑しな感じですね」

「だな、じゃ、さっさと下町に向かうぜ」

「はい！」

皆の救出劇（前書き）

誤字を教えて下さった、筋肉大好きさん、ありがとうございます！

今回も誤字脱字があれば教えてください（＜A＞）

砦の救出劇

ヤスムネは今、帝都ザーフィアスから出て『デイドン砦』に居た。

ヤスムネの今の恰好は上半身は長い黒いコートを着て、前を着崩し、胸には黒い石のようなアクセサリをぶら下げていた。下半身は黒色の袴を着ていた。

そしてそんな恰好をしているヤスムネはデイドン砦で思わぬ足止めを喰らっていた。

「なんだあゝ、いつばいだなあ」

ヤスムネは沢山いる人だけに声を漏らしていると、行商人が話し掛けてきた。

「おたくもこの先に行きたいのかい？」

「そーなんだけど、これは一体全体どうしたんだい？」

ヤスムネが行商人のおじさんに訪ねる。

「どうやら砦の向こうに魔物が出ちまつたって話だぜ」

「ふゝん、そりゃ大変じゃないですかい」

「・・・アンタは全然大変そうじゃないな」

行商人のおじさんはじいーとヤスムネを見ると、ヤスムネはズバツと顔を反らした。

「まあ良いさ、どの道足止めさあ」

行商人は自分の馬車に戻ろうとするとヤスムネも何気なく付いて行った。

「・・・なんだい？」

「開くまで待とうナントヤラだ、どっか休める場所あるかい？」

「向こうに宿屋をしているテントがあつたよ。そこで休みな」

「おお、あんがとな。おじさん」

行商人のおじさんに手を振ってヤスムネは宿屋のテントに向かった。

「ふわあゝ」

宿屋をしている所のテントにヤスムネは寝ていた。
と言っても30分くらいしか寝てない。

「・・・・・・・・そろそろ、魔物達はどっか行ったかな？」

ヤスムネはテントから身を乗り出して外に出る。
するといきなり、

カーンカーンカーン！

と突如鐘が鳴り始めた。

門の方から悲鳴をあげている人たちが聞こえた。

「・・・・・・・・」

ヤスムネはテントの中に置いてあった己の武器を掴んで門の方に歩み寄って行った。

「早く！　早く入りなさい！　門が閉まるわ！」

門の上から慌てて砦に入る人たちに呼びかける赤色長髪の女性が居た。

門の先から大量の魔物が迫ってきているのだ。
騎士はすかさず門を閉めようとする。

「矢だ、矢を持ってこいっ！」

「早く門を閉めろ！」

「くそっ、やつらが来る季節じゃないだろ！」

「主の体当たりを耐えればやつら魔物は去る！
訓練を思い出せ！」

騎士たちはそれぞれの分担を必死にやる。
魔物の群れに大量の矢が放たれる。
人々は必死に砦へと向かう。

「・・・よし、退避は完了した！ 扉を閉めろお！」

「閉門を待ちなさい！ まだ残された人が・・・」

騎士の言葉と同時にゆっくりと門の扉が下りてくる。だが、まだ門の向こうには足をくじいて動けない青年と、泣きじゃくる女の子が残されている。

そしてその二人を救うべく黒く長い髪をした青年とピンク色の髪をした少女が駆けていた。

「ひい！ ま・・・魔物だあ！」

「し、死ぬう！」

必死に皆に着いた人々は次々にそれぞれの心境を口にする。だが、そこには娘が居ない事に気付いた母親の姿もあった。

「えっ！？ 噓、どこ！ どこに居るの！」

母親は皆の中に居ることだけを信じて娘を呼ぶ、だが、返事はない。その代わりに門の向こうから聞き慣れた泣き声が聞こえた。

「ま、待つて！ 娘が！ 娘がまだっ！」

母親は門を閉めようとする騎士を止めようとするが、大勢の命を抱えている騎士たちにとって、少ない犠牲だけで大勢の命を救われるのが一番の得策だ。

母親が泣き叫ぶかのような必死の願いに騎士俯くばかりで何もしない、何も出来ないのだ。

「す、すまない」

騎士はそう言うと門の扉を閉める。

「い、嫌あああああ！」

母親は我が子を助ける為に再び門の外に出ようとするが誰かに止められた。

「離して！　　離して下さい！　　あそこには・・・・・・・・あそこには娘がつ！」

「大丈夫ですよ」

完全にパニック状態の母親に落ち着いた感じの声で静止するように呼びかける青年。

「彼らが助けてくれる」

青年はそつと人差し指を門の外に向けるとそこには娘を抱えて走ってくる黒髪長髪の青年が居た。

黒髪長髪の青年は門の中まで女の子を運ぶと女の子がママのお人形を置いてきてしまった事を告げる。

するとまたその黒髪長髪の青年は門の外に出て女の子のお人形を拾いに向かった。

黒髪長髪の青年はお人形を拾うと何か向こうで愚痴り、急いで門に戻る。

だが青年の後ろには迫りくる大量の魔物たち。

「ハハハ、ユーリはお節介野郎だったんだな」

すると母親を静止させた黒い眼鏡を掛けた青年は黒コートを靡かせ

ながら門に近寄りそして、

「ユーリイイ！ 急げえええ！」

と黒い眼鏡を掛けた青年は何か黒い石を投げる。

いかずちのはな
「雷華」

黒い眼鏡を掛けた青年は手に雷をたくわえ黒い石に目掛けて雷を放つと黒い石が一瞬に雷の爆弾化となって紫色を放ちながら周りが放電した。

「どわっ！？」

ユーリは一気に飛んで砦の中に入り、門の扉も閉まった。

「ありがとうございます！ ありがとうございます！」

女の子を助けた黒髪長髪の青年、ユーリは涙を流しながら礼を言うてくる母親に困っていた。

「なんとお礼を言えばいいか」

「ああ、もう俺は良いからこっちに礼言えよ」

ユーリは壁に寄り掛かっていたヤスムネに振る。

ヤスムネも「この野郎」と思いながらユーリを睨むが母親が間に入り込み、ヤスムネにお礼を言いまくっていた。

やがてユーリとエステリーゼに助けられた人々は、礼を述べて去っていった。

「・・・みんなが無事で本当に良かった」

そうエステリーゼが言っているとペタリと座った。

「あ、あれ・・・」

「安心した途端にそれかよ」

ユーリは笑いながら一緒に座った。ユーリも人々を助けられた事に喜んでいた。

「てか、何でアンタまで皆^{みんな}に居るんだ？」

ユーリは壁に寄り掛かっていたヤスムネに声を掛けるとヤスムネは二人の前まで移動した。

「それはコッチの台詞だぜい、まあ大体は予想出来るけどな」

ヤスムネは眼鏡をクイツとあげて二人を見る。

「てか、さっきのアレはなんだったんだ？　　すげえビリビリだったぞ」

ユーリはヤスムネを見てそう言うと、ヤスムネはうんと悩みだして、

「秘密だ！」

と力良く答えた、ユーリ的にただ気になったただけだったので、

「じゃいいや」

と素っ気なく終わった。

「いや、聞けよ!？」

「アレはなんだったんです？」

とユーリの代わりにエステリーゼがヤスムネに聞いてきた、ユーリと違って本当に興味がある眼差しで聞いてきた。

「ん〜、まあその内教えてあげるよ」

ヤスムネはそう言って何処かに行こうとした瞬間に騎士たちがやって来た。

「その三人、少し話を聞かせてもらいたい」

だが、騎士が話し掛けるとほぼ同時に、遠くから別の声が聞こえてくる。

「だから、なぜに通さんのだ!」

緑色のフードを被った男が騎士ともめている。緑色のフードのそばには、大柄な男と少女がいる。

「くっ、これだからギルドの連中は！」

三人に質問して来た騎士も騒いでいる連中の所に行ってしまった。

（アイツらは……『魔狩りの剣』か！）

ヤスムネはその三人を見るとすぐに背中にあったフードを被った。

「どうした、ヤスムネ？」

ユーリは急にフードを被ったヤスムネに疑問に思い質問する。

「ちょバカッ、オレはヤスムネでは無い！ 私的事はミスター・ヤースと呼んでくれたまえ！」

急に一人称を私にしなヤスムネは顔を完全に隠すくらい深くフードを被る。

そんなヤスムネを無視してユーリは騒いでいる様子を遠目に見ている。

「あの様子じゃ門を抜けんのは無理だな」

「そんな……フレンが向かった花の街ハルルはこの先なのに」

「騎士に捕まるのも面倒だ。別の道を探そう」

ユーリはそう言うとおてもなく砦の周囲をぶらつく、すると赤髪の女性がユーリたちに話し掛けてきた。

「ねえ、貴方、私の下で働かない？ 報酬は弾むわよ」

そう言っただけ金がたっぴり入った袋を掲げる女性にユーリは無言で目を反らす。

いわゆるスルーだ。

「社長^{ボス}に対して失礼だぞ、返事はどうした」

「名乗りもせずに金で吊るのは失礼って言わないんだな、いやあ、勉強になっただわ」

「おまえ！」

赤髪の女性と一緒に居た、男性はユーリの態度に怒り、ユーリに詰め寄ろうとする男性を赤髪の女性は止める。

「予想通り面白い子ね、私はギルド『祝福の市場^{ギルド・ド・マルシェ}』のカンフマンよ。商売から流通までを仕切らせてもらってるわ」

「ふん、ギルドね」

ユーリはカンフマンと名乗った女性の言葉、『ギルド』に少し反応する。

するで、地響きが幾度も起こる。

「私、今、困ってるのよ。この地響きの元凶のせいで」

「あんま想像したくねえけど、これって魔物の仕業なのか」

ユーリがカンフマンに訪ねると代わりにヤスムネが答えた。

「平原の主ブルータルが群れでぶつかって、地響きがなっているんだ」

ヤスムネそう答えるとカンフマンは驚いた顔でヤスムネに聞いた。

「平原の主の名を知っているの!？」

「やべっ!と誰かから聞いたのだよ」

と顔を完全にフードで隠しているヤスムネはカンフマンの別方向に顔を向けた。

「うゝん、そう言えば貴方さっき魔物たちを一斉に倒した人よね!」

カンフマンはパーと顔が輝きを増す。ヤスムネはやべえ調子こいた、といった感じにユーリの背中に隠れようとするが、いつの間にかエステリーゼとユーリの犬であるラピードが居なくなっていた。

「おい、アンタ」

ヤスムネはユーリの背中に隠れながらユーリの質問に耳を傾ける。

「何かしら？」

「流通まで取り仕切っているのに別の道が分からないなんて無いよ

な？」

カンフマンはフンツと鼻を鳴らして「当然よ」と答える。

「なら、交換条件っていうのはどうだ？」

と言って来た。

ヤスムネは当然の如くやな感じがしたので、逃走しようとしたがしつかりとユーリに掴まれており、捕まれていた。

「ふむふむ、つまりその人と私の情報を交換しようって訳？」

「大して話してないのにどうしてそんなにスムーズに話が進んだ！？」

本当に当然の如く話が進んだ事にヤスムネは恐怖しているとカンフマンはその艶やかな妖艶の笑みを浮かばせてヤスムネの襟首を掴む。

「ここから西、《クオイの森》に行きなさい。その森を抜ければ、平原の向こうに出られるわ」

「ふっ、交渉成立だな」

ユーリはヤスムネを離してカンフマンはそのままヤスムネの襟首を掴んでズサァーと近寄らせる。

「礼を言っぜ、ありがとうな、お姉さん。ソイツは馬鹿だけど強いから安心しな」

「あら、そうなの！」

カンフマンはヤスムネを見て微笑む。

「うおい！ ユーリィ！ テメエ仲間を売る気か！？」

ヤスムネは最後の抵抗でユーリにそう聞く、すると、

ニヤッ

ユーリには考えられない微笑みを浮かばせながらエステリーゼの元に消えて行った。

「・・・なッ!？」

ヤスムネは思った。

アイツ、最初からオレを騙して・・・!？

「それじゃ宜しく頼むわよ、ヤスムネくん♪」

皆の救出劇（後書き）

ヤスムネ

『祝福の市場』ギルド・ド・マルシェの部下……にはなっていないですよ？

一時的傭兵みたいな感じですね。

感想やコメントをお待ちしてます、気軽に書いていってくださいね
○（＾－＾）○

平野を越えて（前書き）

凄い・・・・・・・・。

自分でも信じられない程に投稿してってます！

まあ急いで書いていたので、誤字脱字があると思います（TOT）

すみません！

今回は原作に無かった話です、オリジナル話です！

感想やコメントを待っています！

お願いします！

平野を越えて

《幸福の市場》 ギルド・ド・マルシェ

ギルドと帝国の壁を超えて、世界各地にマーケットを展開させている商業ギルド。帝国とも友好関係を築いている。

「そのお陰で帝国内を自由に動き回る事ができる免状を発行されている」

何台もの荷馬車が移動している中、赤髪に長髪、そして眼鏡を掛けている大人な女性は手綱を握り、馬を動かしながら隣に座る。気だるそうにして、暑い日差しが照らしているにも関わらず黒いコートに付いているフードを被り、顔が見えないくらいに隠していた。

「あら、貴方わたしたちのギルドの事分かるの？」

赤髪に眼鏡を掛けた女性、メアリー・カウフマンはぶつぶつと呟いていた黒いコートを着た青年、ヤスムネに聞いた。

「ちょっとね」

ヤスムネはさっきまでユーリに売られた事にショックを受け、ずっと寝ていたのだがカウフマンに話し掛けられ、話す内にだんだんと機嫌を治して行った。

「そして発行されている代わりに帝国法に乗っ取った商品を取り扱

っている……」

「……そこまで知っているなんてね、貴方何者？」

カウフマンは少し目を細めて隣に座っている青年に訪ねると、

「……ただの暇人だ」

ヤスムネはそう言うときまた荷馬車の上に寝転がる。

そんな態度を取っていたヤスムネに怒りを覚えたのか、カウフマンの近くの荷馬車から声が飛んできた。

「ねえ、アンタ！　真面目に私らを護衛する気あるの！」

と声を飛ばしてきたのは、若い女性の人で髪は紫色、そしてまた眼鏡を掛けた人だった。

「ん？　あの娘は？」

ヤスムネはその声をだした若い女性に顔を向けさせながらカウフマンに聞いた。

「あの娘は最近『幸福の市場』ギルド・ド・マルシェに入った新人さんのミミ・ズールスよ」

カウフマンも前を向きながらヤスムネに答える。

ヤスムネはその名前を聞くと、

「ミミか……」

まるで何か懐かしむような声をだしてミミの方に顔を向けてそして、

パタパタ

手を降った。

「バツ、バカにしてるのアンタはあああ!？」

ミミは勿論怒った。

そして手を降ったヤスムネはまた寝た。

「くうう!!」
社長!^{ボス} 馬車止めてください、ソイツ殴ります」

ミミはバシッバシッと手を握って掌に打ち付ける。

カウフマンはそんなミミを軽く宥めて荷馬車に集中させた。

すると、いきなり後ろから大きな声が飛んできた。

「社長!^{ボス} デイドン砦に体当たりしてきた魔物たちの、平野の主
が迫ってきましたああああ!!」

その声を聞いた瞬間に荷馬車を動かしていた『幸福の市場^{ギルド・ド・マルシェ}』の一員
たちは一斉に焦る。

「くっ! ちゃんと砦^{めし}から主が消えるのを確認してから出立した
のよ、なのにどうして!」

「魔物たちは人間の予想を上回ることがある、それが今だってことだよ、ミス・カウフマン」

ヤスムネはそう告げるとバツと荷馬車から降りる。

「なっ！ 無茶よ、普通の魔物なら貴方でもいけるかもしれないけどアレは駄目、無理よ！」

カウフマンは荷馬車を止め、ヤスムネを戻るように呼びかけるが一向に戻らない。しかもどんどんと進んでいく。

「待ちなさい！」

「先行つてな、オレの護衛術ちからを見せてやる」

ドンドンて地響きを鳴らしながら迫りくる平野の主と魔物たち。カウフマン以外の人たちは少し離れた所で社長ボスであるカウフマンを待っていた。

ヤスムネは迫りくる魔物たちに走りだして迎え撃った。

「黒砂石こくさせきがだんだんと無くなっていくなあ、イエガーに頼むか」

そう言うとヤスムネは懷から漆黒の石を出して魔物の群れに投げ入れそして唱える。

「下突く雷色の針しんと化せ」

ヤスムネは手を魔物たちに向け、

そして、

「雷^{らい}華・波針点！」

放つ。

そして次の瞬間、

バチバチバチイイ！！

ヤスムネの投げ入れた漆黒の石が一瞬にして雷爆発して魔物たちを麻痺させて動かせなくした。

雷が波のように周りに流れ放電。魔物たちは倒れていく。だが、まだ効いていない魔物が居た。

その魔物とは『平野の主』であるブルータルだった。

ドスンドスンと猛々しくカウフマンに迫っていく『平野の主』ブル

ータル。

「くっ！」

カウフマンも覚悟を決めて瞳を瞑る、だが、

「瞑るのかい？」

カウフマンの近くからヤスムネの声が聞こえたと思った次の瞬間に、

『ブオオオオオオオオオオオオオオ！』

カウフマンの荷馬車を襲うとした『平野の主』ブルータルはズシイ
イーン！！ と地響きを鳴らして倒れた。

「オレの護衛術チカラ見れないで終わっちまったな」

カチンと鞘に刀を収めたヤスムネはズシンツとまたカウフマンの
隣に座った。

「仕事は終わったぜ」

カウフマンはヤスムネが仕終えた護衛術しゅぎゅつの光景を見て驚愕した。

大量に迫り狂っていた魔物たちを一瞬にして動かせなくし、『平野

の主』と呼び讃えられたブルータルを、刀の一撃で倒した。

「貴方、本当に何者よ」

ミミは驚いていた、迫り来る大量の魔物たちには無い。

その魔物たちに立ち向かった黒いコートを着た青年に驚いていた。

（あ、あんな大量の魔物相手にあの人は何をしようとしてんのよ！？）

ミミは非常時の為、荷馬車を全力で走らせていた。

理由は社長であるカウフマンからの教えでもある「商品安全第一」にであるからだ。

ミミは他の仲間たちと一緒に大量の魔物たちから逃げているが、社長であるカウフマンがまだ青年を待っていた。

カウフマンは青年に必死に呼びかけているが青年は尚も魔物たちへと向かう。

「危ないぞ、あの青年！」

「何で逃げないんだ！」

「社長が居ないぞ！？」

と他の仲間たちも青年が魔物たちに立ち向かっているのに気付いたり、まだ逃げていない社長に気付いたりと必死だった。

そしてミミの脳裏には昔所属していたギルドの首領の姿を思い出していた。

大量の魔物たちから仲間を護った首領^{ボス}の姿を、

「あつ……！」

ミミは大量の魔物の群れに何か黒い物体を投げて、何をするのだと思った瞬間、魔物の群れの周りに雷が波のように流れた。その雷の波を食らった魔物たちは次々と倒れていった。

（なっ！ ああ技は！？）

ミミはその技に見覚えがあつた、その技は昔見た事があつたのだ。だが、効いていない魔物が居た。それは『平野の主』と呼ばれているブルータルだった。

ブルータルは荒高い咆哮を放ちながらまだ逃げていないカウフマンに襲うとした、だが、

『ブオオオオオオオオオオオオ！』

『平野の主』であるブルータルは苦痛を浴びた声を鳴らして倒れていた。

そしてカウフマンの荷馬車には刀を鞘に収めて何事もなかったかのように座る黒いコートを着た青年が居た。

「えっ……！……いつの間に」

ミミは外面は驚いていた内面は落ち着いていた、また知っていたのだ。その“技”

「花の街ハルル」か」

《花の街ハルル》

なだからかな丘に築かれ、その中心にそびえ立つ大木が特徴的な街だ。

大木の花の咲き乱れ様があまりに見事なことから『花の街』と呼ばれるようになったらしい。

その街にヤスムネ訪れていた。

「・・・・・・・・」

カウフマンたち『幸福の市場』ギルド・ド・マルシェとは街の外で別れた。
ヤスムネの代わりに傭兵ギルド『蒼き獣』という青い服が目立つ者

たちに護衛してもらうつらしい。

そして『幸福の市場』^{ギルド・ド・マルシェ}と別れる時、ヤスムネに文句を言っていた紫色の髪をした若い女性、ミミ・ズールスが話し掛けてきた。

「あの、その、」

ミミは少しオドオドしながらヤスムネに訪ねようとしたがヤスムネはミミが訪ねようとする理由を悟ったのか、ここで、

「惚れたか！」

わざと空気を変えるためにそう言った。

ヤスムネ的には、女の子にカッコイイ所見せっちゃったから、これイけるんじゃない？的な事を少し自信を持って思い待っていると、

「違います！！ 全然！」

完全否定されてしまった。

「ガバツ！？」

ヤスムネは胸に手を添えて膝を地に付けた。

本当にちよこつとだけ、ちよこつとだけ希望もって待ってた結果がこれだったのでヤスムネは精神的ダメージを受けてしまった。これがさつき大量の魔物たちを止めた人とは思えなかった。

「あ、いや、すみません」

ミミは以外にも傷付いてしまったヤスムネに謝る、ヤスムネはヒュ

ツと立ち上がり「問題ありまひえん」と真顔で言った。
完全に焦ってました。

そんな少し情けないヤスムネを見てミミは思わず、笑ってしまった。
笑っているミミを見たヤスムネはホッとした表情でミミを一時見た
後、ヤスムネは、

「それじゃオレは行くよ、大好きな商業の仕事頑張れよ“ミイ”」

そう告げたヤスムネはハルルの街へと入って行った。

そんなヤスムネの後ろミミはまた驚いた顔で見っていた。

(“ミイ”って、むかし首領^{ボス}が私に付けてくれた愛称^{ニックネーム}……、
それに私が商業関連が好きって事が分かるって……あの人やっぱ
り)

ミミが考えているとカウフマンに呼ばれた。

「ほーら、そろそろ行くわよ、ミミー」

「あっ、はい、今行きます」

また会えるよね。

ミミはそう思い、荷馬車の手綱を握ったのであった。

平野を越えて（後書き）

今回からスキット風にやっていきたいと思います♪

後書きを♪

《寂しい》

ヤスムネ

「はぁ、まさか情報とオレを交換するなんて、ユーリのやろつ会
つたら覚えてやがれい！」

ヒュッッ

ヤスムネ

「……ユーリの奴が覚えて無かったら、どうしよう……
」

ヒュッッ

ヤスムネ

「・・・風が冷たい、心が寂しい、腹が減った、ユーリへの憎悪増幅、ユーリ許さない覚えてろ」

花の街ハルル（前書き）

花街ハルル編です！

夜中に更新！

眠ッ！

花の街ハルル

カウフマンの、『幸福の市場』ギルド・ド・マルシェの護衛を終えたヤスムネはと言うと宿屋で休んでいた。

「まさか結界魔導器シルトフラスティアが壊れてるなんてな、この季節に魔物に襲わりやそうなるか？」

ヤスムネは宿屋の寢床にある窓から外を眺める。

そこには植物と融合し有機的特性を身に付けたことで進化をしたハルルの大樹が枯れ始めている所だった。

ヤスムネは街に入るなり、街の人たちが怪我をしていたので何事かと思い住民に聞いてみた所、毎年、満開の季節が近付くと一時的に結界が弱くなるらしい。

そして、そこを魔物たちに襲われ、結界魔導器シルトフラスティアが壊れたとことを聞いた。

ヤスムネは治癒術は使えなかったが、ここまでに来る途中に『幸福の市場』ギルド・ド・マルシェから色んな薬や薬草といった物を買っていた。

カウフマンは護衛をして貰ったのだからタダで良いと言ってくれたが、そこはヤスムネは断った。

そしてその薬や薬草を使い住民たちに分け与えた、と言うか全部あげてしまった。

それを感謝した街の住民は宿屋を無料で提供してくれたのだ。

ヤスムネはまた断ったのだが、住民が「是非とも泊まって行ってください」と頭を下げて言ってきたので、ヤスムネは渋々了承した。

「ふう、ずっと宿屋に居るのも退屈だ。外の様子でも見てこようかな」

ヤスムネは宿屋から出ると何やら騒いでいる所があった。

「ん？ 何かあったのか」

ヤスムネは騒いでいる所へと向かった。

「いやはや、これほどの治療術があったなんて・・・」

「いえ、そんな、ぜんぜん・・・」

人だかりに怪我をした住民に治療術を使って治しているピンク色の髪をした女性が老人からお礼を言われていた。

「なんとお礼を言えばいいか」

「いえ、本当にいいですから」

ピンク色の髪をした女性は本当に遠慮している。
ヤスムネはその人だけに何気なく入って会話を聞いていた。

「謙虚なお嬢さんだ、騎士団の方々にも見習ってほしいものです」

一人の老人がそう言うと一緒に居た女性もその事について一緒に愚痴る。

「まったくですよ！ 騎士に護衛をお願いしても、何もしてくれないんですから」

「うそ・・・そんなはずは・・・」

ピンク色の髪をした女性はその話を聞いて少し悲しそうな顔をして俯いてしまった。

（んっ？ あの可愛い娘ちゃんは、エステリーゼちゃん！）

ヤスムネは老人たちと話しているピンク色の髪をした女性を見て、
エステリーゼだということに気付く。

そしてヤスムネにとって一番重要な人物を探していると、

（居やがったああああああああああああああ！！！！）

エステリーゼ居る所にユーリ在りとはこの事よ、とヤスムネはエステリーゼから少し離れた所にユーリが居るのに気付いた。

（キヒヒヒッ！ ユーリ・ローウェルウウウウ）

何処かの赤い髪に二つの武器を振り回す戦闘狂と同じような反応を頭の中で思い浮かばせているヤスムネは気配を消してハルルの樹へと向かっている二人の後を追った。

「近くで見るとほんと、でっけ」

「もうすぐ花が咲く季節なんですよね」

「どうせなら、花が咲いているところ見てみたかったな」

「そうですね、満開の花が咲いて街を守っているなんて素敵です。わたし、フレンが戻るまで治療を続けます」

ユーリとエステリーゼはハルルの大きな樹を見て驚いていた、それもそのはず、このハルルの樹はまるで街全体の傘のように覆っているかのようだからだ。

そしてユーリはふとハルルの樹に埋め込まれている結界魔導器シルトプラスティアを見て呟く。

「なあ、どうせ治すんなら、結界の方にしないか？」

「え？」

（え？）

最後のは後から付いて来ているヤスムネの心の中の声だ。

（結界を治す気か？ それならパナシーアボトルが必要だが、確か材料はと、）

ヤスムネは懷から何か本のような物を出して調べると、

（『エッグベアの爪』と『ニアの実』、そして『ルルリエの花びら』の3つか……」

ヤスムネは本を読みながら考えているとふと閃いた。

（確かエッグベアは“クオイの森”に生息しているな、あの様子だとユーリたちはクオイの森に戻る……クフフフ、良い復讐劇が出来そうだぜ）

アハ、アハハ、アアーハッハッハッと突如笑いだした青年・ヤスムネに周りの人たちは痛い目でヤスムネを見ていると、手作りの武器を持った子供たちに囲まれる。

「コイツ変だぞ、きつと魔物だ」

「魔物が人の皮を被っているんだ」

「だよな？ じゃないとこんな人前の所でアホ面さらすハズないもんな」

子供は手作りの武器でヤスムネを突つつき始めた。

「アッハッハッハ！ ……って痛い、ちょ痛ッ、痛いって！」

笑っていたヤスムネはやつと自分が子供たちに突っつかれているのに気付いて痛がっていた。
終いには「このガキヤアアアアアア！」と子供たちを追いかけて回っていた。

子供たちは良い遊び相手を見つけて嬉しがっていた。

場所が変わって「クオイの森」。

「ハアハア・・・あのガキンちよ共、ハアハア、とんだだけ体力を有り余っていやがるコンチクショ」

ヤスムネはあの後、子供たちを追いかけて回して、ユーリたちが「クオイの森」に向かったと老人から聞いて、全力速で「クオイの森」に向かい今着いた。

「ハアハア、ユーリの野郎どこかな」

ハアハア

なんか感じが変質者っぽいヤスムネがユーリたちを捜していると、

「くさっ！？」 なんじゃこの匂いは！」

ヤスムネは臭い匂いをする方向を見てみると大きなバックを肩に吊るしている少年と、少年の数歩下がった所にユーリとエステリーゼ、そしてラピードが進んでいた。

ヤスムネは草むらから三人と一匹の様子を伺っていた。

（キヒヒヒッ 見つけたぜユーリィィ！）

ヤスムネは刀の柄を握って様子を見てみると、

ガサガサっ

ん？ とヤスムネは後ろを振り向くと、

（エエエエエ、エッグベアちゃん！！！？）

腕が異様に大きな魔物エッグベアはヤスムネの後ろに立っていた。

ズズズシッ

エッグベアはヤスムネを見向きもせずユーリたち（大きなバックを持った少年）の方に歩いて行った。

「ち、チビるかと思った」

ヤスムネはビクビクとしながらユーリたちを見ている。

「うわぁあああっ！」

「こ、これがエッグベア・・・？」

少年はコクコクと頷いていた。

「なるほど、カロール先生の鼻曲がり大作戦は成功ってわけか」

「へ、変な名前、勝手に付けないでよ！」

「そういうセリフは、しゃきつと立って言うもんだ」

エッグベアは容赦無く三人に襲い掛かってきた。

凶暴なエッグベアは、鋭い爪で地面をえぐる。

ヤスムネは戦っているユーリたちを見て少し関心していた。

「ほほう、ユーリの野郎、ちゃんとあの少年やエステリーゼちゃんを気配って戦ってんのか。器用な奴だねえ」

ヤスムネがそんな風に傍観していると、エッグベアを見事に倒したユーリ一行。

さてと、

復讐劇の始まりだぜ

エッグベアを倒したユーリたちは爪を剥ぐ為にエッグベアに近付いて爪を剥がそうとしていた。

「も、もう動かないよね？」

少年がエッグベアに近付き、ユーリが彼の背後に回り、ニッと笑ったあと・・・。

「うわあああああ！」

「ぎゃああ~~~~っ！」

「ふぎゃあああああああああ！？」

ユーリは少年を驚かせ、少年は見事に悲鳴を上げた。

そしてまた、ユーリの背後ら辺からも悲鳴が聞こえた。

「驚いたフリが上手いなあ、カロール先生は」

「あ、うつ……はっはは……そ、そう？　あ、ははは……」

「そももって後ろからも悲鳴が聞こえたんだが、ここは敢えてスルーするか」

ユーリは背後から聞こえた悲鳴をスルーしてエッグベアのそばにしゃがみこんで、爪を手に入れた。

「鼻、大丈夫か、ラピード？」

ラピードはスンツと鼻を鳴らして見せた、どうやら少し鼻に匂いが残っているらしい。

ユーリたちは「クオイの森」の入口まで戻ってみると、そこには、

「ハアハア、ち、チビる」

見覚えのある青年が涙目になって座っていた。

「やっぱ、アンタだったか」

「てめえ、くそユーリ！　何であの場面で大声出しやがる！

オレがお前に対する復讐劇がものの一秒で終わっちまったぞ!？」

「んなこと知るかよ」

「なな、なににに!」

そう、情けなく涙目になっていたのは、皆でカウフマンに情報と交換したヤスムネだった。

「え、誰この人？」

大きなバックを吊るしている少年はヤスムネを勿論知っていなかった。なのでユーリに聞く。

「脱獄者だ」

「えっ!」

「いや待て、お前もだろうが!」

ヤスムネはバンバンと地面を手で叩いてユーリに聞くがスルーされる。

「まあ良い、まだ復讐劇は始まったばかり——」

ヤスムネは手をグーにしてポキポキと鳴らしていると、

「ユーリ・ローウェル! 森に入っただのは分かっている! 素直にお縄につけい!」

「この声、冗談だろ、ルブランのやつ、結界の外まで追ってきやつたのか」

「・・・・・・・・」

ルブランによって打ち消されたヤスムネのセリフ。
ヤスムネは手をプルプルとさせて、

「ユーリのバーカ、バーカ、長髪ロン毛野郎！」

となんとも低レベルな悪口をユーリに言っ
て森から猛ダッシュで駆け
て行った。

「よ、夜になつとる!?!」

ヤスムネはハルルに着いて、ふと空を見てみる
ていつの間にか夜空へと代わっていたのだ。

「取りあえず、ハルルの樹に向かうか」

ヤスムネはハルルの樹の根本に向かう、すると根本にはハルルの樹が治ると聞きつけた街の住人たちが集まっていた。

「おお、貴方はさっき我らに薬や薬草をお分け下さったお人」

「やあじいさん」

ヤスムネは一人の老人に話し掛けられ、片手を上げて挨拶をする。

「それで、パナシーアボトルとか言う、その薬は？」

「たぶん今頃出来上がって持って来るハズ――」

とヤスムネがそう老人に言うとき坂の下から上がってくる三人組と一匹がやって来た。

「お、居やがる」

「あ、ヤスムネさん」

「やあやあエステリーゼちゃん、相変わらず可愛いね！」

ヤスムネはエステリーゼに微笑みながら返すが、ユーリには睨むを利かせていた。

「おおつ、毒を浄化する薬ができましたか！？」

とハルルの長らしき老人がユーリたちに近付いて来た、ヤスムネがさっきまで話していた老人だったのだ。ユーリはパナシーアボトル

を使って毒を浄化させる為に少年・カロールにパナシアボトルを預けた。

樹の根本でカロールがパナシアボトルを使うと、樹が光を放ち始める。

「樹が……」

エステリーゼは樹に取り込まれている。シルトプラスチック結界魔導器が放つ光に驚いていた。

「お願いします。結界よ、ハルルの樹よ、よみがえってください」

ハルルの長らしき老人はハルルの樹復活の為に祈っていた、他の住人たちも祈っていた。
だが、ほどなくして光は消えてしまった。

「そ、そんな……」

ハルルの長は残念そうな表情になっていた。

「うそ、量が足りなかったの？ それともこの方法じゃ……」

「もう一度、パナシアボトルを」

エステリーゼは再度パナシアボトルを造りだそうとよろず屋に駆け込もうとしたが、

「それは無理です、ルルリエの花びらはもう残っていません」

「そんな、そんなのって……。……お願い」

ヤスムネは残念がっている人ばかりの中、エステリーゼに集中させる。

「エステル？」

「咲いて……」

ハルルの樹に閃光が走り、あたり一面に光の粒子が舞う。そして、樹はみるみるうちに生氣を取り戻し、葉をつけ、花を開く。結界が再生したのだ。

「ず、凄い……」

カロルのパナシアボトルで復活しなかったハルルの樹はエステリーゼの祈りで治ったのだ。

そして、その中でヤスムネはエステリーゼの能力に驚いていた。

（……………何だ今のは？）

ヤスムネがそう考えているとエステリーゼの周りには感謝する住人で一杯になっていた。

「ありがとうございます、これで、まだこの街もやっていきます……」

ハルルの長である老人は何度も深く頭を下げてエステリーゼに感謝していた。

「わ、わたし、今なにを……？」

「・・・すげえな、エステル、立てるか？」

力を使つて疲れたのか、座っていた。

そして立ち上がるエステリーゼ、カロルはユーリに近付き、手を掲げる。

「ユーリ！」

カロルとユーリはハイタッチを交わす。二人はにっこりと笑う。

「フレンのやつ、戻ってきたら、花が咲いてて、びっくりだろうな。・・・ざまあみる」

「ユーリとフレンって不思議な関係ですよ。友達じゃないんです？」

「ただの昔馴染みっただけだよ」

ユーリとエステリーゼたちが話し込んでいる中、ヤスムネは微笑みながらそのやり取りを見ていた。

（まあ、別に今は喜ぶとしますかね）

ヤスムネがそう考えていると遠くから怪しい声が聞こえた。ハルルの樹の向こうに、黒装束の男とザギの姿があった。

「アイツらは・・・」

ヤスムネは刀の柄を握って黒装束の奴らに近付こうとしたが、

グイツ！

と誰かに腕を持って行かれていた。

「んんんんっつ！」

ヤスムネはグイイイーと力強く引つ張られてハルルの入口まで引き寄せられて行った。

「ここまで来れば安心ですね」

「何だ何だ！」

引き寄せられたヤスムネは引つ張ってきた人物に目を向けるとそこには、

「お久しぶりです！」

「相変わらず、呆けてて馬鹿っぽい顔だったよ」

そこには薄水色のした短髪に学生のような制服を着た少女と、薄そうな生地 of 服に腹を出し動きやすそうに太股を出し、肩も露出しているポニーテールの少女たちがニコニコしながらそこに居た。

「お、お前ら！」

ヤスムネは女の子たちを顔を見るなり、少し疲れた顔を浮かばせた。そして二人の少女は互いに見合いつてヤスムネを元気良く呼んだ。

「「元気にしてた、^{ボス}頭領！」」

花の街ハルル（後書き）

スキット

《ヤスムネって何者？》

ユーリ

「ヤスムネってやつ、なんとなく憎めないんだよな」

エステル

「面白い人ですよね」

ユーリ

「まあ、面白いわな」

カロル

「ねえ、そのヤスムネっていう人って、「クオイの森」の入口に会った人？」

ユーリ

「ああ、そうだよ」

カロル

「なんかあの人、ユーリに向かって『復讐劇はまだ終わっちゃいねえ！』とか言っただけだった？」

エステル

「ああ・・・、そういえば言っていました」

ユーリ

「・・・言ってたっけかな？」

カロール

「言ってたよー！　で？　あの人に何したの？」

エステル

「わたしも気になります」

ユーリ

「・・・んー、そうだな、情報とアイツを交換したって言えば分かるか？」

カロール

「えええええ！　な、なにソレ！？」

エステル

「だ、だから「デイドン砦」からヤスムネさんを見掛けなかったのですね・・・」

ユーリ

「ああ、良い買い物だったな」

カロール・エステル

（（ヤスムネさん、可哀想な人））

学術閉鎖都市アスピオ（前書き）

リタが出るまで、道険し！

オリジナルキャラが出て来ます！

あと何か作者のコメディっぽくなってます。

今までのテイルズでは考えられません（＜――＞・・）ゞ

学術閉鎖都市アスピオ

今ヤスムネは世界中の魔導士が集い、帝国魔導器研究所が置かれ、街自体が巨大な研究施設として機能している街。

《学術閉鎖都市アスピオ》

に居た。

「うわぁーお、相変わらず暗いとこだな、ここは」

ヤスムネはトントンと肩に担いでいた刀を鳴らして呟く。

「そうです、ここは世界中の魔導士が集まる場所ですからね、明かりなんて、本や実験に使う時以外は全つつ然使って無いですね」

と少し元気よく返事を返してくれたのは、薄い感じの緑色をした学生服を着て、薄水色の短髪が似合う少女がヤスムネの先頭に立ってアスピオの中を案内していた。

てかさ、とヤスムネは薄水色の短髪をした少女に訪ねる。

「どうして、スフィルとキュウが俺の迎えに来たんだ？」

スフィルとキュウと呼ばれて二人の少女はヤスムネと向き合う。

「それはですね、聞きたいですか？」

うふふ、と勿体ぶっている薄水色の短髪少女・スフィルは短いスカートをはひらひら揺らせてヤスムネに答える。

「私とキューちゃんはネイビーさん、まあアスピオではネイビー博士？　先生？　教授？　に頼まれて頭領^{ボス}を捜していたんですよ」

「あまりにも変わってなかったからすぐに見つかったよ」

キュウと呼ばれた栗色ポニーテールの少女は笑いながらテクテクと歩いて行く。

「ネイビー？　ネイビーって、あのネイビー？」

「どのネイビーさんが居るんですか」

大丈夫ですか？　と心配するスフィルはヤスムネの手を取ってアスピオの街中に入る門に來ると、

「通行許可証の提示をお願いします」

門番である兵士がヤスムネたちへ訪ねてきた。

「私たちは帝国魔導器専門最高責任者で居られるコン・ネイビー博士の助手であるスフィル・アウランドと・・・」

「その護衛役を務めているキュウ・ヒュセンです」

「ネ、ネイビー博士だって!？」

「嘘だろ、まさかネイビー博士絡みか！」

兵士たちは“ネイビー”と聞いた瞬間にガタガタと震えだした、鎧にもカタカタと音が鳴る。

スフィルとキュウは門番である兵士にお辞儀をして内容を話す。

「私はネイビー博士の友人である、このヤスムネさんのお迎えにアスピオの外に外出しました。そしてこれが通行許可証です」

スフィルは何処からともなく出した通行許可証を門番の兵士に見せる。

すると、渡された許可証を見て兵士は驚いた。

「こ、こ、これは帝国機密第一線禁行兵器取扱魔導印証ではないか！」

「あ、間違えちゃいました」

スフィルはばつと兵士から間違えた物を奪い取って、本物の通行許可証を渡した。

「なッ、帝国機密第一線禁行兵器取扱魔導印証って、移動要塞ヘラクレスの魔導器を取り扱う許可証ではないか！」

「すみません、それはネイビー博士の物です」

兵士たちは一気に黙ってしまい、無言で通行許可証をスフィルに渡して門を開けた。そして何気に震えていた。

（帝国機密第一線禁行兵器取扱魔導印証を見せられたら、開けない訳にはいけねえよな、後なんかありそうだけど）

ヤスムネは苦い顔をして兵士を眺めながらスフィルたちとアスピオの街中へと入って行った。

「なあ、アイツなんかこの街で仕出かしたのか？」

「ネイビー博士は悪い事はしていませんよ！　ただ……」

ヤスムネが歩いているスフィルたちにネイビーの事を聞くと暗い顔をする二人。

「そのね、ネイビーさんは“過保護”なのよね、スフィ」

「うん、過激過剰な程にね」

アハハ、とスフィルはタラーと汗を流して苦笑いし、キュウはハアと溜め息を吐いていた。

「それで、過激過剰過保護博士とやら何処に居るんだ」

今ヤスムネとスフィル、キュウはアスピオの街中にある、お店で少し休憩していた。

「それよりも教えて下さい」

ヤスムネのネイビーに対しての問題発言を見事にスルーしてスフィルは真剣な眼差しになってそう言つとキュウも真剣な顔になる。

ヤスムネは少し、いや、かなり疲れたような顔をしてスフィルたちと向き合う。

「どうして、どうしてギルドを解散させたのですか！」

スフィルはドンツと座っていた机を叩いた。

あいにくアスピオの人間は家から外に出る者が少ないため店にも大した客が居なかった。だが、少ない為にスフィルたちの話と机を叩いたことにより必然的に注目の的となる。

「そんな大声で言うなって、皆が見てるぞ」

「大した客が居ないけどね」

大声を出したスフィルと変わってキュウはヤスムネをジッと見ながらそう言った。

ヤスムネもバツが悪そうにしていると、門の方から何か聞こえてきた。

「ほら、何かあったみたいだぜ、見に行こ、見に行こ」

「ああー！　　こちらあ！　　待って下さい」

「はあ、ネイビーさんもあの人と一緒に、何を考えているのやら・・・行こうよ、スフィ」

「むう」

スフィルは柔らかそうな頬を膨らませてキュウと一緒に門の方に向かったヤスムネの後を追ったのであった。

「ここからは通行許可証が無ければ街の中に入れん」

門番の兵士は入ろうとした人たちにそう言い。

「許可証・・・ですか・・・？」

「ここは帝国直属の施設だ。一般人を簡単に入れるわけにはいかない」

通行許可証が無かったのか、その入ろうとした人たちは門番に掛け合う。

「中に知り合いがいただけ、通してもらえない？」

「正規の訪問手続きをしたなら、許可証が渡っているはずだ。その

知り合いとやらからな」

「いや、何も聞いてないんだけど。入れないってんなら、呼んできてくれないかな？」

兵士はふうと溜め息を吐きながら聞いた。

「まったく、……で、その知り合いの名は？」

「モルディオ」

その名を聞いた兵士たちは一瞬にして固まった。

「モ、モルディオだと！？ や、やはり駄目だ。書簡にてやり取りをし、正式に許可証を交付してもらえ」

何故か兵士は手に持っている槍をギュウッと握り締めてガタガタと震えていた。

「ちえ、融通きかないんだから」

入れない事を知った人たち、黒い髪 of 青年とピンク色の髪 of 女性、そして大きなバックを肩に吊るしている少年、あと一匹の犬が居た。

「あの、フレンという名の騎士が、訪ねて来ませんでしかか？」

「施設に関する一切は機密事項だ。些細なことでも教えられん」

「フレンが来た理由も？」

「もちろんだ」

「……ということは、フレンはここに来たんですね！」

「し、知らん！ フレンなんて騎士は……」

「じゃあせめて伝言だけでもお願いできませんか？」

「やめとけ、こいつらに何言っても時間の無駄だって」

そう言いと黒い髪の青年はピンク色の髪の女性と少年、犬は門から離れて行った。

そして門から青年たちが去った後すぐにヤスムネは門に着いた。

「なんかあったのか？」

ヤスムネは一人の兵士に訪ねた。

「え？ ああ、今街に入りたいと言った奴らが居てな、通行許可証が無いのに入ろうとしたので追い返したのだ」

兵士は少し疲れたような声だった。

「まさか今日一日でこの街の有名な人に会いに来た人が訪ねてくるとは」

「有名人？」

「知らないのですか」

ヤスムネがネイビーが有名人だって？ と首を傾げていた所にも
う一人の兵士が話し掛けていた。

「貴方はネイビー博士の知人と聞きましたのでとくに知っている
のかと」

「いや、知らねえな。だって俺は旅でぶるらぶるらとしてたんで
な。アイツとは昔以来会っていない」

ネイビーをアイツ呼ばわりしたヤスムネに驚いていた兵士たちは、
ブルブルと震えだして答える。

「ネイビー博士は昔この街の長であつたネビリム博士の生まれ変わ
りと言われる程の鬼才の人だ」

「そのネイビー博士は次々と次世代型と言っている程の魔導器を開
発した人で、さっきも少し言いましたが、帝国の兵器である移動要
塞ヘラクレスの心臓部分の魔導器を唯一取り扱うことが出来る人な
んです」

「ほへえ、アイツがそんな事を」

ヤスムネは腕を組んでネイビーの凄さを知った。

「ですが……………」

「ああ……………」

だが兵士たちはダラ〜ンとした声で話す。

「あの人は、モルディオに何かと甘いんだ」

（あれ？　モルディオ？　どっかで聞いたような）

「そうなんです、この前なんかモルディオの実験の爆発で多くの被害を食った、にも！　関わらず」

「ああ、だめだ、俺はもう思い出したくないね」

ヤスムネが最初に話し掛けた兵士は元いた立ち位置に戻った。

「……………私も話し過ぎました、勤務中に、すみませんがこれで」

そして話し掛けたきた兵士も仕事である門番の立ち位置に戻る。

「あのヤロウは何したんだ、スフィルにキュウ」

と黙ってヤスムネの後ろにずっと立っていたスフィルとキュウにヤスムネは聞いた。

「……………過激？」

「……………過剰？」

「そんで過保護かよ」

スフィルとキュウは首を可愛く傾げて順番に言うと、ヤスムネは門から出て行く。

「……！……何処に行くんですか」

スフィルはいきなり門から出ていったヤスムネに驚いて一緒に来る。

「あ、じゃ、私も」

とキュウも一緒に門から出る。

「オレはさつき門に来た奴らを捜してくるだけだよ、もしかしたら知り合いかもしれんからな」

「言つときますけど、街に入れるのはネイビー博士の友人であるヤスムネさんだけですからね？」

「アハハハ、なんか一緒に連れて来ちゃいそうだもんね、ヤスムネさん」

「あん？　舐めんなよ、オレは復讐するべく相手を捜しているのさあ」

「ふ、復讐ってなんですか！」

「穏やかじゃないよね」

「ふん、まあ、昔の話なんだがな、オレはアイツを許さねえ！」

「はあ、こりやまたふざけているだけですか」

「ヤスムネさんは簡単な挑発とかに乗る人だよな」

スフィルとキュウはヤスムネがどんな奴なのか知っているらしく、二人とも見事にスルーして話を進ませる。

「ヤスムネさん、本当に駄目なんですよ。アスピオには色々な魔導^{ブラステ}器^{イア}の改造の設計やらがあるのですから」

スフィルはヤスムネにどれだけこの街にある大切な研究材料があるのかを伝える。

「入れねえよ」

ヤスムネは真剣な眼差しでスフィルたちを見ると、

「……分かりました、だったら私たちも一緒にいきます」

「そだね、それが一番の方法だよ」

スフィルとキュウはヤスムネの両腕をガシリと力強く掴むと、

「行きましょう、私もヤスムネさんの知り合いがどんな人なのか気になります」

「キャハハ、私も」

「ぬがああ！ お前ら何その力！ 強くね!？」

とズルズルとヤスムネを引きずりながらアスピオに訪ねてきた人たちへと会いに行った。

「くそ、あの街ん中にモルディオが居るっていうのに入れないとはな」

「通行許可証が欲しかったなんて僕も知らなかったよ」

アスピオに入れなかったご一行とはユーリたちであった、ユーリたちは洞窟の周りを探索していた、どこか街中に入れる出入り口を探しているらしい。

「中にはフレンが居るかもしれないというのに……」

「うん、どこか他の出入り口でもないのかな」

「まあ何処かにあるだろ、ぐるっと回ってみようぜ。いざとなれば、壁を越えてやりゃあいい」

ユーリたち一行は辺りをまた探索しはじめる、すると裏口らしき扉が見つかった。

ユーリは扉を開けようとする。

どうやら鍵が掛かっているらしく扉は開かなかった。

「都合よく開いちゃいないか」

「壁を越えて、中から開けるしかないですね」

「早くも最終手段かよ……………」

「フレンが出てくるのを待ちましょう」

「フレンが出てきたとしても、モルディオは出てこないだろ」

「出てきたフレンにお願いして中に入れてもらうのはどうです？」

「あいつ、この手の規則にはとことんうるさいからな。頼んでも無駄だって」

二人が話している間、カロルは何やら扉をいじっていた。

そしてガチャっ！ と何かが外れた音がした、カロルは満足気にユーリに言う。

「開いたよー」

「え？ だ、だめです！ そんなドロボウみたいなこと！」

「………… お前のいるギルドって、魔物狩るのが仕事だよな？
盗賊ギルドも兼ねてんのかよ」

ユーリは少し疑ったような眼差しでカロルを見る。

「え、あ、うん…………。まあ、ボクぐらいだよ。こんなことまでやれるのは」

その後、エステリーゼが「こんなのダメです！」と不法侵入しようとしているユーリたちを止めるが、やむなく一緒に入ってしまう。

そんなユーリたちを捜している三人、スフィル、キュウ、ヤスムネはアスピオの入口の洞窟でヤスムネの知り合いを捜していた。

「何処に行つたのですかね」

「シラナイ」

「ああー！　もしかしたらもう外に出て行っちゃったのかも！」

「シラナイ、ハナシテ」

「むう、そうかもしれませぬ。でも、もう少し周りを捜してみましよう」

「シラナイ、ハナシテ、ヒキズラナイデ」

とスフィルとキュウに両腕を掴まれて引きずられているヤスムネの姿があった。

「ちょ、マジ離してくれよ、両腕掴まれてるのは良いけどオレ後ろ向きで歩けないし、引きずられてケツが痛い。何か濡れてるし」

ズコンツズコンツとケツを打ち付けながらヤスムネを引きずっていた二人はにこやかに、

「ダメです（だよ）」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

反論する気力を失せたヤスムネは無言でケツを打ち付ける痛さを我慢していた。

すると、

「アレ？」

とキュウが何かを見つけた。

「どうしたの、キューちゃん？」

「見て、アスピオに入る裏口の取っ手が少しずれてる」

キュウが指差した所には、どうやらアスピオに入る唯一の裏口があった。

けどヤスムネとスファイルは目を細くして扉の取っ手を見るが、何も変わっていないように見えた。

というより、取っ手が丸いのでどう動かしても変わってないように見える。

「・・・・・・・・分かるか、スファイル」

「・・・・・・・・すみません、分かるハズがありません」

ヤスムネとスフィルは裏口に近寄り、間近で取っ手を見るが、分からない。

「もう、何で分かんないの？　ホラッ、ちょっと凹んでる所があるでしょ、これが上になってる時は鍵が掛かってて、横になってる時は鍵が掛かってないんだよ」

ブンブンと可愛いらしく怒るキュウにヤスムネは和みながらもう一回取っ手を見る。

だが分からない、なので取っ手を正面から見ると、

本当に、微かに、妙に、ちょこつとだけ、微妙に凹んでいた。

「お前どんだけ目が良いんだよ！？」

思わずツツコミを入れるヤスムネだった。

「ええー、だってわたし狩人ですよ、獵師ですよ。目が良くなきゃ仕事が出来ませんってえ」

キュウは腰に掛けてあった折り畳み式の弓を出した。

「お前、今護衛役やってんじゃ——」

「やってますよ？　狩人は獲物を狩るんですから」

ついでに人も守っちゃお、的な考えをしているキュウをヤスムネはどういった反応をして良いか迷っている、

「・・・開いてる!？」

スフィルは完全にキュウとヤスムネを無視して扉を確認した。

「だから、さっき言ったじゃん。開いてるって」

その言葉に一番反応したスフィルは顔を青くさせた。

「ど、どうしましょう!」
魔導器の機密情報が沢山あるアスピオ
に侵入者が出たなんて!」

「いや、てかどんだけ此処のセキュリティヘボいんだよ、学術“閉鎖”都市じゃねえじゃんツバアツ!?!？」

スフィルはヤスムネの顔面を力強くぶつ叩いた。

「ど、どうしましょう!」
魔導器の機密情報が沢山あるアスピオ
に侵入者が出たなんて!」

「よし、じゃゾイツらをさがすぞ!」

ヤスムネは鼻から血を出して、それを必死に押さえ付けながら裏口に入って行った。

ユーリたちは裏口から入ると大量の本がある部屋に着いていた。

どうやら図書室らしい、フードを着ている人たちが必死に本に食らい付きながら何かを勉強していた。

「なんかモルディオみたいなのがいっぱい居るな……」

ユーリがそう行って歩いて行く。

そしてエステリーゼは近くにいた男性に話し掛けた。

「あの、少しお時間よろしいです？」

「ん、なんだよ？」

「フレン・シーフォという騎士が訪ねて来ませんでしたか？」

「フレン？ ああ、あれか、遺跡荒らしを捕まえるとか言ってた……」

と男性がそう言うとエステリーゼは食い入るようにその話を聞く。

「今、どこに!？」

「さあ、研究に忙しくてそれどころじゃないからね」

「そ、そうですか。……………ごめんなさい」

「じゃあ、失礼するよ」

「ちょ、待った。もうひとつ教えてくれ。ここにモルディオっていう天才魔導士がいるんだよね？」

男性が去ろうとするがユーリに呼び止められた。

「な！ あの変人に……………って、ムグツ！」

男性はいきなり両手で口を押さえた。

「い、今の聞いたか？」

男性はタラタラと変な汗を流していた、そして顔も青くなっていく。

「は、何が？」

ユーリはなんの事を言ったのか理解していなかった、それを確認した男性は安堵の息を吐く。

「い、いや、聞いていないなら良い。そ……………それで、そのモルディオに何か用なのか」

「用っちゃ、用だな。ソイツ何処にいんの？」

「お、奥の小屋に住んでるよ、だから俺とは関わらなくてくれ」

男性はそう言うと脱兎の如く逃げて行った。

「サンキュ……ってもういねえ」

「大丈夫なの？」

「ん？」

「モルディオさんの話が出てから皆少し怖がっていませんでしたか？」

「ああ、確かに」

「気になるね」

「まあ、ブラスティア魔導器ドロボウだしな。嫌われて当然だろ」

とユーリとエステリーゼ、カロールが話していると、

「早く侵入者を捕まえないと！」

「あのー、ちょっと待ってもらえますかスフィルさん、はな……鼻血が止まらな——」

「ちょっと！ 狭いんだから早く進んでよ」

「ちょ、バツ、おす……なっ！？」

ズバアアアアアア！

顔面を思いつつきり擦り付けながら転ぶ黒髪の青年と、薄水色の髪をした学生服の少女、栗色の髪でポニーテールをし、露出が多い服を着込んだ少女がユーリたちが入って来た裏口から出て来た。

「あちゃあ、派手に転んだね」

「ちょ、キューちゃん！ 何やってんの！」

「いや、だって最初やったのスフィじゃ……………」

「アスピオの大事な図書本庫をヤスムネさんの血で汚すなんて！」

「……………スフィ、それは流石に酷いよ」

と二人が話しているが、一向に顔面を擦り付け悶えているヤスムネに手を指し伸ばしていなかった。

「おいおい、まただよ」

「フガツ！？ そのごえは！」

鼻血をビュービュー出しながら顔を上げた青年・ヤスムネは見覚えのある青年に声を掛ける。

「ユウウウウリ・ロオオオオーウエエエエルウウウー!!」

「随分と長く呼ぶな、アンタ」

ズバツと立ち上がったヤスムネは刀の柄に手を伸ばす。

「俺はアアアア！ お前を殺す為だけにイイ！ 生きてきたアア！」

「どうでも良いが、アンタ鼻血がヤバいぞ」

ドバァー！ と鼻から鼻血を出しているヤスムネ。興奮しているだけ鼻血の量が多かった。

「キヤアア！ 大事な書庫があ！」

ズベシツと思いつきり顔面を蹴られたヤスムネはそのまま真っ直ぐに裏口から出て行った。

「・・・・・・・・」

「あ、あの、ヤスムネさんは大丈夫なのでしょうが」

「えっ！ 今鼻血を凄く出してた人がヤスムネさん！」

ユーリは沈黙、エステリーゼは心配、カローは驚愕をしていた。

「ムッ！ よく見るとこの方々服装がアスピオの人たちと違う！」

「スフィってさ、以外と身体能力高いんだね。ヤスムネさんが飛んでったよ！」

二人の少女は各々に違う反応をしていた。

「アナタたち、不法侵入者ですね！」

スフィルはユーリたちを指差して告げる。

「やべっ」

「ほら！ だからわたしは言ったのです！」

「う、うわぁ！」

ユーリたち三人と一匹はすぐに逃げようとするが、

「おっと、逃がさないよ」

栗色の髪をしたポニーテールの少女はバツ！ と音を立ててジャンプする。

そして腰に掛けてあった折り畳み式の弓を展開させて、

「凍牙^{とつが}！」

瞬時に矢を入れて射る。

矢には冷気が纏っており、床に刺さると凍り始めた。

「おっと」

「きゃあ！」

「うわああ！」

ユーリは凍った床を上手く滑りながら通る、だがエステリーゼは床が凍った為に滑ってしまい体勢を崩した、カロルも同じく転ぶ。

「エステルにカロルも転んだか、ラピードは、居るな。ちゅっと待つてろ」

ユーリが二人を回収しに戻ろうとしたが、

「待つのは貴方ですよ、お兄さん」

いつの間にかユーリの後ろで矢を番^つえていたキュウが立っていた。

「アハハハ、アンタら何者？」

「それはこちらにも聞きたいな、お兄さんたち何者」

ユーリとキュウが話していると、

「こつちです、書庫が大変なことにッ！」

『ん？ アスピオの学会で議論中だったのに、騒いでる奴らって誰え？』

何やら声が何かに遮るような感じで響き渡った。
その瞬間、

「うそ！ ヤバッ！」

「なななッ！」

といきなり慌て始めた二人の少女。
これは好機とユーリは一瞬で愛刀「ニバンボシ」を抜き、

カキンッ！

「クッ！ しまっ」

ユーリは矢を番えていた弓をニバンボシで払い、一気にキュウの喉元に刀の切っ先を向ける。

「逆転だな」

ユーリはニコツと笑ってみせるが、キュウとスフィルは偉く黙っていた。

様子がおかしいと感じとったユーリは、書庫に入ってきた人物に目を向けた。
そこには、

『ホウゝホウゝ、アスピオに客人とは、珍しくも無いかな?』

白衣に身に纏い、そして一番に目立たせるのが顔を付けている物、ガスマスクだった。

「「ネ……ネイビー博士!」」

スフィルとキュウの二人の少女は“ネイビー博士”と呼ぶガスマスクの人に目を向けた。

「あ、あんたは?」

ユーリは少し変わった姿のネイビーに驚いていた。

『ボク? ボクかい? ボクはコン・ネイビー。一応ね、
閉鎖都市の最高責任者を務めてるよ?』
學術

これがユーリたちの、山の下に潜む街、アスピオの最高最凶の魔導士と会った瞬間だった。

——おまけ——

「……………鼻血止まんねえや……………」

裏口から飛ばされたヤスムネは冷たい洞窟の地面に俯せに倒れていた。

「・・・・・・・・地面冷た・・・・・・・・」

数分後には元気になっているヤスムネでした。

学術閉鎖都市アスピオ（後書き）

スキット

《本がいっぱい》

ヤスムネ

「この街は本が沢山あんのなあ」

キュウ

「そりゃあ、世界中の魔導士やら研究者たちが集う街だからね。資料が沢山集められるみたい」

ヤスムネ

「オレは興味ある物しか読まないからな、こんな難しそうな本とかは無理だな」

キュウ

「ふふふ、ヤスムネさんってそんな感じします、どっかで馬鹿やってそう」

ヤスムネ

「キュウに言われたくなかった……」

キュウ

「アレ、スフィは？」

ヤスムネ

「さっきからずっと本読んでっぞ」

スフィル

「・・・・・・・・」

キュウ

「うおーい、スフィー？」

スフィル

「・・・・・・・・」

キュウ

「・・・・・・・・ヤスムネさんが大事な本を鼻血で汚したよー」

ヤスムネ

「ちょ、はあっ！？」

キュウ！

お前なにを、オウツ！！」

スフィル

「最低です！」

ヤスムネ

「り・・・・・・・・理不・・・・尽」

キュウ

「じゃ、行こっか、スフィー」

スフィル

「今、行きます」

ヤスムネ

「アイツら・・・・・・・・・・・・・良い性格してるぜ」

天才魔導士との出会い（前書き）

何故か筋肉質になって、銀色と青色の完全密着全身タイツを着込んで、黄色いマスクを被って銀行強盗を退治したのに、強盗と一緒に警察に連行される、

という夢を見た作者です。

天才魔導士との出会い

ユーリたち一行は少し、いや、かなり迷惑を掛けてしまったのだが、ネイビーが、

『良いよ、良いよ、たまにこういう刺激的なことが無いと』

と言って許してくれた。

なんと寛大な緒方と学生服を着たスフィルと身体能力抜群で栗色の髪をポニーテールにしているキュウがネイビーを褒め称えた。

ネイビーも『いやあ、照れるなあ』と頭を掻いて歩いて行く男性。

とにかくユーリたちが思ったことは一緒だった。

(((変人！)))

そう、ネイビーという男性は白衣を身に纏っており背には「R・L」と言う文字が刻まれていた。

「ね、ねえ、ユーリ」

「なんだよ、カロル」

ルルンルン、といった感じにホップステップをしているネイビーを横目にカロルはユーリに訪ねた。

「あの人って、本当にあの“ネイビー博士”なの？」

「ああ、そう言ってたじゃねえか」

「だ、だってあの入」

カロルは背中に「R、L」と文字が刻んである白衣を着た男性に目を向けて言った。

「何か変な入つぽいよ、あとなんかガスマスク被ってるし」

カロルの言う通り、ネイビーは真つ白なガスマスクを被っているのだ。

口から何かに遮られる音が漏れ、目には丸い黒レンズが付けられ、ネイビーの瞳が分からなかった。

髪は見える、茶色の髪だった。

「しつ、ダメですよ、カロル。あの方は鬼才魔導士として名高い博士ですよ？　先代の皇帝、クルノス14世の魔導器を調整、修理、改造を行い。そして一番に有名なのがクルノス14世の為だけに造られた皇帝魔導器を開発したのが、コン・ネイビー博士なのです！」

エンペラプラスティア

エステリーゼは何処か熱意を込めた説明をユーリたちにする。

カロルは「ええええ！？」　嘘だあ！」と一番に否定の言葉を発したのだがネイビーには聞こえない。

そんな三人を見ながらネイビーは頂垂れている少女二人に話しかける。

『スフィルちゃんにキュウちゃん、愉快なお友達を連れて来たのは別に良いんだけどさ、僕が捜していた肝心の人が見当たらないのは

気のせいかい？」

二人は「友達じゃありませんッ！」と否定しながら言うが、ネイビーはスルーして二人に聞く。

「スファイが思いっきり蹴って裏口からぶっ飛んでいきました」

キュウは口を「△」っぽくしながらネイビーの質問に答えた。
スフィルは俯きながらそのまま歩く。

『うーん、まあ、ヤスムネだから大丈夫だよ』

とネイビーはグッと親指を立てて言った。

ああ・・・不憫な、

キュウはきつと硬く冷たい洞窟の地面に寝ているヤスムネを思い浮かべながら合掌した。

『では、僕はここで別れるよ、学会でまだ魔導器について議論中だったものでね』

ネイビーは「じゃ」と片手を上げて学会のある方へ向かって歩いて行った。どうやら学会をする場所はアスピオの地下にあるらしい。もう消えていた。

「ふう、それでアナタたちは何しにアスピオに来たのですか？」

スフィルは溜め息を吐きながらユーリたちに訪ねる。

「モルディオっていうヤツを捜してる」

ユーリは何気なく言うと、

「えっ！！？」

スフィルとキユウは何故か驚いていた。

そして物凄い剣幕でユーリに聞く。

「あ、アナタ本当に今ネイビー博士が居なくて良かったですね！」

「もしここにネイビーさんが居たらユーリさん明日の朝まで尋問されてたよ！？」

「な、何でだ？」

凄じ剣幕に押されていたユーリは疑問に思ったことを二人に聞くと、

「・・・・・・・・その内分かります」

「・・・・・・・・その内分かるって」

暗い顔でそう言ってきた。

「ここがモルディオの家よ」

アスピオの広場から少し離れた所にモルディオの家があった。

「『絶対入るな、モルディオ』」

エステリーゼは家の扉に貼ってあった物を言った。

「ここか……」

ユーリは貼り紙を無視して扉を開けようとする。

（ここは、見守るとします）

（わたしもそうする）

スフィルとキュウ、二人は綺麗に家の横で並んでいた。

「ん？ どうしたお二人さん」

「あ、いえ、なんでも……」

「続けたり、続けなくなっても良いよ」

何言っただ、とユーリは思いながら開けようとする、だが、鍵が掛かっていた。

「カロール、出番だ」

「まかせてよ！」

とカロールがピッキングし始める。

エステリーゼは止めたのだが、もうカロールは鍵を開けてしまっていた。

その光景を見ていた少女二人は、

「……なっ」

「ふわぁ、開けれるもんなんだね」

スフィルはカロルのピッキング術に驚き、キュウは関心していた。開けた扉に無断に入るユーリ、その後に続くカロル。

「あ、まってください！　もう、どうしてこう……すみません」

エステリーゼはスフィルたちに謝る。

「え、あ、えつと、あの、その」

「ああ、今ちよつと軽い感じで家の中に不法侵入しているお兄さん達を見てショック受けているスフィだけど、大丈夫だよ」

スフィルはパクパクとして、そんなスフィルを大丈夫だと言い張るキュウに戸惑うエステリーゼ。

「あ、けど、気をつけてね」

だが何故かキュウはにこやかに注意するようにエステリーゼに言う。もちろんエステリーゼは何故キュウがそんなことを言ったのか分かっていなかった。

すると部屋の中から声がした。

「ねえ、見て見て、プラスチック魔導器の模型だよ」

「ふーん、器用なやつもいんだな」

「もう、ユーリ！ カロル！」

「なんだよ、エステル」

「なんだよじゃありません、これはれっきとした犯罪ですよ！」

「居ないなら居ないで証拠探せんだろ、探せ探せ」

ユーリはガサゴソと山のように積み重なった本の根本を探していた。
カロルはジューっと魔導器フラスティアの模型を見ていた。

すると現実には復活したスフィルも家の中に入る。

「ちょ、ちょっと待ってください！ ここはとても――」

スフィルがモルディオの家の中を探索している二人を止めようとすると、

「これ何だろ？」

カロルは黒板に書いてあるものに気付く。

「きゃあゝ」
「フラスティア　そ、それはまさかあのモルディオさんのマル秘の魔導器の術式ですか！」

スフィルは目を輝きながら黒板に近付き魔導器の術式らしきものに釘付けになる。

「す、凄い変わりようだね」

ムフフフフ、と喜びながら黒板を凝視しているスフィルを見てカロルは言った。

「中に入ったらどうだ、寒いだろ、そこ、特にお前」

ユーリは未だに戸口に立っているエステリーゼとキュウに言う。
ユーリはかなり露出しているキュウにも中に入るように進めた。

「ありがとうお兄さん、どうする？」

キュウはユーリにニコツと笑みを浮かばせてエステリーゼに聞く。

「これ以上、罪を重ねるわけにはいきません」

「気にしなくていいのに」

「不法侵入の罪は禁固一年未遂、又は一万ガルド以下の罰金、です」

「アハハ、もうこのアスピオに入る時に不法侵入してると思っただけど……それは？」

「うっ、それは……」

エステリーゼは真剣に悩んで考える、キュウはちょっと悪戯に言っちゃったかな、と舌を可愛いらしく出して、

「ごめんごめん、ネイビーさんが許したんだから大丈夫だよ」

キュウはエステリーゼにそう言うとホッと安堵した笑顔を見せた。
するとカロルはまだ黒板に凝視しているスフィルと一緒に字を観て

いた。

「それにしても、きつたない字。ボクの方がキレイに書けるよ」

「そうですねえ、わたしの字もキレイですよ」

とスラスラとキレイな字を黒板に描いていくスフィル。そこに、

「字が汚いやつは心がキレイって言っけどな」

ユーリの一言にチョークの動きを止めたスフィル。

「なら、ボクは字も心もキレイなんだよ」

純粹無垢なカロルの答え。

「わ、わたしもです!」

そこに乗乗するスフィル、何だか目が潤んでいた。

「エステル、術式の意味わかる?」

ユーリはそんなスフィルとカロルをスルーしてエステルに聞く。

「火を使った術式に似てますが、わたしにはちょっと……」

「……でも、分かるんだな、オレにはさっぱりだ」

とユーリは言っていると、カロルは書物の山に近付いていた。するとラピードが突然反応する。

すると、ムクツと山からローブを纏った人が現れた。

「ぎゃあああゝゝゝっ！ あう、あう、あうあうあう」

「キヤアアア！ いきなり大声を出さな・・・・・・・・いで・・・・・・・・」

カロルの驚いてユーリの後ろに隠れる。カロルの声にビックリしたスフィルはローブを纏った者を観て、硬直した。

「・・・・・・・・いるさい・・・・・・・・」

ローブ姿の人物はいきなり詠唱を始める。
ユーリは背後に隠れたカロルにかまわず、その場を離れる。

「ドロボウは・・・・・・・・」

「うわわわっ、待ってえっ！」

カロルは素早く戸口に向かう、何故か戸口に立っていたエステリゼとキュウの姿が消えていたがそんな事は関係無い、逃げるのに必死のカロルの前には、

「いやあ、やっと着いたよ、街の人に聞いたらモルディオの家に居るって言うから全力疾走して・・・・・・・・」

「ぎゃああああ！？ どいてどいてえええええ！」

「ん？」

鼻に白い物を詰めし込んだ黒髪眼鏡の青年。
カオルはその青年とぶつかりと同時に、

「ぶつ飛べ！！」

ロープ姿の人物はファイアボール火球を二人目掛けて放った、何故かこの二人だけに。

「ぎゃあ ああああ ああああ ああつっ！！」

「えっ、何故にいいいいいいいい！！？」

バゴオオオオオオオオオン！！

ファサツとローブ姿の人物はフードが外れて、少女の顔が見えた。

「げほげほ、ひどい……って思ったら大した痛くない？」

「ゲホッ！
ゲホッゲホッ、ゴホッガホッ、ゴホゴホゴホ」

ファイアボール
カロルは余り咳き込むがそれはカロルが火球を喰らつておらず、代わりにヤスムネが物凄い勢いで咳き込んでいた。ちょっと涙目だ。

「ヒュ〜ウ」 その子を助ける為に盾になったんだねヤスムネさん、カッコイイ」

「ガホツゲホツゲホツ、キュッホウエツホツ！ ウルゲツホツ！」

「あ、あのう、大丈夫ですか？」

と咳き込みながらキュウに言っているらしいが、何を言っているのか全然分からなかった。

エステリーゼはそんな死にそうな程に咳き込むヤスムネを心配する。普通の人だったら誰でも心配すると思いますが。

「こんだけやれりゃあ、帝都で会ったときも逃げる必要なかったのにな」

ユーリはローブ姿の少女の背後に回り、刀を抜いた。

「はあ？ 逃げるって何よ。何で、あたしが逃げなきゃなんないの？」

「そりゃ、帝都の下町から魔導器ブラスティアの魔核コアを盗んだからだ」

「いきなり何？ あたしがドロボウってこと？ アンタ、常識って言葉知ってる？」

「まあ、人並みには」

「勝手に家に上がり込んで、人をドロボウ呼ばわりした挙句、剣突きつけるのが人並みの常識！？」

「ゴホーダ、ゴホーダ！」

「だ、大丈夫です!？」

「流石に私も心配してきたよ」

ローブ姿の少女はユーリに常識的なことを言っているとヤスムネは苦しみながらもローブ姿の少女の味方をする。
するとラピードがゆっくりと少女の方に近付いていくと、

「ちょっと犬っ！　犬入れないでよ！」

少女が色々と言っていると言っているとエステリーゼは少女の近くまで寄ると、謝罪をしてきた、カロールとユーリにも謝るように言う。
カロールは素直に謝ったのだがユーリは視線をそらすだけ。

「で、あんたらなに？」

「そこでオレが教えてさんぜよう」

とさっきまで悶え苦しんでいた黒髪眼鏡の青年、ヤスムネが話に入ってきた。

「あんた、誰？」

「フツ、アビスマンとでも名乗ろつか……」

「……」

「あ、のさ、そんな冷たい目で見ないでよ、言葉が無いと完全にオレきついよ」

ヤスムネは冷たい視線を少女から受けていると、オドオド仕始めた。

「……まあ、ですね、その長髪の兄ちゃんコは帝都から魔核アドロボウを追ってここまで来たんですよ」

「それで？」

とヤスムネが説明して、少女が次の説明を待つ。
するとユーリが語りだす。

「魔核コアドロボウの特徴つてのが……。『マント』、『小柄』、名前は『モルディオ』だったんだよ」

「ふん、確かにあたしはモルディオよ。リタ・モルディオ」

「背格好も情報と一致してるね」

「で、実際のところどうなんだ？」

カロールもユーリの情報からローブ姿の少女・リタと一致することを言う。

「だから、そんなの知ら……。あ、その手があるか。ついて来て」

「はあ？ おまえ、意味分かんねえって。まだ、話が……。あ、」

「いいから来て。「シャイコス遺跡」に盗賊団が現れたって話、せっかく思い出したんだから」

とリタが言うと、ずっと硬直していたスフィルが反応した。

「えっ、「シャイコス遺跡」って、だ、駄目ですよ。あそこは！」

「げえっ！　何でアンタがここに」

「盗賊団？　それ本当かよ」

「協力要請に来た騎士から聞いた話よ。間違いないでしょ、とにかくアンタと……アンタ来なさい」

リタはスフィルとキュウを連れてすたすた歩いていった。

「何でアンタらここに居るの？」

「そ、その、ネイビー博士が『お客さんの傍に居てやんなさい、シユコー』と言われたので……」

“ネイビー”という言葉聞いたリタは少し苦い顔をした。

「キャハハ、やっぱりネイビーさんには逆らえない？」

キュウは少し笑いながらリタに言うとリタは、

「そんな訳ないでしょ！　あのバカ“兄”！　『遺跡には危ない物があつたから近付いちゃダメだよ』と言いながら自分だけ遺跡に行つては魔導器プラスティアを拾つて帰つて来てるバカ兄にムカついてんの！」と怒りながらキュウに言う。キュウも「私に言われても・・・」と困つた感じにいる。

「な、そ、それでもネイビー博士はモルディオさんにちゃんと拾つて来た魔導器プラスティアを全部見せてるじゃありませんか！」

「は？、アンタ馬鹿？　あんなのバカ兄が鑑賞みた後に渡されんのよ、直す所が一本も無いのよ！　だからあたしはアイツらと「シヤイコス遺跡」に向かつて、最深部にある魔導器プラスティアを観てくる」

「そ、それはネイビーさんがリタに言つたの？」

キュウがリタに訪ねると「うん」と頷く。

「・・・・・・・・自立術式」

「・・・・・・・・！！・・・」

ポツリと呟いたスフィル、それに反応するリタ。確信するスフィル。

「モルディオさん、それは、ネイビー博士に言つたのですか？」

「・・・・・・・・」

「言っていない、ていうか言えないよね」

キュウがリタの心を読む、表情を見れば丸分かりだった。

「……………モルディオさ——」

「とにかく！……………バカ兄には言わないで」

そう言っていると着替え始めるリタ。

スフィルは何処か暗い顔をして考え込む。

キュウはそんな二人を見て溜め息を吐いた。

着替えをすんだリタが訪問者であるユーリたちの所に戻る。

「——まり——寸魔核——んだ——犯人——でしょうか？」

離れていたのが段々と聞こえてくる。

「さあなあ……………」

どうやら相談が終わったようだ、リタはユーリたちに言う。

「説明終わった？　じゃ行こう」

リタは早速といった感じに戸口に立つ。

「とか言つて、出し抜いて逃げるなよ」

「来るのがいやなら、ここに警備呼ぶ？　困るのはあたしじゃないし」

「いつてみようぜ？　な、エステリーゼちゃん」

「はい、フレンもいるみたいですし」

ヤスムネがそう言うのとエステリーゼも一緒にユーリに言う。

「捕まる、逃げる、ついてくる、どーすんのかさっさと決めてくれない？」

「わかった。行つてやるよ」

ユーリが納得して行くことになった。すると、

「わた、わたし達もついていきます」

「そだねー、その方が良いかも」

とスフィルたちも言ってきた。

リタは驚いた感じでスフィルたちに聞こうとしたが、

「はあー、まあ良いわ、早く行きましょう」

リタは聞くことをやめた。

「「シャイコス遺跡」は街を出てさらに東よ」

こうしてユーリたちは「シャイコス遺跡」へと向かった。

「アレッ？ オレはあああああああ！？」

ヤスムネ、放置。

天才魔導士との出会い（後書き）

スキット

《リタについて》

カロル

「なんか、リタってちょっと怖いよね」

エステル

「そうでしょうか？」

ユーリ

「まあ、あんなもんじゃねえの。なんか機嫌悪いみたいだし」

ヤスムネ

「スフィルたちから聞いたがそれはユーリが勝手に家入ったからだろう？」

ユーリ

「魔核^{コア}ドロボウに礼を尽くす気はねえからな」

カロル

「違ってたらどうするの？」

ユーリ

「そんときゃ謝るよ」

リタ

「その言葉、忘れないでよ」

カロル

「あ、聞いてたんだ」

リタ

「聞こえただけよ。あたしが怖いとか」

ヤスムネ

「き、気をつけろ、カロルくとやら。どうやらこの娘は根に持つタイプだ」

カロル

「や、やだなあ。…………怖いこと言わないでよ」

ヤスムネ

（モルディオ……………どつかで聞いたんだけど、なあ）

《ネイビー博士》

エステル

「まさか、あのネイビー博士に会えるとは思いませんでした」

ユーリ

「姿ちよつと変だっただけだな」

カロル

「でも勝手に入ってきたことを許してくれたから、きっと良い人なんだよ」

ユーリ

「たしか、エンペラプラスティア皇帝魔導器を造ったヤツなんだろう？」

エステル

「ハイ、その功績を称え、アスピオの最高責任者権利や皇帝直属の魔導器技師を与えました、ですが……」

カロル

「ですが？」

エステル

「先代の皇帝、クルノス14世が死去され、跡継ぎも居なかった為にネイビー博士はアスピオに留まるよう、『評議会』から言われているのです」

ユーリ

「ふん、随分と詳しいのな、エステル」

エステル

「え、あ、そ、それは、そう話を聞いたんです」

ユーリ

「誰から？」

エステル

「えっ、え」と・・・」

カロル

「ネイビー博士が、何だか気になる人物だね」

遺跡の中で（前書き）

少しリタの過去ばな、リタの小説を買いたいのですが。お金が無い
（：|；）

あ、友人に頼むか（^| ^；）

因みに友人はリタ超絶Loveな奴です！

遺跡の中で

ユーリたち一行はアスピオの東にある《シャイコス遺跡》に居た。アスピオの街では盗賊団が潜んでいるとの情報を得ている。

「ここが《シャイコス遺跡》か、石があるな」

「辺り前でしょ、ヤスムネさん。何言ってるのさ」

ヤスムネが仁王立ちしながら《シャイコス遺跡》の入口で辺り前の事を言っていると、来る途中で仲良くなったカロールにツツコミを入れられた。

「うん？　ここに足跡があるな」

ユーリが遺跡の入口の近くに、無数にある足跡を見つけた。

「この足跡、まだ新しいね。数も沢山あるよ」

「騎士団か、それとも盗賊団ってか？　あ、もしかしたらこの足跡の中にフレンもあるかもしれないな」

「そうです、ね。きっとそうです」

「ほら、こつち。早く来て」

カロール、ヤスムネ、エステル、ユーリは足跡を見て話していると、いつの間にか進んでいるリタが急ぐように告げる。

「モルディオさんは暗がりに入れ込んで、オレらを始末する気だな」

「・・・・・・・・始末、ね。の方があたし好みだったかも」

「怖っ!？」

「不気味な笑みで同調しないでよ」

「な、仲良くしましょうよ」

ユーリは相変わらずリタを魔核^{コア}ドロボウと見ているため異様にリタに引くかかる。

そしてそんな一行は一通り遺跡の中を探索するが、

「騎士団も盗賊団もいねえな」

「もっと奥の方でしょうか？」

「ん〜？ 奥って言うてもなあ、誰か居るようには見えないぜ」

「まさか、地下の情報が外にもれてんじゃないでしょうね」

「地下？」

「ここ最近になって、地下の入口が発見されたのよ。まだ一部の魔導士にしか、知らされていないハズなのに・・・・」

「それオレらに教えちゃって良いのかい、リタりん」

「しょうがないでしょ。身の潔白を証明するためだから、あとアン

「タ殺す！」

「全く照れちゃって♪ 可愛いなあ、リタにゃんは♪ . . .
. ってちよつと待ってリタにゃん、あ、その術はちよつと
危ないかな ってぎゃあああああああ！」

「身の潔白ねえ」

リタに術を放たれ、死にそうになっているヤスムネを横に、ユーリ
は相変わらず疑いの眼差しでリタを見ていた。そしてカロールもプ
スと黒焦げになりアフロ常態となったヤスムネを見てハア〜と溜
め息を吐くのであった。

そして遺跡を歩いて行くと、リタは遺跡にあった石像の横に移動し
て地面を見つめていた。

「地面に擦れた跡があるね」

「発掘の終わった地上の遺跡くらい盗賊団にあげても良かったけど、
来て正解だったわ」

「なら、早く追いかけないと。これを動かせばいいんでしょう？」

カロールは石像に両手を付け、懸命に押すがビクともしない。

「はあ、はあ」

「ねえねえカロールくん、カロールくん、『チャパパパア〜』って
言いながらやると押せるかもよ！」

「え、嘘！
分かったよ、ヤスムネ、行くよ」

カロルは両手をブンブンと回し、
気合いを入れて押す。

「チャパパアアー！」

だがビクともしなかった。

「ちよつとヤスムネ！
しいよ／＼／＼」

ダメじゃないか！

しかも若干恥ずか

「いやあり、聴けて良かった、うんうん。満足満足♪」

ヤスムネは腕組みをして笑顔でうんうんと頷いていた、だがヤスムネはその後にかollarと一緒に石像を押す手伝いをする。

「ハルハルハルハルハルハル。」

「うりゃりゃりゃあ！」

だが本当にビクともしなかった。

「ハア、ハア、何故じゃあああ！」

「ふう、ふう、何でだろ、何かに引っ掛かってる感じがあるんだよね」

「ほれほれ、頑張れ！」

「てめえコラあ！ ユーリも手伝えやあ、普通は若いもんがやる

もんだろ重労働！」

とヤスムネはゼエゼエ言いながらユーリに文句を垂れると、その場に居た全員が驚愕の顔やら体勢をしていた。

「ヤ、ヤスムネさんはユーリより年上だったのです？」

「嘘ッ、ユーリより年下だと思った！」

「マジ？」

「驚いたな（棒読み）」

「バウッ！」

個々それぞれの意見を出している、そしてここに来てやっと台詞を吐いた犬にヤスムネは驚いた。

「んだよ、オレはこう見えて25歳だぞ」

「に、25！？」

ヤスムネは石像に体を預けてながら自分の歳を告げる。それを聞いて驚いたエステルにヤスムネはパアツと明るい笑顔を向ける。

「んゝゝゝ やっぱオレってそんなにピチピチの好青年に見えたのかねえ」

「ピチピチって……」

「よっころ」

カロルはウギヤツハツハツと笑うヤスムネを見て呆れているとユーリは石像のとある部分を押すと、

ガラガラガラガラアア！

ときつきまでビクともしなかった石像が軽い感じで動き出した。そして石像に身を預けていたヤスムネは、

「ウギヤアアアアアアアアアア！！？！」

と石像の下にあった穴に落ちていった、階段があつたのだが見事にバゴーンゴチーンとかなり痛そうな音を鳴らし、ぶつかりながら転がっていった。

「あ、ヤスムネー！」

「ちょ、ユーリ！」

カロルは落ちていったヤスムネに呼びかけ、エステルはユーリを叱ろうとする。

「いや、まさかオレが押したらあんなにスルリといくなんて思わなくてよ………」

「・・・まあソコを押せば一発で押せたんだけどね」

「ちょ、もしかして、知ってて教えなかったの！」

「二人が必死こいてやってたから見物してたのよ」

（最悪だ・・・）

「それじゃ、行くわよ」

とリタは地下へと降りて行った。その後にユーリたちも続いて行った。

階段を降りた底には神殿のように、天井を抑えている柱などや、地面には壁や柱、石像などの残骸がごろりごろりと転がっていた。

「遺跡なんて入るの初めてです・・・」

「そこ、足元滑るから気をつけて」

先へ進もうとするエステルに、リタは注意をする。その様子を見ているユーリ。

「なに見てんのよ」

「モルディオさんは意外とおやさしいなあと思ってね」

ユーリが軽くそんな風に言ったりリタは溜め息を吐いた。

「はぁ……やっぱり面倒を引き連れてきた気がする。別に一人でも問題なかったのよね……」

そう言っリタはユーリたちを抜いて進んで行く。エステルはそこでふと疑問に思ったことをリタに聞いた。

「リタはいつも、一人でこの遺跡の調査に来るんです？」

「え、いや、え〜と。そ……そうよ」

リタは少したじろいでエステルの問いに答える。

「畏とか魔物とか、危険なんじゃありません？」

「……そ、うね。確かに、危険だわ」

リタは少し俯きながらエステルに答える、何か思い出しているのか、リタは苦い顔をしていた。

（遺跡は……バカ兄と来た事があったのよね。あの人が赤の他

人であるあたしに色々ブラステイアと魔導器のことを教えてくれた、なんでだろ
う……」

リタはギュッと首から吊るしていた緑色の勾玉を握りながら俯いていると、

「リタどうしたのです？」

心配したエステルがリタの顔を覗きながら言った。

「う、うわっ、何よアンタ！」

「お前が返事してなかったんじゃないか」

ユーリがそう言うのとリタは返事を無視して考え込んでいたのに気付いた。

「……考え事してたわ、そんで、何？」

リタはビシッとエステルと向き合つとエステルも微笑みながら再び聞く。

「そのですね、危険を省みてまでも遺跡に来るのって研究の為なんですよ？」

「そうよ、何かを得る為にリスクがあるなんて当たり前じゃない。その結果、何かを傷付けてもあたしはそれを受け入れる」

「傷つくのがリタ自身でも？」

（あれ・・・こんなやり取り前でも・・・）

リタは過去の思い出、昔の出来事を思い出していた。

シャイコス遺跡、地下内部。そこには茶髪の小さな女の子と白いガスマスクに白衣を身に纏った者と手を繋いで歩いて居た。
こんな薄暗い所にかなり怪しい恰好の男性と小さな女の子が居ると、かなり危ない気がします。ソコはスルーしてください。

『リタ、どうして街の研究員たちにあんな酷い事を言っただんだい？』
ガスマスクを被った男性はマスクを被っているせいで声色が呼吸と混じっており変になっていたが聞こえる。

「だって、あいつらイセキにいったっていつのにも、マモノがでたらにげてきたのよ！　バカじゃん」

リタと呼ばれた幼い女の子はギョウツとガスマスクの男性の手を握りながら言う。幼い上か、少し言い方が柔和だ。

そんな可愛いらしいリタの言い方を見ていた男性は、ハアハアと少し鼻息が荒くなっていた。

完全に変質者です。

そんな男性はガスマスクごしだが真剣な眼差しでリタに話す。

『だからアスピオで戻ってきた研究員にあんな事を行ったのかい？

何かを得るためにはリスクが必ずある、だからたとえ何かを傷つけてもそれを受け入れる、と。それはリタが独自で考えついた答え？』

男性がそう言い終わると、幼いリタは正直に頷く。

『そうかい……』

男性はそう言っでリタの両肩に手を置いて、リタの目線と合わせるように腰を下ろす。

『それじゃあ、“リタ自身傷ついて”も構わないって、考えなの……』

「……そうよ」

リタは少したじろぐが完全に言いきる。
それを聴いた男性は、

ファサツ・・・

リタを包み込むように抱きついた、リタは男性の顔の横でヒョッコと可愛いらしく顔を出してポカンとしていた。
そして男性は、

『そんな悲しいことは言わないでくれ、リタ・・・』

男性はギュツとリタを抱き寄せる、まるで世界からリタを護るかのように包む。

リタはそんな男性の背中 of 服をギュツと握る。

そうしないと、この人は泣き崩れそうだったから。

そうしないと、この人は悲しそうになると思ったから。

そんなのは嫌だ、とリタは思った。

リタはその男性に呟いた。

「どうして、そんなにかなしそうになるの？」

リタは首を傾げながら男性に聞く。

そして男性はマスクごしたが、リタには分かった。
とても優しい微笑みを浮かばせながら、言った。

ボクの大切な――

「・・・ボクの大切な・・・」

「あ、あのう、リタ？」

「何かまた考え込んでるね」

リタが歩みを止めて考え込んでいたので、エステルとカロルはリタの反応を確かめる。

「また飛んでんのかよ、何か遺跡（じし）であつたんじゃねえのか」

ユーリはリタを抜いて遺跡の地下を歩いて行く。

「ソーサリーリングの使い方もモルディオさんから聞いたんだし、良いから進もうぜ」

そう、実はリタは遺跡に入ったとき既にソーサリーリングをユーリに渡っていたのだ。

決して作者が面倒臭いからやらないとかでは無いので、その所はよろしく願います。

「オイイイ！　てかオレはほったらかしかよ！？　随分と離れた所から必死に走ってきたぞ！」

と地下に入ってからまだ台詞を言っていなかったヤスムネがユーリたちの前に現れた。

「おお、生きていると信じてたぜ」

「てめえマジで言ってるのか、ゴラア？　お兄さんそろそろキレちゃおっかな？」

ヤスムネはパキパキと手の骨を鳴らしてユーリに近付いて行く。だが、その後にエステルから静止がかり、ヤスムネは快く止まった。

「それで、モルディオさんは何考え込んでたんだ」

リタも考え込んでいたのをフルフルと頭を振らして払った。そしてヤスムネと合流して歩いているてユーリからそんな疑問をリタに聞いた。

「何でもないわよ、ただ、昔この遺跡に来たことがあっただけよ」

リタはフンツと鼻を鳴らしてズンズンと進んで行った。

そして遺跡の最深部まで進むと、そこには巨大な石像があった。
それを見たリタは思わず駆け寄る。

「あ、おい」

ユーリたちもその巨大な石像に近寄った。

「うわ、なにこれ?!　これも魔導器?
プラスティア
アクエプラスティア」

「こんな人形じゃなくて、オレは水道魔導器がほしいな」

「十分にこの人形は珍しいぞ」

ペタペタと触りまくるヤスムネ。

「ちよつと!　不本意に触らないで!」

「すみません」

リタに大声で止められたせいで少し落ち込むヤスムネ。

「こね子を調べれば念願の自立術式を……あれ?　う
そ!　この子も、魔核コアがないなんて!」

リタが巨大な石像を調べていると、ラピードが人の気配に気付く。

そして見ると、そこにはローブを纏った人物が階上にいる。

「リタ、おまえの友達がいるぜ」

ユーリはリタにそう言つと、リタはその人物に呼びかける。

「ちょっと！ あんた、誰！」

そう言われたローブを纏った人物は、

「ちつ、邪魔の多い仕事だ。騎士といい、コイツらといい！」

（ああ？ 仕事だと？）

ヤスムネはローブを纏った人物を見ながらそう思っていると、ローブを纏った人物は魔核を人型魔導器ゴアにはめ込むと、人型魔導器ゴレムは青い光をたたえて動き出す。

「うつわーっ、動きだした！」

人型魔導器ゴレムの攻撃を受けて、一番近かったリタが吹き飛んだ。

「がはっ！」

リタは壁にぶつかる。エステルはすぐにリタに近寄り治癒術を発動させる。

「ユーリ、カロール。散開しろ！」

ヤスムネの一言に一番に反応したユーリはすぐに抜刀して応戦する。

カロールも遅れがちだったがバックから武器を取り出しユーリと協力して応戦。

ヤスムネは一步下がり、そして、

「うおおおお！！ 頑張れええええ！！」

応援した。

「戦えよ（つてよ）」

と二者から言われたが、完全に傍観するヤスムネ。
とそこに、

「ここは任せたわよ！」

ボカンとヤスムネの肩をぶつかって走っていきこうとするリタ。
そしてヤスムネは物凄い回転^{スピン}で地面に転がって行く、人型魔導器^{ゴーレム}の
足下にまで、

ドスッ！！

「危ねッ！」

ヤスムネは身体をひねくれさせながら人型魔導器^{ゴーレム}の踏みつきを避ける。

「ボクの技を食らえ！　　　臥龍アッパー！」
がりよう

カロルは鉞まさかりのような武器で自らジャンプして振り上げた。

ガキイン！　と金属音が鳴り響く。

ゴワンツと人型魔導器ゴーレムは太くて巨大な腕でカロルに殴り掛かろうとするが、

「双牙掌！」

ユーリの双牙掌で人型魔導器ゴーレムの腕は軌道を反らす、カロルは間一髪に避けるとすぐに後退した。

「聖なる活力、ここへ、ファーストエイド」

カロルに治癒術を掛けるエステル、少し怪我をしたカロルだったがエステルのお陰で治った。

だがすぐにエステルは詠唱に入る。

「堅牢なる守護を、バリアー」

エステルはユーリの目の前に物理防御の魔術、『バリアー』を展開させて人型魔導器ゴーレムの攻撃を塞ぐ。

「下がって！　あたしの魔術に当たりたくないならね！」

ユーリたちは声をする方向を見ると、人型魔導器ゴーレムが動いたことにより、前に進めなくなった道に苛立ちを浮かばせ、早く人型魔導器ゴーレムを倒すのに専念した魔導士が居た。

「速攻ぶっ倒して、あのバカを追うわよ！」

そう言ってリタは武器・ハッシュを回転して術式を浮かばせていく、そして、

「ゆらめく焔、猛追！」

リタの前方に火の術式陣が展開すると、

「ファイアボール！」

何数個の火球が人型魔導器目掛けて放たれた。

ババババアアアン！

と魔術を受けた人型魔導器はズンズンと後ろによろめく、だが、

ズーンッ！！

なんとか踏みとどまる人型魔導器。

「おいおい、今の喰らってもまだ立ってんのかよ」

「ユーリ！　同時に行くよ！」

「おう、分かった」

ユーリとカロルはまだ動かない人型魔導器ゴレムの懐に入ると、

「爆砕ロツク！」

「牙狼撃！」

各々の技を繰り出す。

ズガアアアアン！　と倒れた人型魔導器ゴレム。

そしてすぐにリタは人型魔導器ゴレムに近寄って術式を解析していく。
リタが操作していくと人型魔導器ゴレムは光を失って完全に動かなくなつた。

そしてユーリはすぐにローブの男を追った。

「とんでもねえ魔導器ブラスティアだったな」

「ヤスムネ！」

「今の今までどこへ・・・」

「ああーもう、あの子を調べれば自立術式が解析できたのに！」

そこで、凄く悔しがっているリタに疑問視するカロル。

「まさか、その為にボクら戦わせたの？」

そんな訳ないとカロルは思いながら、ヤスムネもそんなハズはと思
いながら答えを待つと、リタは淡々と答えた。

「当たり前でしょ」

「「極悪人だよ（だ）！」」

とカロルとヤスムネは思わずツツコミを入れた。

遺跡の中で（後書き）

スキット

《遺跡探索》

エステル

「遺跡の中って、外とは全然違うんですね」

カロル

「うん、なんか不思議な感じ。見たことないものとかあるし」

ユーリ

「なんだ、カロルも初めてなんだ」

カロル

「ま、まあね。ボクの専門は魔物を狩ることだし。あ、これなんだろう」

リタ

「あんまその辺のものに触らない方が良いわよ。罠とかあるから」

エステル

「今、何かカチッて音しませんでした」

ヤスムネ

「お、エステルちゃんも言うねえ」

ユーリ

「危ない、ヤスムネ！ カロル！」

ヤスムネ・カロル

「うあああああっ！」

ユーリ

「わりい、余裕なかったんでやりすぎた」

カロル

「これじゃ罨にはまった方がマシだったよ……ってアレッ？
ヤスムネは！」

リタ

「その落とし穴に落っこちていったわよ」

ユーリ

「……マジであつたよ」

魔核盗賊正体発覚（前書き）

ヴェスペリアの小説、『虚空の仮面』を少しでも立ち読みしました。
レイヴンの生い立ちが分かりましたね、軽く泣きそうになりました、
レイヴン好きなので（泣）（泣）

いつか買いたいと思いました、はい。

魔核盗賊正体発覚

人型魔導器である『ゴライアース』を撃退したユーリたちは遺跡内部の入口まで戻ると、そこに魔物に囲まれているローブの男いた。

「あ、いたよ！」

カロルはローブの男を見つけて近寄って行く、ユーリたちもカロルと一緒に魔物たちを蹴散らす。

だがヤスムネは一人だけ停止した人型魔導器『ゴライアース』を見ていた。

（……これは、ネイビーが見たらどう言うかな）

ジイーとゴライアースの魔核コアを見ると、

「おまえ、帝都でも魔核コアを盗んだよな？」

ユーリがローブの男に問い詰めていた所だった。

ヤスムネはまだ見足らなかったのだが、刀を肩に担ぎながら行った。

「おまえじゃねえってことは、他に帝都に行った仲間がいるんだな？」

どうやらユーリはローブの男に魔核を盗んだ奴が他に居るのか問い詰めていた。

「あ、ああ！　デ、デデッキの野郎だ！」

「そいつはどこに行った？」

「今頃、依頼人に金をもらいに行ってるはずだ」

「依頼人だと……。どこのどいつだ？」

ローブの男はタジタジになりながらもユーリに答える。

「ト、トリム港にいるっただけで、詳しいことは知らねえよ。顔の右に傷のある、隻眼でバカに体格のいい大男だ」

「なぐるほどね」

とそこでヤスムネはユーリたちの話に入ってきた。

「あんだよ、アンタ何か知ってるのか？」

ユーリの目の矛先がヤスムネへと向けられる。

「おいおい、オレを睨むなよ。ということ、はだ……。魔核を集めて来いって言われて遺跡（ゴキ）に来たって訳か」

ヤスムネはローブの男を見るとコクリと頷く。
そしてリタも聞いてくる。

「ソーサラーリングもどこかで盗んだのね」

「ぬ、盗んでなんていねえ！　仕事に役に立って依頼人に渡されたんだ！！」

ローブの男は必死にリタに言う。

「嘘ね、こそ泥の親玉なんかに手に入れられるものじゃないわ」

「ほ、本当だ！ 信じてくれよ！」

ローブの男はリタに再び泣きながら言う。

カロルは少し頭を悩ませる。

「なんか話が大掛かりだし、すごい黒幕でもいるんじゃない？」

「カロル先生、冴えてるな。ただのコソ泥集団でもなさそうだ」

ローブの男はユーリたちの方を向く。

「騎士も魔物もやり過ぎして奥まで行つたのに！ ついねえ、ついでねえよ！」

エステルはそこで騎士という言葉に反応する。

「騎士？ やはりフレンが来てたんですね」

「ああ、そんな名前のやつだ！ くそー！ あの騎士の若造め！」

何やら自暴自棄になっているローブの男は石畳を何度も踏みしめて叫んでいる。

だがその横で怒っているのか、ギリリと歯噛みをしているリタが居た。

（魔核は魔導器の命なのに、そんな大切なものを盗む？ 考えられない！）
コア
プラスチック

リタは自分の胸に巻いていた帯を解いてローブの男に近寄る。
ローブの男もビクツとして後ずさろうとするがユーリによって阻まれる。

「や、やめろ！ 俺はただ大金が欲しくて動いただけの……」

「うつさい！」

とリタは思い切りはたいた。
はたかれたローブの男はその場に倒れた。

「ちょ、リタ、気絶しちゃったよ……どうするの？」

カロルは倒れているローブの男を見てリタに言う。

「後で街の警備に頼んで、拾わせるわよ」

そう言つてリタは帯を胸に巻き戻し、帰ろうとすると、

「あー！ 居たよ、居た、スフィー、こっちこっちー」

「ちょ、ちょっと待ってよー、私はキュウ程の体力は持ち合わせて無いのよ！」

ゼエゼエと荒い息を撒き散らしている、薄水色の短髪で学生服を身に纏っている女の子、スフィル・アウランドとその護衛役を務めて

いる栗色ポニーテール女の子のキュウ・ヒュセンがユーリたちに近寄って来た。

「モ、モルディオさん！　もうここまで来てたんですか」

スフィルはユーリたちの所まで移動すると凄い剣幕でグイグイとリタに近寄る。

「な、何よアンタら」

「何よ、じゃありませんよ！　出る時に『ネイビーさんに聞いてから行く』って約束したから渋々行かせたっていうのに、家に行ったらもぬけの殻ってどうことです！」

次々と言葉をリタに目掛けて言い放つスフィル。リタもうんざりするような顔で対応している。

「お兄さんらも何の疑問持たずに行くなんてビックリだよ」

「オレは早く魔核^{コア}ドロボウを捕まえたかったから、別にどっちだっても良かったぜ」

「・・・そりゃそうか」

キュウはユーリの答えに納得する。

「お二人だけでいらしたのですか？」

エステルは最深部^{コウ}までの道のりを考えて二人に聞く、あの数多くの魔物をたった二人でどうやって来たのか疑問に思ったのだ。

「ああ、その、二人……だけじゃ無いんだよねえ、アハハ、アハ」

キユウはたらりと汗を流しながら頭を搔く、すると、

「ごがぁぁぁぁぁん！！」

凄まじい轟音が地下に響き渡った。

「な、なににに！！」

「ありやあ、後ろからだな」

カロルが転びそうになった所をヤスムネは片手で支えてあげた、ヤスムネとユーリたちは後ろから聞こえた轟音の元を見ると、そこには魔核^{コア}を止めたハズのゴツゴツとして大きな腕を振り回す蒼黒^{そうくろく}の人型魔導器^{ゴレム}『ゴライアース』が動いていた。

一行は何故さつき倒したであろう人型魔導器が動きだしたのか理解していなかったが、その中で一番に困惑している者が一人だけ居た。

「な、なんで、魔核を止めたのよ、魔核を止められて動く魔導器なんて聞いたこと……」

人型魔導器の魔核を直接止めたであろうリタが一番に混乱していた。

「やべえ、何かあれ暴れだしてるぞ」

「あ、あれを止めるの!？」

「んー、何でだ？」

カチャと鞘から刀を抜き取るユーリと、鞘から武器を取り出すカオル。ヤスムネは相変わらずジーと見ているだけだった。

「ちょ、ちょっと待ちなさい。こんな現象は初めてよ、きっとあの巨大な身体はどこかに未確認の術式が――」

リタはユーリを静止させて、自ら人型魔導器の元に向かう。

「あ、危ないです、リタ!」

「モルディオさん、危険です、戻って!」

「戻って来おおーい!」

エステルとスフィル、キュウはリタを呼び止めているが、リタの頭の中には未確認術式の事でいっぱいだった。

ガラガラーと人型魔導器が壊した遺跡が崩れていく、リタは可憐にその降ってくる石の雨を避けながら人型魔導器に近付く。

だが、そんなに続くハズも無く、人型魔導器は腕を思い切り殴り払い、直線状となって遺跡の岩石がリタ目掛けて飛んでいく。

「きゃあ！」

リタもこれは逃げられないと思い、瞳を閉じてしまう。

だが一向にリタに痛々しい激痛や衝撃が伝わらない。

パチツと目を開けてみるとそこには、

『……大丈夫かい、リタ』

大きな岩石を受け止めていたのは、白衣に身に纏い、奇怪な声色に、奇妙な白いガスマスクを被っている男性。リタのよく知る人物。

「コン兄ッ！！」

アスピオの最高責任者兼リタの保護者であるコン・ネイビーの姿があった。

ネイビーはガラツと岩石を身で押して倒す、そしてネイビーはその場で膝を地に着いてしまった。

「コン兄！　　ちょ、何であたしなんかを庇ったの！」

リタはそう言いながらもネイビーに近寄り怪我をしてないか隅々ま

で見る。

『大丈夫、受け止める時に微かなバリアを張っておいたから』

ネイビーはそう言いながらもピトピトと頭から流れた血が顎に溜まり、地に落ちていた。

「ぜつ、全然大丈夫じゃないじゃないこのバカ兄！　なんで、ああ、もう！」

リタはアワアワとしながらどこかに応急薬や血を止める布地が無い服のポケットに手をつ突っ込んで探していた。

しかし何処にも無かったのか、リタは身の服でネイビーの血を拭いた。

「もう！　もうもうもう！　止まりなさいよ、血！」

リタは若干涙目になりながらもネイビーの血を脱ぐっている、するとネイビーはスツとリタの手を取ってあげる。

「ちょっと待って、まだ血が！」

『良いから、良いから話を聞くんだ、リタ』

いつもの奇怪な声色のままだったが、真剣な言い方になっているネイビーにリタはピタッと止まる。

『いいかい、ちゃんと答えるんだよ？』

ネイビーは真剣な言い方でリタにそう言う、だがリタはネイビーか

ら顔を反らす。

『ちゃんとこっちを向く、ちゃんと』

ネイビーはもう片方の手でリタの顔を戻す。

リタも綺麗に向き直る。

『……リタ』

「……………はい」

ネイビーは少しトーンの下げた声色で一言名前を呼ぶと、リタは素直に返事をする。

『どうして一言ボクに許可を取らないで行ったんだい？』

「……………」

ネイビーはリタにそう言うのとリタの答えが来るまで静かに待つ。

「……………言ったら行かせてくれなかったから」

リタもネイビーに聞かれたことにちゃんと答える。

『そうか……………』

ネイビーは少し寂しそうに答える、その対応にビックリしたのか、リタはあわあわとしてネイビーに言う。

「あつ、その、コン兄があたしの事を心配して遺跡に行かせなかつ

たのは分かってるわよ！　でも、あたしも遺跡に直接行って色んな魔導器たちがどこかどうなっていていたのか、どうやって動いていたのか気になって、その、だから」

リタはもじもじしながらネイビーに説明する、すると、

『ありがとー♪　リタァ♪　至極嬉しいよ♪』

と言いながらリタに抱きつくネイビー、そして、

「うつらああああああー！」

リタは思い切りネイビーの溝にパンチを食らわせる。

『ぐすおおおおおおおおうー！！』

そしてネイビーはゴロゴロと転がっていった。

その流れをずっと見ていたユーリ一行。

「ネイビーとリタは兄妹だったのかああああ！」

ヤスムネは二人を見て叫んだ。

「ヤスムネさん、突っ込むとこソコじゃないです」

スフィールは肘でヤスムネの脇腹を小突く。

「ふふふ、リタを想ってくれる優しい人が居てわたしは嬉しいです」

「エステルもちよっと突っ込むとこ違うよ、“あの”リタがあんなに人のことを心配したんだよ！ そっちが驚きだよ」

「カロール、ネイビー博士はリタのお兄様なのですよ？ 家族を心配するのは当たり前です！」

エステルはそう言って怪我をしたであろうネイビーに駆け寄って行った。

スフィールも一緒に行っていた。

「・・・リタとあのネイビーつつ奴の性が違うのは・・・」

「そこは訳ありだよ、お兄さん」

「・・・まあ、良いけど、さつさとあの博士の怪我治して戻ろっぜ」

「むー、以外と気が早いね、お兄さん」

「お兄さんじゃねえ、ユーリだ」

「じゃ私の事もキュウって呼んでよ」

「Qちゃん」

「どわっ！　いきなり話に入ってこないでよ、ヤスムネさん！」

「おい！　なにこのロン毛と仲良くやってんだ、テメエもキュウに近付くなこのロン毛！」

キュウを引き寄せて、ユーリから離れるヤスムネ。

キュウはヤスムネに引き寄せられて若干頬を赤くしていた。

「はぁ・・・こうしてる間にも魔核ドロボウが離れて行くぜ・・・」

因みに人型魔導器は動き停止してネイビーによって魔核を取って完全に動かなくなった。

あの人型魔導器は魔核に組み込む所に時間術式が刻まれており、魔核が組み込まれていれば数分後には起動する仕組みだったのをネイビーはリタやユーリたちに説明した。

魔核盗賊正体発覚（後書き）

スキット

《ネイビーに対する態度》

リタ

「もう、何でああやって無理するのあのバカ兄、まったく」

エステル

「ああ、リタ、どうしたんです？」

リタ

「別に、なんとも無いわよ」

エステル

「そうです？ なんだが嬉しそうな顔で怒っていたので」

リタ

「んなつ！」

エステル

「嬉しそうなのに怒っていたので聞いてみたのですが」

リタ

「なななつ、何でも無いのよ！」

エステル

「そうなんです？ でもさっきバカ兄とか、なんとかと……」

リタ

「むぐぐぐぐ、……うわぁぁぁー！」

エステル

「ええ！　ちよつ、リタ何処に行くのですかー？」

ネイビー

『可愛いなあ、リタは♪』

雷、闇に飲まれる（前書き）

受験も終わり、やっと重荷が取れました（「ー」）

そして今回はオリジナル話です、そして短い……。

雷、闇に飲まれる

人型魔導器『ゴライアース』を止め、怪我をしたネイビーをアスピオまで同行を共にしたヤスムネは途中まで行き、アスピオには寄らず、先に花の街ハルルへと向かっていた。

理由は簡単で、気になることがあったからだ。

（今の時世で魔核^{コア}を欲しがっているなんて、アイツらしか検討つかねえよ、だが……）

ヤスムネは深く考え込みながら歩を進めている。

（……何で、『海凶の爪^{リグアイアサン}』まで動いてた）

ヤスムネは思い出していた、ユーリ、エステルと共にフレンの部屋で何者かに襲撃され、その襲撃者を止めに入った者を微かにヤスムネは見ていたのだ。

赤いスコープを両目に掛け、黒い装束に纏っていた者をヤスムネは知っていた。

「……………」

ヤスムネはただ無言で、ハルルへと向かって行った。

ヤスムネはハルルの街のシンボルと言っても良い、ハルルの木が見えて来た。

「おつ、見えてきた。満開だな」

ヤスムネは刀を肩に担ぎ直し、歩を進めようとした時、

（・・・！・・・んあ？ こいつは）

ヤスムネは何かを感じ取り、一気にその場を後ずさる、すると、

スピュンッ！ と青い閃光がヤスムネが居たであろう場所を貫いていた。

「なあに、この技はもしかして」

「もしかしますよ、頭領（ボース）」

声がしたかと思えば、また青い閃光がヤスムネを遅い掛かった、だがヤスムネは刀を鞘に収めたまま構える。

そして、

「・・・雷神剣」

バリバリイー！

正に雷光一閃、雷を帯びた刀をヤスムネは周囲に放つ。すると、いきなり前方から何かが下がった。

「クハハ、やっぱ半端無えわ、指が触れただけなのに片手が痺れて動かねえ」

現れたのはユーリと同一年のような青い髪をした青年だった。

「・・・どーいうつもりだ、スイゲツ」

ヤスムネはさっきの一振りで一気に鞘に収め、今は肩に掛けてスイゲツと呼んだ青年を睨む。

「そいつア、こっちのセリフでさア。頭領」ボス

「俺はもう頭領じゃねえよ、もうそっちは――」

ザンツ！

スイゲツはヤスムネの言葉を待たずに青い閃光を放つ。ヤスムネはすぐに反応して避けるが、微かに頬をかすった。

「やめろ、スイゲツ。お前の技は俺に……」

「……………かすつたな」

「……ああ？」

「今、かすつたろ……なら」

勝てる

グラッ

（な……に……！？）

ヤスムネは急によろけ始めた。

「グッ、ガァ！　ス……イゲツ、お前なにを、なにを混ぜて放ったァ！」

ヤスムネは刀を地面に付け、支えて立っていた。

スイゲツは不気味な微笑みを浮かべながら言う。

「別にイ、俺の放つ高密水射ウオタルリイに猛毒を仕込だりなんかないでしょうがア」

スイゲツは笑いながらそう言うや、また数歩下がった。

「なっ……なに……をする……んだ」

ヤスムネは停止仕掛けている脳を必死に動かしながらスイゲツを見る。

「俺だけ会いたかったんじゃないだぜ、頭領」

スイゲツはそれだけ言うと、ヤスムネの視界が一気に暗闇となり、何も見えなくなった。

「このっ……技……はっ、まさか……」

「おやすみなさい、愛してます、おやすみなさい……師父すーふ」

ヤスムネは頭上を見上げ、刀を振るうが、遅かった。

クロヤミノヒツギ
「黒闇枢」

ヤスムネの周りが四角形状の黒い壁が一斉に出来、ヤスムネを包み込んだ。

そしてその技を掛けたであろう少女が、その黒い箱と化したヤスムネに、

「大好きです……」

ズシャッ!!

少女が持っていた黒い大剣が、ヤスムネを突貫した。

雷光（ひかるいかづち）（前書き）

どもども！

就職試験に受験して、見事採用内定通知が届き、ウハウハになっ
ている十握剣です！

夜中に書いたので少し変な所があるかもしれませんが、そして今回も
短いです。

10月に（かなり危険な）祭があつて行きたくも無い集会に毎晩（
↑重要）行かされ、帰る時間帯が11時（↑夜の）となつてるので、
小説を書ける時間が無いのです（泣）

10月が終わればペースが少し、本の少しだけ早くなるかもしれ
ませんので、それまで待つてくださーい（；|；）

あとがき今回無ッシン

雷光（ひかるいかづち）

「すーぶ師父……………」

ヤスムネを貫いた黒き大剣を抜く漆黒の少女。

「クハハハッ！ ナイスな突きだったぜ、ヘイファ」

ヘイファと呼ばれた漆黒の少女はペタンと座り込み、

「すーぶ師父」

黒き大剣を落とし、無表情のまま、静かに、涙を流していた。

「オイオイ、頭領を殺すなら私が殺すって言ったのはお前じゃねえか」

「……………」

「頭領を殺すタイミング、使う技、無情の一撃、全部が完璧だったぜ」

「…………うるさい、スイゲツ黙れ」

スイゲツと呼ばれた青髪の青年は肩を竦めて未だ術が発動している
クロヤミノヒツギ
『黒闇枢』に近寄る。

「黒闇枢、相手の周囲に四角形方に包み込み、相手の“視覚”“聴覚”“動作”を奪う技。凄いじゃねえか」

「・・・それも師父から学んだ技だ」

ヘイファは体育座りをして頭を埋もらせる。

「けっ、良いんだよ。頭領は俺たちを裏切った奴だ。行きたくもねえ戦争に行かされたと思いきや、いきなりギルドは解散するだア？
ふざけんなって話だ」

スイゲツは未だ発動している『黒闇枢』をドカツと蹴る。

「仕上げだ」

スイゲツがそう言う人と人差し指を空に翳す。

「何をするの？ もう私が・・・」

「クハハ、言つたる・・・・・・・・・・仕上げ・・・・・・・・・・止めだよ」

そしてスイゲツが翳した人差し指の真上、つまり空に水の球体がいきなり発生した。

「・・・・・・・・・・！・・・・・・・・まさか！」

ヘイファはすぐに地面に落ちていた黒い大剣を広い、スイゲツと対峙するように『黒闇枢』の前に立つ。

「止めて、もう終わった、そこまでするひつよ……」

大剣を構え、スイゲツを止めようとしたハイファにスイゲツは、

「……邪魔」

スイゲツがその言葉を言った瞬間、

ドバツ！ と空中に浮いてあつた水球から飛び出した水の槍にハイファの腹部を問答無用に貫いた。

「かはっ!？」

ハイファは意味も分からずその場に倒れる。

それもそのハズだ、長年一緒に仕事を共にしてきた仲間にいきなり攻撃されたのだから。

「ス……イゲツ？」

ハイファは腹部から流れる血を押さえながらスイゲツを見る。

だがスイゲツは最早ハイファを眼中には入っておらず、どんどんと空中に浮かんでいる水球を巨大化させていく。

「クハハ……クハハハハ、やっつと殺せるぜ」

水球は徐々に大きく巨大化していき、あっという間に家一つ分くら

いに大きくなった。

「大量の水が一気に押し掛ければ、重力によって水塊が沈み落ち、鉄をも折りぬく水圧であんたを押し殺す」

スイゲツが人差し指を降ろす。

「圧死しろ……『ウォタルクラッシュ水踏衝突』！」

落ちる水塊、だが、

「や……めろオオオオオオオオ！！！」

「なっ……！！！」

ヘイファは大剣を広いスイゲツに斬り掛かり、スイゲツが翳していた片手を斬る。

どうやら片手に魔力を集中させて作っていたのだろうか、水球は形を失い、その場で流れ崩れた。

「ヘイファあああああああ！！！」

スイゲツはヘイファの脇に蹴りを放つ。

「うぐッ！」

かなり力を入れて蹴りを入れたらしく、ヘイファはスイゲツからかなり離れた所まで飛ばされた。

（クソッ！ 片手はさっき技を食らってまだ痺れているのに、も

う片方の手の管を斬られて動かなくなっちまった)

スイゲツは両腕が動かなくなったことに苛立ちし、離れた場所で蹴られた脇やその衝撃で貫かれた腹部を押さえている少女、ハイファを睨む。

(殺すなら自分で殺すとかほざきやがったから連れて来たのによウ、ただ邪魔になっただけじゃねえかよ)

するとスイゲツの周りには複数にビー玉状の水球が発生してきた。

(もう・・・良いや・・・・・・・・・・・・・・・・殺す)

スイゲツは完全に標的がヤスムネからハイファに変更して、狂い始めた狂気の鋒^{きりぎりす}が、

(死ね)

ハイファに向かって飛翔した。

ビー玉状の水球がまるで弾丸のような速度でハイファ目掛けて放たれた。

ヤスムネに放ったあの青い閃光はこの技のようだ。

青い閃光と化した水弾はハイファの数歩前で地面に落ちる。

「ああん？」

スイゲツは何故急に水弾が落ちたのか疑問に思い、三発水弾を放つ。すると、またハイファの数歩前で急降下し、地面にへと落ちる。

「ああん！？ 何故だ、何で落ちやがる、狙いも速度も質量も全て演算して射ってんだぞ！」

スイゲツは数十、いや、数百の水弾をハイファ目掛けて放つが、やはり地面にへと落ちてしまう。

「ふざけんなッ！ どうなってやがんだよ！」

スイゲツが怒りを露にして地面を蹴る、するといきなり後ろから“何かが迫りくる感覚”に襲われ、力一杯に前方へと飛ぶ、いや、“避ける”。

バチバチバチィ！

するとスイゲツが立って居た場所がいきなり落雷した。スイゲツはすぐに振り返るとそこには、

「どうなってやがるだど………そりゃ、こっちが思ってる事だ、スイゲツ」

「なっ!？」 あ、あんたはまだヘイファの黒闇^{くわん}枢で閉じ込められるんじゃない——!」

そこまで言ったスイゲツは気付いた。

一体誰がヤスムネの動きを封じていたのか、と。

「黒闇枢、これを解くには術者本人が直接、解^{かい}するか、術者が気を失うか、死亡して術式を解く方法しか無い。つまり、スイゲツ。前は、あの子に何かして気を失わせたことによって俺は解放されたんだよ」

「チィ!!」

スイゲツはヘイファを睨む。

「じゃあ、俺の水弾を落ちさせていたのは………」

「俺だ、地面から雷を流し、俺の雷力でスイゲツの水弾を重力転回

し、落下させた」

スイゲツは地面が僅かに雷流しているのに今気づく。

「クソが！　なら今この場であんたを！・・・」

「出来るか？　お前に」

ヤスムネは今度こそ完全に刀を抜刀し、構える。

「殺つてやるさア！」

スイゲツは身体の前にリングゴくらいの大きさの水球を発生させ、そして、

「水閃光！」

水の鋭い閃光がヤスムネ目掛けて放たれる、が、

バシユッ！

「・・・えっ」

スイゲツが放った水閃光はヤスムネが“居た場所”を貫いた、そして、

「俺の戦いを、忘れたか」

ドカツ！

「があッ！？」

いつの間にかスイゲツの背後に回り込んでいたヤスムネは、刀の峰でスイゲツの脇腹を強打する。

スイゲツは急所を突かれ、その場で崩れようとするが、

「まだだア！」

スイゲツはヘイファに管を斬られ、もう動かないハズの腕を必死に動かし、そして、

アガラル・ウオタルリイ
「水掴閃光！」

手の中にあつた小さな水球がレーザーのようにヤスムネの肩を貫いた。

「くっ……」

ヤスムネはバックステップしてスイゲツと距離を置いた。

「があ、はあ」

そしてスイゲツも無理矢理動かした片腕が今度は完全に動かなくな
った。

「スイゲツ、お前そこまでして……」

ヤスムネは肩を押さえたまま、無理矢理動かした片腕を痛がつてい
るスイゲツを見て言う、するとスイゲツは仇を見るかのようにして
ヤスムネを睨み付ける。

「当たり前だア！！ あんたは俺たちを裏切ったんだ！ 仲間
である……いや、姉兄弟妹である俺たちを、裏切った！」

「スイゲツ……」

「許せるかよ、許せるハズなんかねえよ！」

スイゲツはそれだけ叫び上げると、すぐにまた痺れて動かない片腕
を無理矢理と動かす。

「……！？……止めるスイゲツ！ お前じゃ俺には・
・・」

「うるせえんだよオオオオオオ」

スイゲツは一気にヤスムネへと疾駆し、片手には水が纏っており、
ヤスムネの胸に打つ。

「水打掌！！」

だが、

「……効かねえよ」

スイゲツが打った水打掌はヤスムネの胸に当たらず、手だけがヤスムネの胸に当たっていた。

ヤスムネは雷を使い、スイゲツが水に魔力に紛らせた水を普通の水と分解させたのだ。

「く……そう、何処まで………何処まで俺をオオオオ！」

スイゲツは怒りの咆哮をヤスムネ目掛けて叫ぶ、そしてヤスムネは刀を構え、一気に、

「……済まない、スイゲツ」

ズバッ！ とスイゲツの斜め横を斬^{ざん}した。

ヤスムネの瞳は、悲哀に満ちていた。

黒花（ヘイファ）と千華（センカ）（前書き）

友人からユーリとの絡みを見たいと言われたのですが……話を繋げるのどれだけ大変か分かりますかコノヤロー！

と、言いたかたったのですが我慢します。

ああ……PS3欲しい。

未だにXbox360でヴェスペリア出しというPS3でまた出したのにムカついている作者でした

黒花（ヘイファ）と千華（センカ）

花の街・ハルル。

その街にある宿屋には、気絶している青髪の少年と、黒髪を片方だけ長くしているツインテールの女の子が寝かされていた。

その二人の近くには、悲しいそうな瞳で見守っている黒髪に眼鏡を掛けた青年が居た。

「どうだい、連れの人たちさんは？　一応、治療師ヒーラーに診て貰った方が……」

「あつ、いや、大丈夫だよ宿主さん。もう俺が治しといたから」

「……えっ！」

心配で入ってきた宿主の男性は、怪我をもう治したと告げたこの男に驚いていた。

「あんた治療術使えるのかい？」

「まあ……多少なりともね、それより部屋を貸してくれてありがとうございます。本当に助かりました」

「いやなに、ウチに来た時はスゴイ驚いたけどさ、怪我をした二人を担いできたアンタがあまりにも必死に頼むからこっちも断れなくなっただけさ」

宿主の男性はちょっと皮肉っぽく言っていたが、笑顔で言っていた

ので本気で言っではないのだろう。

「そっぴや、あんたの名前はなんて言うんだい？」

「ああ・・・言っでなかつたね、すみません。俺の名前はヤスムネ
つて言います」

「へえ、ヤスムネ・・・変わつた名前だねえ」

「良く言われますね」

「ハハハ、それじゃ何かあつたら言っでくれや」

「めつちや助かります」

ヤスムネは頭を下げ、宿主の男性に礼を言つた。

ヤスムネはスイゲツとの戦いの後、すぐにハルルに向かい、怪我を
したスイゲツとヘイファを治療出来る場所を探して、宿屋に訪ねた
所、宿主から了承を得て、現在に至つた。

「・・・・・・・・・・」

ヤスムネは寝ている二人を見て、また悲しいそんな瞳で近くにあつ
た木の椅子に座る。

「・・・・・・・・スイゲツ、こんなに大きくなつてよお」

ヤスムネは横になって、顔を見せないで寝ているスイゲツを見て言う。

「・・・・・・・・ヘイファも、こんなに可愛くなつてよお」

そして、ヤスムネの近くで寝ているヘイファの頭を優しく撫でるヤスムネ。

「・・・・・・・・ごめん・・・・・・・・な」

ヤスムネのその言葉に何が詰まり込もっているのか、ヤスムネしか分からなかった。

（う・・・・・・・・ん？ 此処は、何処？）

ムクツと上半身を起き上がらせる黒髪ツインテールの女の子、ヘイファが目覚めた。

ヘイファは、まだ重たい瞼を必死に開けようとしていると、ガシヤアーン！ と大きな音が響いた為にパチンツと目が覚めてしまった。

（な、何っ？ 何の音？）

どうやら音がしたのはヘイファが寝ていた部屋の扉の向こうからし
たらしい。

ヘイファはベッドの近くにあつた愛用の大剣をヒョイツと軽く持ち
上げ、部屋から出る。

すると、広い広間になっていゝる場所で、青い髪をした少年に胸ぐら
を掴まれている黒髪の青年が騒いでいた。いや、騒いでいたのは青
い髪の少年の方で、黒髪の青年は静かにそれを聞いて……いや、
受けて止めていた。

「ふざけんなよッ！……！ 何で助けたりしたんだ！……！」

「……止せ、スイゲツ。まだお前の両腕は完全には治って――」

黒髪の青年が喋っている途中で、青い髪の少年は思いつきり殴り付
けた。

「話を聞けや、この裏切り野郎！……！」

「やめろ！ スイゲツ！」

床に転がった黒髪の青年、ヤスムネに蹴りを入れようとする青い髪
の少年、スイゲツを止めようとヘイファは大剣を構えようとするが、

「う、あつ！」

ヘイファが居た部屋は二階になっており、階段から降りようとした

ヘイファは、まだ力が出ない様子で階段をガタンツガシャン！と
転げり落ちた。

「ヘイファ！」

そして、床に倒されていたヤスムネは瞬時に転がり落ちてくるヘイ
ファを抱き止める。

「大丈夫か！ ヘイファ！」

「師父すーふ……」

ヤスムネの大きな胸板に抱き止められたヘイファは自然に手を背
中に回して、抱き着いていた。

（師父すーふだ……師父の匂いだ……）

ヘイファは涙腺が崩壊しそうになりながら、ヤスムネの胸に顔を埋
もらせてた。

「俺は、俺はまだアンタを殺しに来るぜ、頭領ボス」

そしてスイゲツは、ヤスムネを殺意を込めた睨みをきかせて、宿屋
から出て行った。

「だ、大丈夫だったかいアンタ」

うるさかったのか、様子を見に来た宿主の男性が、倒れているヤス
ムネを見て駆け寄る。

「あの髪が青い子ってアンタが助けた子だろ？」

「・・・ハハハ、フラれちゃいましたよ」

「そんな冗談言つてないで、立てるか？ 肩を貸そうか？」

宿主はヤスムネに手を指し伸ばすが、ヤスムネはそれを拒否して、自ら立ち上がり、抱き着いていたヘイファも立たせる。

「ご迷惑お掛けました、すみません。部屋に戻りますね」

ヤスムネは宿主や他の客に謝罪し、ヘイファを連れて部屋に戻っていった。

「気がついたんだな、ヘイファ」

部屋に入り、ヘイファをベッドに寝かせ、脇にヤスムネは木椅子に座りヘイファと話せるようにした。

「俺に・・・聞きたい事があるだろ」

そしてヤスムネは少し悲しいような瞳でヘイファから顔を逸らしながら聞く。

「普通、話す時は顔を相手に向ける」

そしてハイファは当たり前なことをヤスムネに言い渡す。ヤスムネも今度は真正面からちゃんとハイファと見合った。

まだ幼い顔立ちだがちゃんとした『女性』の顔立ちになっており、清らかで綺麗な青瞳フル・アイがヤスムネを見ていた。

「聞きたい事は、ある」

ハイファは静かに言うが、ヤスムネにはきちんと届く。

「でも、今は良い」

「えっ」

ヤスムネはハイファの言葉に驚く、普通はスイゲツのように怒り狂ってもおかしくない程をやらかしたヤスムネを許さないハズだ。

「私は、スイゲツ程に怒ってはいないけど、悲しんでは、いるんだよ」

ハイファは俯く、恐らくハイファは泣いている。

「どうして、何の言葉も残さないで消えてしまったの？ スイゲツの言う通り私たちは兄弟姉妹きょうだいでは無かったの？」

消え細い声で、ハイファはヤスムネに訪ねた。恐らく一番にそれを伝えたかったハイファは決意ある瞳でヤスムネを見据える。

ヤスムネもハイファの瞳を見て堪こたえきれなくなったのか木椅子から立ち、ハイファに背を向けて部屋から出ようとした。

「待つてツ！ 答えられないのなら別に良い、でもこれだけは聞かせて……私たちが『きょうだい』を、まだ愛していますか」

ハイファはベッドから身を乗り出しながらヤスムネに聞く、必死に。そしてヤスムネは、背を向けたまま、口を開いた。

「……愛している」

ヤスムネはそれを力強く言い、ドアノブに手をかけようとした瞬間、プスッと背中から何か突っ込んで来た。それは温かく、柔らかいものの。

「よ……よがっだ……よがっだよ、う……う……う」

ハイファがヤスムネの背中に顔をくっ付けながら泣いていた。とても力強く手を腰に回して、

「よがっだぁーッ！」

ハイファは力強く、力強く、もう一生離さない感じで力強く、強く、強く強く強く強く強く強く強くギュウウウウと、

「クークークー、はぁはぁ……ちよ、ごめん……ハア……くる、苦しいよ、ゼーハー、あの……ちよ」

「うわぁぁぁん！」

ゴキゴキゴキイイ！

「うがああああ！ マジ死ぬ！？、何これ強ッ！ ヒーフウー、ハアハア、あ、あのちょ・・・マジデヤ、バイ、がんばるじで」

ヤスムネは顔を真つ青をしながら苦しがっていた。

そしていきなり場所が変わり、久しぶりの原作キャラ達が帝国の騎士達に囲まれていた。

「ささ、今のうちにエステリーゼ様は我らのもとに」

そして肩に橙色のような肩鎧ショルダーを装着させ、鎧も橙色の中年の男性がエステルに近寄っていた。

「帝都まで丁重にお送りするのである」

「あとはユーリを取っ捕まればいいのだ」

そして背が高い騎士と、背が低い騎士が互いに話し込みながら周りを見ていた。

シュヴァーン隊小隊長のルブランに、その隊員であるアデコールとボツコスであった。

そして声が低いルブランに気付き、近付いて来るユーリ。

「ここで会ったが百年目、ユーリ・ローウェル！　そこになおくれえ〜！」

ルブランは剣を抜いてユーリと対峙する。

「今回はバカにしつこいな」

「昔からのよしみとはいえ、今日こそは容赦せんぞ！」

ルブランは剣を振り回しながらそう言う。アデコールとボツコスにユーリを囲むように指示する。

エステルはルブランの勘違いを直そうと前に出る。

「ユーリは悪くありません。わたしが連れ出すように頼んだのです！」

そしてルブランは見事に勘違いし、

「ええい、おのれ、ユーリ！　エステリーゼ様を脅迫しているのだな！」

「違います！　これはわたしの意思です！　必ず戻りますから、あと少し自由にさせてください」

「そ、それはなりませんぞ！　我々とお戻りください！」

ルブランはエステルの「戻れません」発言にかなり動揺し、必死に説得させようとする。

「戻れません。分かってください!」

エステルも断固として引かない。これをルブランは説得は無理だと判断し、

「ここは致し方ない。どうせ罪人も捕らえるのだから……」

ルブランの指示で、アデコールとボツコスが集合したカロルとリタ、ユーリたちに襲いかかる。

「これでお前たちの自由も今日かぎり!」

ボツコスは槍を構えてそう言う。

「我々騎士団究極の戦闘術『オーバーリミッツ』で行くであゝり!」

そしてアデコールも剣をユーリに向けて力強く良い放つ。だがユーリは溜め息を吐きながら言う。

「勝手に盗むなよ。騎士団のもんじゃねえだろ」

「黙れであゝる!」

そして話を聞いていたカロルが聞いたことない言葉があったのでユーリに質問する。

「オーバーリミッツって……?」

「戦闘時の能力を上げる技だよ。どうやるんだったっけか? ド忘

れしちまったな」

ユーリは刀「ニバンボシ」を肩にトントンと叩きながら思案していると、アデコールとボツコスが自慢そうな顔でユーリに言う。

「バカめ、所詮は庶民だな」

「私が教えてやるであゝる！　だが、それがわかった時、お前たちは死の急行馬車に乗っているであィる！　えゝと、まず……斬りっ！」

アデコールがユーリに斬りかかるが、ユーリは難なく軽く躲す。

「むむっ！　えーいつ、斬りっ、斬りっ！」

アデコールが必死に剣をユーリに斬りかけるが、ユーリはずっと思案して、そして思い出す。

「そうそう、思い出したわ。相手に攻撃を当てて、闘気上げてくんだけ」

「くっはあ！　全然、当たらないではないか！」

ユーリはヒュイツとアデコールを斬りつける。

「くひっ………！　くうっ………いててであィる………もうガマンならないでゝる………！」

「あ、攻撃受けても、闘気上がるんだっけか。そっか………ここで溜めた闘気を一気に放出すれば………」

ユーリは溜めていた闘気を一気に解き放つ、すると緑色の空気らしきものがユーリから放出された。それをみたカロールとエステルは、

「うわっ、ユーリ凄い……」

「ユーリ、す、すごいです……」

ユーリを見て各々の感想を言っていた。ボッコスには軽くオーバーリミッツを使ったユーリを見て、

「これ以上、調子に乗せるな！」

ボッコスは槍を構えてユーリに突っ込んでいった。

「望むところ！」

ユーリはまた難なくボッコスの突きを躲し、その瞬間にユーリはボッコスを斬りつけていた。

「まだまだあ、であゝる！」

そしてアデコールも諦めずにユーリに攻撃をするが、カキンツとユーリの二バンボシで剣を弾かれた。

武器を無くしたアデコールはギョッギョッと空を掴んだり離したりした後、ボッコスと一緒に退ける。

「ええいつ！ 情けな〜いつ！」

ルブランは戻ってくる部下に悲観の声を上げる。

「何だか外が騒がしいね」

宿屋の一室で休んでいるヘイファとヤスムネ。
ヤスムネの手にはシチューを入れた木製の皿、そしてスプーンを持っていた。

「そうだな、よし、俺が見てくるから後は自分で食べなさい」

「ダメ、やだ、師父すーふが私にukれないと食べない」

「アハッハッー♪ このクソ餓鬼め ♪」

泣いた後のヘイファは『お腹が減った』といきなり言い出し、ヤスムネはしょうがなく宿屋から材料を貰い、キッチンを借り、ヘイファが大好きな「シチュー」を作り、部屋まで持っていく、ヤスムネが「ほら」と皿にシチューを添えてヘイファにあげようとしたら、

『両手が“さつき”の戦いで痺れて動かない』

と言われ、何も言えなくなったヤスムネは無言でヘイファに、あーん、と食べさせていたのだ。ヘイファの顔はかなり緩みきり、笑顔で食べていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あゝん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「パクツ、もぐもぐ・・・うゝん」 やっぱり師父のシチューは物
凄く美味しいよお

相変わらず嬉しそうに食べるハイファに何も言えないヤスムネ。

そして、

「ぷはあゝ」 食べた、食べた」

全部食べきったハイファは満足そうな笑顔でベッドの横になる。

「よし！ 今度こそ確かめに行く・・・・・・・・・・」

「じゃあ、私も行く」

ハイファはそう言つと、すぐにベッドから落ち、置いてあつた漆黒
の大剣をヒョイツと持ち上げ、肩に背負い、とことと部屋から出
て行つた。

「えつ、ふ、普通に剣持てるじゃん!？」

ヤスムネは置いてかれたことに気付き、すぐに追いかけていった。

宿屋から出たハイファとヤスムネ。二人は騒いでいる場所へ向かう。ハイファは漆黒の大剣を背中に回して背伸びしながら騒動の現況を見る。

「何か騒いでる」

「それは見れば分かる」

追いついたヤスムネは、ハイファの頭に手を置いて一緒になって見てみると、そこには、

「なっ、アイツはっ！」

そしてヤスムネは脳裏に焼き付いていいた憎き相手を思い出す。その者の名は……

「見つけたぜ！ ユウウリ・ロオオオウエエルウウウウ！！」

ユーリがアデコールたちを倒し、ルブランも戦闘に入ろうとした時に、エステルは知っている奴らを見つける。

「ユーリっ！ あの人たち！」

ハルルの高台にいる黒装束の男たちに気付く。

「やっぱり、オレらも狙われてんだな」

「今度はなにっ！」

そして何故か魔術を詠唱して、ルブランたち騎士団を吹き飛ばした後に何かを発見したユーリたちに聞く。

「話はあとだ！ カロル、ノール港ってのはどっちだっけ？」

「え、あつ、西だよ、西！ 《エフミドの丘》を越えた先に、カプワ・ノールはあるんだ！」

よし、とユーリは刀「ニバンボシ」を鞘に収めて、さっさと退却しようとする。

「ほら、さっさと行く」

リタは迷っているエステルに言う。

「でも、わたし……」

「・・・あゝっ！ 決めなさい。本当にしたいのはどっち？ 旅を続けるのか、帰るのか」

リタはエステルに急がす為に、はっきり区別させる為に今ここではっきりさせる。

「・・・今は、旅を続けます」

「賢明な判断ね、あの手の大人は懇願したってわかってくれないのよ」

リタとエステルも逃げようとすると、後ろ方から、

「見つけたぜ！ ユウウリ・ロオオオオウエエルウウウウウ！！！」

と刀を振り回す黒髪の青年が追いかけて来た。

「げげ、ヤスムネも居るのかよ」

ユーリはエステルを待ちながら後ろから迫ってくるヤスムネを眺めながらそう言っていると、吹き飛ばされ、意識を飛ばしていたシュヴァーレン隊のルブラン達。

「騎士団心得ひとつ！ 『その剣で市民を護る』せうだったよなあ？」

ユーリはルブランたちにそう言って迫ってくるヤスムネと黒装束の男たちに親指を立ててる。するとルブランたちは、

「その通りっ！　いくぞ騎士の意地をみせよっ！」

勇ましく剣を抜き、追ってくる黒装束の男たちに立ち向かうのであった。

エステルは走りながら聞こえるか聞こえない声で静かに、

「・・・ごめんなさい」

謝っていた。

「うわああ、何やってんだろ師父」

突っ込んで行ったヤスムネを見つめながらそう言っていると、ビューンビューン！　とハイファの横を通り越して行った。

「・・・！？」

突然だった。

まるで弾丸が通り過ぎたような速度。

あんな速度で人間は走れるのか？　と疑問に思ってしまう程の速さだった。

過ぎていったのは黒装束の男たちで、目には紅いレンズのような物

を掛けていた。

そして、その黒装束の男たちはすぐに騎士たちと戦闘に入っていた。

「——ッ!？」

ルブランたちは反応出来ずに倒されていた。
血は出ていない。

窮状を強打されただけなのだ、だがその打撃は人間には程遠き打撃だった。例えるなら『ヴァルシヨック大衝撃』、例えるなら『ガンズ・シヨック弾丸的衝撃』。どれかに当てはまった。

黒装束の男たちは三角を思わせる陣形でヤスムネを囲む。

そして一人の黒装束の男が襲いかかった。

だが、バヂッ、という紫電の弾ける音がその男の背後から聞こえた。

まるで電磁炮レールガンのような雷撃が男を襲ったのだ。

「ガアアアあああああああああああああああああああああああ
あああッッッ!？」

絶叫がハルルを響いた。

男の体が地面に受け止められ、バタッと倒れた。

それを見た他の黒装束の男たちはすぐにヤスムネから下がる。

そしてヤスムネの目には、まるで人を殺しても何も思わない鈍り色に染まっていた。

「下がれ、そしてイエガーに言え、サンダ・テーゼ『雷弼』が見張ってるから安心しろとな」

ヤスムネがそれだけ言ったハズが、どこか威圧感漂わせる殺気で黒装束の男たちを退けさせた。
そう、声色がまともではなかった。

黒装束の男はすぐにその場から居なくなっていた。

戦いを見ていたヘイファが降りて来ていた。

「大丈夫？」

首を傾げながら訪ねた。

「心配ねーよ」

そしてヤスムネはいつもの声色に戻っており、優しく微笑みながらヘイファの頭を撫で撫でしていた。
しかし、それを壊す者がやって来た。

「ふふふ、やはり強いな。ヤスムネ」

斬撃。

それらしき攻撃をヤスムネは間一髪で己の愛刀で受け止めていた。
攻撃を仕掛けて来たのは妖艶漂わせる長い黒髪に、腰鎧を装着し、

肩には赤い短マント、両腕に手甲、そして綺麗な美脚、スパッツだけ着ているその大人の女性は双剣らしく、両手には黄色い剣を握っていた。

「だが、腰が空いているぞ」

その女性は空いているもう片方の剣でヤスムネを容赦無く斬りつけた。

「がつ！？――」

ヤスムネは腰に剣を斬り付けられ、体勢を崩してしまい。女性は双剣をヤスムネに容赦無い斬撃を見舞わせるかと思いきや、女性の背中からゾワリと嫌な殺気を感じてヤスムネから離れる。

すると、バチバチッとまた紫電が放電し、

「槍雷撃！」

女性が居たであろう場所を雷の槍が貫いていた、地を溶かし、周りには雷の網が帯びていた。

ヤスムネは女性を見ると、深い溜め息を吐いて、睨む。

「そうか、お前か。騎士団の中でも名が上がり『美将』と呼ばれ讃えられている女騎士、シュヴァーン隊副隊長センカ・シンシエス」

センカと呼ばれた女性は艶気いろか漂わせてながら両手の凶剣を舐める。

「うふふふ♪ 久しぶりねえ……雷獣さん」

黒花（ヘイファ）と千華（センカ）（後書き）

久しぶりのスキット

《ユーリのさが》

ユーリ

「平原の主つてのはいつでもいるわけじゃねえんだな」

エステル

「砦の人は雨季の少し前の時期にしか現れないと言っていましたよ」

ヤスムネ

「なるほど、そのタイミングじゃなければ俺は売られなかったと言
う訳か（じいー）」

ユーリ

「なるほど、時期によって場所を移動する習性があるってわけか。
要するにオレらが最初に来たときつてのは、時期が悪かったのね」

ヤスムネ

（えっシカトユ！？）

エステル

「ですね、たまたまなのに、平原の主が現れる時と重なるなんて・
・・」

ヤスムネ

（ハガツ！？ まさかのエステルちゃんまでシカトユ！？）

ユーリ

「どうにも無駄な苦勞を背負い込む星の下に生まれてきたらしいな」

ヤスムネ

「えっ、何これ、無視を貫き通すRPGなんですかこれは！ ん？
えっ、あつ終わっちゃう系！？ 終わっちゃう系なのかコレ！？
ちよっと待って俺まだ大した事言って

あつ

エフミッドの丘（前書き）

今回は夜中にやっていたので可笑しな点がいくつかあるかもしれないが、どうかご了承を（涙）

ああ〜PSS欲しい〜。

グレイセス〜エ〜フ〜。

や〜り〜て〜い。

エフミドの丘

ガキンッ！

ジャキンッ！

ヤスムネの黒い長太刀と、女騎士センカの黄双剣との剣闘はまだ続いていた。

「どうしたんだい雷獣さん？ アンター一回も私に攻撃してこないじゃないかい」

「女に刃を向ける程オレは落ちぶれて無い」

と言いながらヤスムネは長太刀を振り回す。

「言ってる事とやってる事があべこべよッ．．．．っ！」

「ウオッ！？」

センカは可憐に片手の黄剣でヤスムネの長太刀を弾き、もう片方の黄剣でヤスムネの首に狙う、が、

「槍雷撃！」

雷の槍がセンカの真上から振り下された。センカは身体をギリギリまで捻りその場から半歩下がりながら躲した。そして、

「痺れてくれませんか？」

ヤスムネはセンカの背後に回り、襟首を掴む。

するてバヂィ！ と一瞬ヤスムネの手が光った。するとセンカは双剣を落としてしまう。

「んあっ！」

艶やかな声を出してしまったセンカにヤスムネは少し鼻の下を伸ばして反応する。

（ま、全く！ けしからん声を出しやがって！）

ヤスムネは膝を着くセンカを見下ろす。

「ま、全く！ けしからん美脚あししやがって！ 思わず直視しちまうだろ」

「師父すーぶ……声出てる」

いつの間にか近くまで来ていた黒髪ツインテールっ娘のハイファが肘でヤスムネの脇を小突く。

「ハッ！？ べ、別に俺はセンカを如何わしい目なんかで直視してねえし！ むしろ危険な物が無いか確認する為に直視してるだけだし！」

「どつちにしろめちやくちや直視してるじゃん！」

ドスッ！ と思いきり身の入ったパンチを受けたヤスムネはその場

で踞^{すわ}った。

「……………コイツらって、帝国騎士団の奴らじゃん。しかもシュヴァーン隊の」

ハイファは寝ているルブラン達を見てそう呟く。

「ふふふ……………まだ私が居るわよ」

ハイファはつまらなそうにしていると、膝を地に着いているセンカが話し掛けてきた。

「しかもシュヴァーン隊の副隊長までいるし、さっきの長髪のお兄さん何かしたの？」

「さあね、私はエステリーゼ様を救出する任務を出されたから城からやって来ただけよ」

センカも上手く動けないので、口だけでも動かす。だが出てくるのは世間話だけだった。何ともまったく気軽な感じで。

「俺もそろそろ行くわ、じゃ」

ヤスムネは長太刀を鞘に収めると、すぐにハルルから出て行った。

「ちょ、まってよー、師父ー！」

ハイファも背中に大きな大剣を背負いながらヤスムネの後を追った。

「アンタたち、起きなさい」

センカは倒れている部下たちを起こそうとするが完全にのびていた。

「・・・・雷獣逃走」

センカはそれだけ呟くと、ヤスムネが行った方角を鋭く睨んでいた。

ハルルから西にある《エフミドの丘》にヤスムネは早速着いていた。

「あの売買野郎どこだ」

ヤスムネはキヨロキヨロと坂を見渡していると早速ユーリ達を発見した。

「テメエこら売買野郎！ テメエの頭力チ割るぞ」

「過ぎた事をネチネチとうるさいねえ、それでも男かよ」

ユーリもヤスムネを発見して、ため息を吐きながらそう言うと隣に

立っていたエステルが苦笑いを浮かべていた。

「なんだとロン毛エエエ！」と掴み掛かるうとしたヤスムネをユーリはスルリと避けていた。

「ま、まあ落ち着いてください」

また襲おうとしたヤスムネをエステルが宥めた。ヤスムネもエステルを見た後にほわ〜んとした後にきりつとした顔でユーリに訪ねた。

「そう言えば君たちの子供たちの姿が見えないのは何故だい？」

ドガツとユーリからパンチを喰い、二度目の踞り。

「誰がオレたち子供だっつーの」

「そそそそうです、そうです！」

「くああああ、冗談もきかないんスカ…………腹痛ええ」

踞りながらヤスムネはそう言う。

すると坂の上から降りてくるカロールを発見する。

「ねえねえ聞いてよ！それが一瞬だったらしいよ！
銃でガツン！
プラスチック魔導器ドカンで！空にピューって飛んで行ってるね！」

ものの見事にヤスムネを無視して話を進める。

「…………誰が何をどうしたって？」

「竜に乗ったやつが！
シルトプラスチック結界魔導器を槍で！壊して飛び去ったん

だつてさ！」

その話にユーリは興味を示す。

「人が竜に乗ってか？　んなバカな」

「そんな話、初めて聞きました」

「ボクだつてそうだけど、見た人が沢山いるんだよ。『竜使い』が出たつて」

「竜使いねえ。まだまだ世界は広いな」

「お前ら何時までも俺を無視出来ると思うなよ！？」

話に割って入ってきた闖入者。

「うわっ！　ヤスムネ居たんだ！」

「くうのガキが！」

ヤスムネが大人気無くカロルに掴み掛かろうとした瞬間に坂の上から騒ぎ声が聞こえてきた。

「ちょっと放しなさいよ、何すんの！？」

見ると、リタが二人の騎士につかまれていた。

「なんか騒ぎおこしてるよ」

カロールが遠い目で状況を見ている。

（そう言えばあれはネイビーの妹じゃねーか。着いて行く気なのか）
ヤスムネは騒ぎの流れを傍観している。

するとリタから注意を離す為にカロールが騒ぎを起こす。

「火事だあつ！ 山火事だつ！」

「なんだ、あのガキ」

「山火事？ 音も匂いもしないが？」

「こらっ！ 嘘つき小僧！」

カロールの嘘に早くも気付く騎士たち。

「やばっ……もうばれたの？」

騎士たちが逃げるカロールを追いかける。すると一人の騎士が、脇で
見ているユーリに目を留める。

ヤスムネはまた一波乱来ることを予想し、逃走の準備に掛かる。

捕まっていたリタをユーリたちが助け、その間にユーリの犬である
ラピードが騎士たち抑え、ユーリたちは草むらに逃げ込んでいた。
ヤスムネは必死こいて逃げているカロールを笑いながら傍観している
と、

「雷獣さん、遊びましょー」

まだ遠いが、完全にセンカを声を聞いたヤスムネは一気に血の気が下がり、草むらにダッシュした。

「だああ！ 師父早いし！」

そしてやっと追いついたハイファも、センカの声を聞いてヤスムネと素早く草むらの中にへと消えた。

「はあはあ……疲れた」

「いやあびびる、センカの回復力には驚きが付いてくるぞ」

「はあはあ、あの、センカって言う女の人とは知り合いなの師父？」
ハイファが息を整えながらヤスムネにそう聞くと、暗い顔をして言う。

「……昔一緒に戦っただけさ、『旧友』みたいな？」

ヤスムネはそれだけ言うと、草むらを進んで行く。

「取りあえずユーリたちと合流しようぜ」

長太刀で草の根を分けて行く。その後について行くハイファが訪ねた。

「理由は？」

「えっ、理由スか？ んゝ流れるに？」

そう言つて二人は魔物を倒しながら進んで行つた。

ある程度進むと、ギヤオオンと獣の叫び声が聞こえた。

「まあゝた面白い展開になつてんじゃねえだろうな」

ヤスムネがそう言つて聞こえた方向に向かうと、そこには巨大な魔物と戦っているユーリたちの姿があつた。

「あれつてもしかしたら、ハルルを襲撃した魔物か？」

「さあ？」

ハイファに聞くも、ご存知では無かつた。

「ふははは！ ここで俺が華麗に加勢したらあのロン毛売買野郎は俺に平伏すな」

ヤスムネはそれだけ言つと黒い長太刀を鞘から抜く。

「行くぞ、ハイファ！」

「行くの！？」

どりゃあああああ、とヤスムネが草むらから出ようとすると、

「あつ」

「ふえっ？」

その草むらの近くには『ビリバリハの花』があり、ヤスムネは上手い具合に花に突っ込む。

「ゲホケボツ、ガハツ！！！？　うえっ！！！」

ヤスムネはモロに花粉を吸い込み咳き込み、そして、

「あつ、動けねえや」

見事に四肢が言うことを効かなくなり、固まってしまった。因みにヘイファはヤスムネの後から草むらから出たので、ヤスムネを押し込んだ形になって、下がっていたから被害を受けずに固まっているヤスムネをジーと見ていた。

「いや半分はお前のせいだぞ！？　何普通に俺を押してんだゴラ！？」

「だつていきなりだつたんだもん」

「『だもん』じゃねえよ！　今軽くイラッときたわ」

ギヤーギヤーとヤスムネが騒いでいると、本来の目的を思い出す。

あれ、そういや巨大な魔物と戦おうとして出ていったんだよね？

ヤスムネはゆつくりとヘイファから巨大な魔物の方へと視線を向けると、

ドガドガドガーッ！

迫って来ていた。

「やべエエエ！！マジやべえって！ いやマジで危ない！ これどうしょ！？ うわ動かねえし身体、うわぁマジでマジイ！ ちょヘイファ俺を運んで……って居ねえし！？ アイツ自分だけ逃げやがった！ えっちょ見捨てられた俺！？」

焦りまくるヤスムネ。

念のためもう一回巨大な魔物を見してみる。

ズシンッズシンッ。

刻々と迫って来ていた。

「うぎゃあああああああああああ……！！！！！！」

後に自分だけ逃走したヘイファから聞いた話だと、

『アレほど醜い師父は無かった』とあった。

エフミドの丘（後書き）

スキッド

《ユーリって？》

ヤスムネ

「……あの、ハイファ。視線がさっきから俺を貫いているんですけど、なんスか？」

ハイファ

「……質問したいんだけどさ、ユーリというのは、ヤスムネにとつて大切な人なの？」

ヤスムネ

「ブフツ……ごほつ……げほつ！」

ハイファ

「『ユーリ』って黒髪長髪のお兄さんの名前でしょ！？　もしかしたら……師父は、あっち系の」

ヤスムネ

「なんだあっち系って！？　俺はそっち系でもどっち系でもないぞ！」

ハイファ

「……じゃあ聞けどさ、昔にも聞いたけど師父の好みの子って」

ヤスムネ

「黒髪ロングの子さ」

ハイファ

「・・・・・・・・」

ヤスムネ

「ハッ!？」

ハイファ

「・・・・・・・・」

ヤスムネ

「・・・・・・・・（照）////////」

ハイファ

「・・・・・・・・（イラッ）」

ヤスムネ

「痛い!？ 無言で肩パンチやめて！ ちょ痛ッ!」

エフミッドの丘での出来事（前書き）

長らくお待ちしました

エフミドの丘での出来事

『いやーいやー、怪我也大したことなくて良かったね』

「本当ですねー」

「……いくら私が治癒術師^{ヒーラー}だったからと言え、エステルさんが居なかったらこんな状態じゃなかったんですからね、ネイビーさん」

ヤスムネが危機に陥っている同時刻、そこにアスピオからやって来た学術閉鎖都市アスピオと帝国魔導器全専門最高責任者であるコン・ネイビーが教え子であるスフィル・アウランドとキュウ・ヒュセンがエフミドの丘に来ていた。

相変わらず奇怪なガスマスクを被り、白衣を身に纏い、背には「R、L」の文字が刻まれている。

何故ネイビーがここに来たのかと言うと、エフミドの丘にあった結^シ界魔導器^{ルトプラスティア}が故障、否、大破されたので修理に来たネイビーなのである。

そして何故、帝国魔導器全専門最高責任者がこんな平地まで来たのかと言うと本人曰く『バカッ！ 僕が一見インドア派かと思いきやアウトドア派という意外性をリタに見せつけければ兄の威厳&敬愛から恋愛に変わること大切なんじゃないやあああああ！』と言って出てきたらしい。

この人物があの数多くの優秀な学者を生み出してきた学術閉鎖都市

アスピオの長だと知れば、多数の人たちが落ち込むだろう。

『へえ、ここがエフミドの丘なんだねえ。良い空気だ』

「ぜえぜえ、が、ガスマスクしてるクセに新鮮な山の空気堪能しないでください、ぜえぜえ」

「スフィは相変わらずインドア派だねー」

「ぜえ、キュウと違って私は部屋で勉強したり、読書してた方が良いんですよ」

『それでもねえー、やっぱり坂に登る時にスカートを履いてくるのは凄いことだと僕は思ってたかと思ってたかったりするんだよ！』

「どっちですか！」

そんな三人のやり取りをしながらも、大破されたエフミドの結界魔導器の前までやって来ていた。

ネイビーの姿に驚く者が居たりした、そして白衣とガスマスクという二つのせいでかなり目立っていた。

「あ、貴方があの有名な“ネイビー博士”なのですか？」

「そうだぞ、敬えおっさん」

キュウがそう言うとスフィルがつかさずキュウの頭を叩き黙らせる。

『如何にも僕がコン・ネイビーと申す者ですよ』

ガスマスクを付けた顔面を壊れた結界魔導器を診ていた魔導器技師の男性の顔に近付かせる。

魔導器技師の男性は一步くらい引きながら言う。

「さ、さつきは天才魔導士と今は鬼才魔導士か」

『“天才魔導士”……それは魅惑的な言葉ですね、もしかしてもしかすると……リタ・モルディオがさつき居たんですね』

下がったのにも関わらず、ネイビーは男性に再び近寄る。

「そ、そうですっ」

それを聞いたネイビーはすぐに壊れた結界魔導器を跨^{また}ぎり、サツサツサツと坂を上がり始めた。

大破した結界魔導器の近くにいた騎士や魔導器技師の男性も驚いていた。

「ちょ、ちよつと待ってくださいネイビー博士！」

「^{シルトプラスティア}結界魔導器を診てくださいるのでは無いのですか！？」

ネイビーは振り返る。

『その結界魔導器は直らんよ、心臓部であるクリスタルが見事に碎け散るよに壊されている。恐らく壊した奴は魔導器を知り尽くした者の仕業だね。修復しようにもクリスタルは古代の遺物^{ゆいもつ}だから代わりのクリスタルを持ってくれば幾分はどうにか出来るよ』

ペラペラと話すネイビーに魔導器技師の男性が聞く。

「ま、待つてください。 “クリスタル” とは何ですか!？」

それを聞かれたネイビーはひと気付いて訂正する。

『すみません、僕は魔核^{コア}をクリスタルと読んでいるんですよ』

それを言つとネイビーは虚空を眺め始めた。

『リタが……あの可愛いリタが初めて魔核を見た時にたまたま手に入った綺麗な透明色の六角水晶を見て『わゝ、綺麗な結晶^{クリスタル}』』
と言つて以来、薄汚い大人の世界で痛く荒んだ僕の心を浄化させてくれたあのリタは本当に愛くるしく、正に天から舞い降りた幼き天使^{エンジェル}のようでそして笑った表情の時なんかもうそれそれは大変至極最上史上可愛い可愛く愛くるしくそしてまた、もう、可愛い、あの、もう、そ、それもう、リタは、か、可愛くぐわああああああああああ…… リタに会いたいイイイイ!!』

淡々と喋っているかと思いきや、かなり色々つぶつ飛んだ状態のネイビーは叫びながら坂を登つて行つた。

「ちよつ!! 追いかけるのは私たちなんですよー!? 私そんな坂を走るとか荒業できませーん!」

なんとか結界魔導器を跨いだスフィルがいきなり走り出したネイビーの後を恐らく走っているであろうノロマな走りの後を追いかけて行つた。

「結論は『その結界魔導器は直らない』 みたいですね、だから代わ

りの魔核が届くまでエフミドは魔物が居る無法地帯ですね♪ それではっ」

キユウ軽く飛び跳ねながら結界魔導器を跨いで、軽く走っただけで先に行ったスフィルと一緒にしながら登って行った。

「蒼破刃！」

蒼い衝撃破が大きな狼のような魔物にユーリの特技を見舞いしたのだが、

グワァァオン！

「くっ！」

魔物・ガットウーゾの尾に払われた。

「効いちゃいるが、効果は薄か」

「ユーリ！」

「ああ、分かってるよエステル。あそこで力カシになつて馬鹿を助けりゃ良いんだろ」

ユーリはガットウーゾと戦いながら、チラツと横目で見てみるとそこには。

[illegible]

ヤスムネが居た。

前回、いきなり草むらから現れたと思いきや《ビリバリ八の花》に突っ込み、動かなくなつたヤスムネが物凄い険しい表情になりながら戦況を見ていた。

ガットウーゾがまた動かないヤスムネを襲おうとしたのですが、草むらから黒い人影が出て来たと思いきや、ガットウーゾを斬りつけたのである。

「師父！」

「ハイファ！」

ヘイファと呼ばれた少女は黒髪ツインテールを揺らしながら漆黒の大剣をガットウーゾ目掛け、一閃。

「黒影閃！」

ヘイファが漆黒の大剣に気を溜めさせ、黒い衝撃破を帯びた縦一閃に斬りかかる。

するとガットウーゾは急所に斬られたらしく、魔物特有の血を吹き

頭に出来たタンコブを摩りながらヘイファとヤスムネはユーリ一行と行くことになっていた。

「なんでアンタまで着いて来んだよ？」

当然ユーリも疑問に思っ てヤスムネに問いかける。

「るせえよロン毛、死ね」

そしてまだ人身売買されたことに根を持っているヤスムネはユーリに悪態つくが、無言で刀を鞘から抜こうするユーリね姿を見たヤスムネはすぐに返答する。

「チツ、ちよつとお前らに着いて行くと面白そうな場面を目撃出来そうだから、という理由だったらどうする？」

ヤスムネが挑発を含めた視線をユーリ一行に浴びさせると、

「オレは殴る」

「僕は叩く」

「焼き殺す」

「最後の待つて！？」

危険極まりない発言を耳にしたヤスムネはすぐに発言者を見ると、今すぐ魔術を詠唱してきそうに睨んでいるリタが居た。

「待てえい、リタリタ」

「「リタリタ!?!」」

ヤスムネの発言に驚くカロルとエステル。

リタリタと呼ばれ、恥ずかしそうに赤面するリタ。

「だ、誰がリタリタよ!?!」

「いや、君しか居らんだ――」

「ゆらめく焰、猛追……」

「また待てい!?!」

詠唱に入ったリタを止める為にヤスムネはリタに飛び掛かろうとして、

「来るな変態!」

ドガツとヤスムネの溝をキックするリタ。

「うぐいあ」と呻きながら倒れる、そしてうつ伏せになったヤスムネの背中に足を乗つけたリタはそのままグリグリと足を擦らせるように踏みつける。

「あれがお前の師父せんせいなのか」

「……考えたくないですね」

哀れな師父を目の当たりにしたハイファはユーリの質問に素で返し

てしまった。

因みにハイファは先程ヤスムネが紹介した。

リタが「うらうらあゝ、気持ち良いかこのクソ駄犬、良い声で鳴けえー」と^{サテリスト}S全開でやっていたが、エステルとカロールが必死に止めに入る。

「ダメだよリタ！ それ以上キャラ崩壊させちゃいけないよ！」

「そうです！ これ以上リタのキャラ崩壊はさせては読者の半分は削ることになってしまいます！」

「その発言も言っただけなの！？」

思わずつつこむリタ。

「ほら、大丈夫師父？」

「・・・う・・・あ・・・ゆ・・・ッんは！？ はあはあ・・・
・・・お、思わず何かが目覚めてしまいそうになった！」

冷や汗かきまくりのヤスムネをハイファが手を取って上げて起こす。

「はあ・・・うるさいのが増えたな、ラピード」

「ワンッ」

ユーリはラピードに向けてそう言つと、止めていた歩を進めることにした。

獣道をユーリー一行が着々と進んで行くと、視界が急に開ける。
目の前には限りない青が覆うように広がっている海原があった。

「うわあ……………」

「これ……………って……………」

「ユーリー、海ですよ、海」

「分かってるって……………風が気持ちいいな」

「本で読んだことはありませんけど、わたし、本物をこんな間近で見るのは初めてなんです！」

初めて海を見たエステルははしゃぎながらユーリーに言う。

「普通は結界を越えて旅することなんてないからな。旅が続けば面白いものが幾つも見られる。大森林や滝、砂漠、とかな」

ヤスムネも彼方に続く海を眺めながらそう呟く。

「そうだな……………オレの世界も狭かったんだな」

ヤスムネの言葉にユーリーも素直に答える。

「あんたにしては珍しく素直な感想ね」

「リタも、海初めてなんでしょ？」

エステルがリタに聞くと、少し胸を張りながら言う。

「ま、まあ、そうだけど」

「そつかぁ……研究ばかりのさびしい人生送ってきたんだね」

「あんたに同情されると死にたくなるんだけど。実際に見るのは初めてだけど、海は映像で見たことあるわよ」

リタがそう言うのとエステルが質問する。

「見たことあるんです？」

「ええ、一回だけ。その、あの人に見せてもらった事あるの……」

「あの人って……ネイビーつつう人か？」

ユーリがそう言うと、リタはコクリと頷く。

「そういえばアンタ、あの人と知り合いな訳？」

突然リタが座って海を眺めていたヤスムネに質問した。

「んー？ ネイビーか？」

「そうよ、あの人の事をそんな風に呼ぶ人って大抵昔の知り合いだ
って言うてわ」

ネイビーがか？ とヤスムネが聞くとリタは肯定する。

「そうだよ、昔の知り合いさ」

それだけを言ったヤスムネはまた果てしなく続く海を見る。その瞳には哀しさと虚しそうな色が交ざり合っていた。

「これがいっつの見ている世界か」

「ユーリ？」

「もっと前に、フレンはこの景色を見たんだろうな」

ユーリも海を見つめながら言う。

「そうですね。任務で各地を旅してますから」

「追いついて来いなんて、簡単に言ってくれるぜ」

「エフミドの丘を抜ければ、ノール港はもうすぐだよ。追いつけるって」

カロールが気軽そうにユーリに言うため息を吐く。

「そういう意味じゃねえよ」

「え？ どういうこと？」

「さあて、ルブランが出てこないうちに行くぞ」

ユーリは海を最後まで見ながら皆を先に促す。

「ノール港はここを出て海沿いの街道を西だよ。もう目の前だから」

カロルがそう言って先方を走って行こうとする。

ユーリはまだ海を見ているエステルに声をかける。

「海はまたいくらでも見られる。旅なんてうからでもできるさ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

黙って聞いているエステルにずっと座っていたヤスムネも声をかける。

「ソイツの言う通り、その気になりやな。今だってその結果だろ？」

「・・・・・・・・そうですね」

「ほら、子供が走って行ってっぞ」

「おいカロル、お前慌てると崖から落ちるぞ」

「もう何言っただよユーリ、ボクがそんな子供みたいな・・・・・・・・
って、うわああああっ！」

カロルがちょっただけ崖から身を投げ出していた。
だがバランスを保ち、どうにか落ちなかった。
リタがそんなカロルを見て、

「バカっぽい……」

それだけ呟いた。

ふたたび獣道を進み、一行は大破した魔導器ブラステイアの反対側に抜けていた。
そして一行が待っていたのは。

『リタアアアアアアアアアあああああああああ！！』

ガスマスクを被った人物だった。

「げっ！　コン兄！？」

今アスピオに居るであろう兄の姿にリタは驚きの表情を浮かばせる。

『リタああ！　一日千秋のような思いだったよ（泣）（泣）』

「（泣）じゃないわよ！　ちょ、はーなーせー！」

恐らく涙を流しているのか、リタに抱き着いてスリスリしているネイビーに苦笑いを浮かばせるヤスムネ。

（俺の旧友、変態だ）

そんな風に見ていたヤスムネにカロルが訪ねてきた。

「ねえ、さっきネイビー博士が言った“いちじつせんしゅう”って何て意味なの？」

「あつ、私も気になったあー」

カロルの質問にハイファも一緒になって聞く。

ヤスムネは「しょうがねえなあゝ」と言って胸を張って言う。

「意味は『あなたが側に居ない時なんて無意味以外の何者でもありませんつまり大好きですマジでスキスキ過ぎてハアハア言う程に極好きだよゝ だゝゝいすきゝゝゝ あふゝゝゝんゝ』ってことだ、略すと」

「ちげえよっ！ ってお前らも、えっ違うの！？ って顔すんな！」

余りにも違い過ぎる答えにユーリがヤスムネにツツコミを入れてしまった。

変わりにエステルが二人に教える。

「【一日千秋】意味は一日会わなければ、千年も会わなかったように長く感じること。です」

「へえ、そういう意味だったんだあ」

「師父とは天と地だね」

ハイファは侮蔑の念を込めた目をヤスムネに向ける。

「ええ〜そんな目で見るか普通〜」

ヤスムネもあまりにも冷たいハイファに涙目になりながらもネイビ
ーに振り向く。

「おい、いつまでもじゃれ合ってんじゃねーぞ。ネイビー」

『ん？ お前誰だ』

「・・・・・・・・え・・・・・・・・」

『何処かで見たとあるんだが・・・・・・・・やっぱり知らん顔だ』

それを面と向かれて言われたヤスムネは、真顔のままユーリに振り
向くと、

「俺は・・・・・・・・誰だ？」

かなり神妙な顔つきでユーリに訪ねた。

「知らねえよ」

非情にもユーリは容赦ない言葉の槍をヤスムネの柔かなメンタルを
貫いた。

「・・・・・・・・（ずーーん）」

そしてヤスムネの周りには漫画みたいに黒い雨線みたいなのが垂れ
ていた。

そんなヤスムネを無視して、ハイファはネイビーに着いて来ていたスフィルやキュウと対面していた。

「ハイファ！」

「ス……スフィル、キュウ……」

スフィルはハイファに満面な笑顔を向けながら抱きつく。キュウも笑って見ていた。

「久しぶりだね、ハイファ。元気にしてた？」

キュウが気軽そうにハイファを訪ねると、ハイファは少し間を置いてから「……うん」と答えた。

それをリタに抱きつきながら見ていたネイビーが最後に力強くリタをギュツとしたら離れた。

「ぜえぜえ、相変わらず変態兄貴だわ……ぜえぜえ」

リタはネイビーは距離を置いて息を整えていた。それを見たカロルは同情したような目でリタの肩に手を置いて「その、頑張つて」と言った後に黒焦げになっていたのはすぐ後だった。

『リタ充（リタ・モルディオ充電）もした事だし、用件を言ようか』
ネイビーは白いガスマスクをハイファ、スフィル、キュウに向けると、

『良い？　これは僕やヤスムネ、ルートに関わることだ』

ネイビーがそれを言葉にした瞬間にハイファやスフィル、キュウは真剣な顔になって話を聞く。

『僕の推測が正しければ、ヤスムネを憎んでいる昔の“家族”がもう時期襲い掛かってくるときだ……ハイファやスイゲツみたいだね』

それを聞いたハイファはすぐに顔を俯かせた。スフィルやキュウは驚いた顔でハイファを見る。

ハイファは恐る恐るネイビーに聞く。

「み、見ていたのですか」

『見てないよ、言ったでしょう』推測』だって。仕入れた情報、ハイファ達の性格、どの作戦で動くか、どう風に仕掛けてくるか、そんな感じなのを……予想しただけ』

ただ淡々と、だがどこか確信のあるその言葉にハイファはただ聞いているだけだった。

スフィルやキュウも黙って話を聞く。

『君達にも話せないけど、僕らはもうギルドに戻らない。それを話す為にも僕はヤスムネと一緒に行くと思う』

それを聞いたスフィルは一番に反応する。

「ネイビーさん！　いえ、ネイビー“市長”！　あ、貴方は学^{アス}術閉^{ビョ}

鎖都市から離れる気なのですか!？」

声を荒げたスフィルだったが、ユーリたちが気付いている様子が無い。

「『サイレント無音空間』を使っ^ててんのか、そこまでするなよネイビー」

ネイビーの後ろからヤスムネが苦い顔をしながら現れた。

『ごめんよ、でもこれはエステリーゼ様に聞かせられない。それとギルドに詳しそうなその子供にもね』

「カロールだ」

『そう、カロールくんには』

ネイビーの作り出した魔術によってユーリたちの気管を無害的に捻曲げらせ、違う言葉として聞こえさせる魔術それが『サイレント無音空間』。本来なら音無くす魔術なのだが、それでは不審がられるのでネイビーが少し変換させたのだ。

ネイビーにはまだ数多くのオリジナルの魔術を持っている。

何故スフィル達やヤスムネには効かないかと言うとネイビーが単にスフィルたちだけ聞こえさせているだけなのだが、ヤスムネは数ミリの電磁波を発生させ、ネイビーの魔術を掻き消しているから聞こえている。

『スフィル』

名を呼ばれたスフィルは少し驚くが、ネイビーの顔、ガスマスクだが真正面からきちんと見る。

『確かに僕はあの都市の最高責任者であり、帝国に所属する魔導士でもある。でもね……僕はあのギルドの一員でも“ある”んだよ』

しかし、とスフィルが食い下がるがネイビーの一言で黙る。

『“大切な家族を裏切ったままじゃ嫌だ”』

それを聞いたスフィルは、涙目になりながらまた何か言いたそうな顔になるが、キュウが優しくスフィルの手を握った。

ハツとスフィルはキュウの顔を見ると自分と同じく涙目になって、嬉しそうな、そして何処か哀しそうな顔で力強く手を握る。スフィルも応えるようにキュウの手を力強く握り返す。

ヤスムネは顔を俯かせたままのヘイファの前まで近寄ると、グシャグシャと頭を乱暴に撫でる。

ただそれだけ、ヤスムネはそれだけしてヘイファに背を見せ、離れていった。

『だからスフィル、君はアスピオに戻って、僕の帰りを待っててよ。必ず帰るよ』

「……はい！」

ビシッと親指を立てたネイビーにスフィルは笑う。

『キュウもスフィルを支えてあげるんだよ？ 君は僕なんかより面

倒見が良いからね』

「分かりましたー!」

キユウも元気の良い返事を返す。

『じゃあそろそろ無音空間サイレントを解くよ、良いね?』

ネイビーがそう言うと、三人はコクンと頷く。

ネイビーは親指と人差し指を摩らすような動作をするとユーリたちの会話が聞こえてきた。

「違うよ、魔物が嫌いな匂いを出してる薬品がぬられたものを結果って呼んでるだけ。一晩くらいの間なら魔物を遠ざけることはできるけど、時間がたつと魔物たちがその匂いに慣れちゃうからね」

どうやらカロールがテントについて話していたらしい。

「んじゃそろそろ行こうぜー、てかネイビーお前俺の名前覚えてんじゃない!」

『じいさんてんさいじ、下から読んでも、じいさんてんさいじ』

「急にどうしたお前!?!」

ヤスムネはネイビーと一緒にユーリたちについて行くことになった。

エフミドの丘での出来事（後書き）

スキット

《竜使いについて》

ユーリ

「世の中にはおかしな趣味のやつもいたもんだな。魔導器を破壊して回るなんて」

エステル

「趣味とは違うと思いますけど」

ヤスムネ

「じゃあ、特技か！」

ユーリ

「いや意味分かん」

カロル

「何か、壊す理由があるんじゃない？」

リタ

「わけがあるうがなかつが、魔導器を破壊するなんて、あたしは許さないのよ！」

カロル

「わゝ、ちょ、首、首、首を！　ぐへえゝゝゝ！　だずげで、ユーリ……ヤスムネ」

ユーリ

「やだよ、面倒くさい。がきんちよ同士、仲良くしとけ」

ヤスムネ

「ハハハ、ウケる」

カロル

「エステル……」

エステル

「えと……がんばってください」

不穏なる港街（前書き）

夜中に書きましたので、どこかまた変になっているかもしれません
が、そこはご了承お願い申します。

そして発表されましたね、新作テイルズ♪♪

テイルズオブエクシリア！

またもP S 3のソフト！

いやあゝざけんな（「！」）

X b o x 3 6 0を買ってしまった自分は一体なんなのかと、常に思
っています。

関係無いッスね、スンマセン！！

不穏なる港街

ユーリたちはエフミドの丘を越え、目指していたノール港に着く。降りしきる雨は、止む気配がない。

「……なんか急に天気が変わったな」

雨が降っている中、ユーリがそう言っただけでカロールが急かす。

「びしょびしょになる前に宿さがそうよ」

カロールはそう言っただけで街のどこにある宿を探す。

ユーリはふと街をばーっと見ていたエステルに訪ねる。

「エステル、どうした？」

「あ、その、港街というのはもっと活気のある場所だと思っていました……」

そこで今まで静かにしていたヤスムネが口を開く。

「昔からノールはこんな所さ、クソ胸くそ悪い」

『そんな風に言うなよ、ノール港はアイツと……
いや……アイツの故郷だろ』

「……悪い」

ネイビーがガスマスクを被っているせいか、淡々と言葉を発する。

「なんかここにアンタが探してる魔核^{コア}ドロボウがいそうな感じよ」

「デデツキってやつが向かったのはトリム港の方だぞ」

「どっちも似たようなもんでしょ」

リタとユーリがノールについて話しているとカロールも混ざってきた。

「そんなことないよ。ノール港が厄介なだけだよ」

「どういことですか？」

「ノール港はさあ、帝国の圧力が……」

カロールが話そうとした瞬間に遮るように街から男の野太い声が響く。声ができる方を振り向くとそこには夫婦が役人らしき人物と傭兵に頭を下げている所だった。

（……変わっちゃったんだな、今のノールは）

ヤスムネは虚しい目でその光景を見ていた。

「金の用意が出来ないときは、お前らのガキがどうなるかよくわかっているよな？」

「お役人様！！　どうか、それだけは！　息子だけは……返してください！　この数ヶ月のあいだ、天候が悪くて船も出せませ

ん。税金を払える状況でないことはお役人様もご存知でしょう?」

「ならば、早くリブガ口って魔物を捕まえてこい」

「そうそう、あいつの角を売れば一生分の税金納められるぜ。前もってそう言っただろう?」

役人と傭兵はそれだけ言って、夫婦から離れて行った。

「なに、あの野蛮人」

「カロール、今のがノール港の厄介の種か?」

「うん、このカプワ・ノールは帝国の威光がものすごく強いんだ。特に最近来た執政官は帝国でも結構な地位らしくて、やりたい放題だって聞いたよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そんな・・・・・・・・」

ユーリはその現状に険しい表情になり、エステルも哀しそうな顔になっていた。

「・・・・・・・・なあ、ネイビーよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「俺たちが戦ったあの日から、何か変わったかよ・・・・・・・・」

『・・・・・・・・・・』

「はつきり言って・・・・・・・・」

『やめなよ、更に面倒事になるよ』

「・・・・・・・・お前はそれで良いのかよ」

『・・・・・・・・・・』

ネイビーはヤスムネの言葉にただ無言で聞いているだけだった。

そして先ほど役人たちから責め立てられていた夫が立ち上がる。良く見ると身体中傷だらけだった。

そして夫は剣を片手に街の出口へ歩き出す。

「もうやめて、ティグル！ その怪我では・・・・・・・・今度こそあなたが死んじゃう！」

「だからって、俺が行かないとうちの子はどうなるんだ、ケラス！」

走りだした夫・ティグルは、ユーリの突き出した足に引っかかって転ぶ。

「痛ッ・・・・・・・・あんだ、何すんだ！」

「あ、悪い、ひっかかったまった」

「もう！ ユーリ！・・・・・・・・ごめんなさい。今治しますから」

（わざと過ぎんだろ、ユーリ）

エステルが治癒術でティグルの傷を治していると、ヤスムネは頭の中で青年の不器用なやり方を少し詠嘆していた。

「あ、あの………私たち、払える治療費が………」

夫を治してくれたエステルに妻・ケラスは申し訳無さそうに言うが、ユーリが怪訝そうにケラスに返す。

「その前に言うことあんだろ」

「え………？」

ケラスは何を言われたのか、本当に分からないような顔になる。

「まったく、金と一緒に常識までしばらく取られてんのか」

「………う、ごめんなさい。ありがとうございます」

ケラスはやつと言われたことに気付き、すぐにユーリやエステルたちにお礼を言い、頭を下げた。

『………そんな暗澹あんたんとした表情かおになるなよヤスムネ。《行雲流水》、成り行きにまかせて行こうよ』

「激昂する気も湧かねえよ。侘しいだけだ」

ヤスムネは恬淡になろうと、頭の中を無にしようとしたが、やはり今の現状に目を向けられないのは焦燥以外に何もなかった。

するで、ユーリが居ないことに気付くヤスムネ。

ヤスムネは夫婦をネイビーやエステルたちに任せてユーリを探しに街に入るとヤスムネが良く知っている何人かの黒装束が路地に入っ
ていくのを目撃した。

リヴァイアサン
(海凶の爪か、忠告した筈なんけども？)

ヤスムネはすぐに黒装束たちが入って行った路地に赴き、ちらりと
少し見てみるとそこにはユーリともう一人の騎士装束の黄髪青年
が戦っていた。二人はまるでお互いがしっかりと見えているかのよ
うに俊敏な動きで黒装束達を追い詰め、そして思いきり黒装束たち
をぶっ飛ばした。

戦闘が終わり、ユーリが騎士の鎧を纏っている黄髪青年に話し掛
けようとした瞬間、青年はユーリに斬りかかった。

(まあユーリは手配書になってる筈だから見逃す訳ないか……
どうやらアイツが“フレン”らしいな)

ヤスムネはあの黄髪青年が本気の剣筋では無いのを確認してから
その場から離れた。

(街に活気が無いのはエステルちゃんだけが気付いた訳じゃないん
だけだな、誰だって分かる。こんな薄暗いような雰囲気漂ってい
る街を見りゃあな^{ノール})

ヤスムネは冷たい水滴となって降り注ぐ雨雲を見上げる。

ノールの街中を歩くヤスムネ。すると大きな屋敷に入っていこうと
する少女の姿が見えた。何故かおでんをくわえた少女は、門を守る
傭兵に引き止められる。

「何入ろうとしてんだ、このガキが」

「まあまあ、これでも食って落ち着け」

そう言つて少女はくわえていたおでんを傭兵に差し出した。

（ええゝ傭兵怖くねえのかよあの子）

少女の勇者ぶりを見ていたヤスムネは感極まるように傍観。

「いらねえよ。ガキが来るところじゃねえんだ。ここは」

傭兵の一人がヒョイッと少女の首根っこを掴むと、ポイツとゴミを捨てるかのように少女を投げ飛ばす。

するとヤスムネの方に飛ばされてしまい。

「うおッッ!!」

「むむ………」

「子供一人になんちゆう事してくれるんだ、アイツら」

すると二人居た内の一人がヤスムネに気付く。

その傭兵は深いフードのようなものを被り、顔が見えなかった。するともう一人の傭兵もヤスムネに気付く。

「なんだおまえは。そのガキの親父か何かか？」

「え
え
・
・
・
・
・
」

その言葉にヤスムネはサアと青くなっていく。

「お、俺って……そんなに老けて見えんの。おお俺はまだ
こう見えて二十歳よ、ピチピチの若人よ……それが、父親つ
て……父……親……」

「再チャレンジなのじゃ」

ヤスムネから手を離れた少女は再度屋敷に向かって走り出す。しかし、傭兵が剣を突き出したため、急ブレーキをかける少女。そしてネガティブゾーン突入にも急ブレーキをかけたヤスムネが立ち上がり、傭兵に叱責する。

「ウオイウオイ、丸腰の子供相手に武器向けるのかよ。今時の傭兵さんはよう」

ヤスムネが後ろに隠してあった長太刀を取りだそうとした瞬間、力キーン！ と金属音が鳴り響いたと思ったら傭兵の剣が消えていた。

「 ^ . . . つ ! ? 」

傭兵も急に消えた剣に驚きながら横を見る。すると横に立っていたフードを深く被っていた傭兵らしき青年の片手には白い剣が握られていた。

「怖い事しちゃ駄目っしょ。やっぱ」

そのフードを被った青年傭兵は己の白い剣を後ろ腰に差してある鞘

に収める。

どうやらあの一瞬で剣を抜き、もう一人の傭兵の剣を弾いたらしい。

「な、何しやがる!!」

当然剣を弾かれたもう一人の傭兵は怒るようにフードを被った青年傭兵に掴み掛かろうとしたその時。

ヒュ~~~~ン

ザクッ!

傭兵の顔を掠めて降り落ちて来た剣で静止した。

そして数秒硬直したと思えば、ドカツと腰を抜かして地に尻餅を着かせた。

それを見ていたヤスムネは見覚えのある青年傭兵の武器について思案していると、フードを被った青年傭兵が少女とヤスムネに語りかけてきた。

「失礼した、俺の名前は……シラヌイと、そう、俺の名前はシラヌイだ」

自らシラヌイと名乗ってきた青年傭兵に対して少女とヤスムネは同時に思い言った。

「思いっきり偽名じゃねえか」

「思いっきり偽名じゃな」

それを言われたシラヌイはビクッと身体を震わすが、すぐに平然を

保つ。

「ま、まあとにかく俺はシラヌイと言ってこの屋敷の主の傭兵を務めている。だから簡単には入らせる訳にはいかない。分かった？
そのふ、二人」

若干おどしながら言っているが伝える事は伝えたシラヌイ。

「むう……ではまたの機会にて」

「いや待てって、だから駄目って行ってるでしょーよ」

シラヌイは少女に近づこうとしたが、ピタッと止まり、すぐに後退りした。シラヌイが立っている場所には屋根がちゃんとあって雨に濡れないようになっていた。

「コナイデネ」

そして明らかに変な口調に変えて言ってきたシラヌイ。ヤスムネはやはりといった感じにどこかの人物に似ているのを思いだそうとしていたが、あと少しという所で思い出せないでいた。ネイビーが居たらな、と思っていると、

「さらばじゃー！」

何故か少女は地面に何かを叩き付けると、黄色い煙があたり一面を包み込む。するとヤスムネとシラヌイは。

「「うぎゃあああああああああああああああああああ！！
？」」

尋常では無いビビリ反応をしてその煙に触れないように逃げる。

「ネネネ、ネイビーが開発した『竜さえ殺す超莫大級有毒ガス』の色に似てた・ハアハア・・・てか似すぎてるよあの色は、ハアハア、完全屁の色じゃん!!」

ヤスムネは猛スピードで逃げ、街の入口まで来て、息を整えていた。

「ん？ あの娘っ子もきになるけど、シラヌイって奴も死ぬほど驚いてたけど・・・どうしてだ？」

ヤスムネが疑問に思っていると、どうやらヤスムネを探していたユーリがやって来た。

「何やってんだ、アンタ」

「取りあえず思い出したく無い思い出を思い出していた」

「はぁ？ 取りあえず早く宿に来いよ。いつまでもウロウロされてつとこっちが困るんでね」

「うん分かった」って言うと思ったかボケエ!! 何お前の方が年上っぽい事やって言ってるの!? 俺の方が年上だもんね!」

何を対抗したいのかヤスムネはユーリに挑戦的な言い方ともい、ガキの言い方になりながら叫ぶ。

「なら歳相応な行動取ってくれよ」

「任せろ！ 宿まで俺が案内してやる！」

そう言つてヤスムネが街中の奥にへ進んで行くのを後ろからユーリが見送ると、街の入口の“すぐ”近くにあつた宿屋に静かに入つて行つた。

「このノール港の街にはな、隠れた名のある宿屋があつてよ、そこには腰痛が治る秘湯や、便秘が治るサウナ、またも視力が良くなる砂風呂とかあるんだぜ、あの角曲がつた所にあるんだけどよ、へへ、安くて豪華で快適なんだぜ……ほらここに……いや待てユーリ、まだつて、つ……潰れちよる！？……いや待てユーリ、まだ隠された宿屋があるんだ………って居ねえじゃん！！？」

シンシンと雨が降っている中で、憂慮するヤスムネがポツンと立っていた。

【憂慮】
わごころ

意味：心をいためて嘆くこと。

不穏なる港街（後書き）

スキット

《ユーリの憂い》

ユーリ

「帝国がでかい顔してるのは、どこの街も似たようなものなんだな。旅に出る前は、下町のことした頭になかったから、全然考えもしなかったけどさ」

ラピード

「クーン……」

カロル

「特にここ、イリキア大陸は帝都があるし、よけいだよね」

ヤスムネ

「トルビキアみたいに大きなギルドの拠点があるわけでもねえから帝国の思いのままなんだろうよ」

ユーリ

「やっぱ、このままじゃいけねえよな」

ラピード

「ワン！」

ヤスムネ

「……何かラピード久しぶりなんだけど、どうしてだろう……」

・あ、ちょ！ ラピード待つて咬まないでマジで！ 俺マジで咬まれるとかNGだからガチでぎゃあああああああああああああああああ！！？」

カロル

「・・・・ヤスムネは絶対最後に何かやらかすよね」

苦者（クーシャ）の世迷言（ヨマイゴト）（前書き）

更新遅れてすんません！

それとレディアントマイソロジー3の発売日が昨日だとはッ！
友達がさっそくプレイしているみたいです……く、くそっ、俺も
やりてえ！！

カノンノの声優さんが平野綾さんとは、中々（喜）

P S 3で発売する新作のテイルズ、《テイルズ・オブ・エクシリア
》是非やりたいですね♪♪

では長々とすみませんでした。

変かもしれません！

『……魔導器フラスティアに関する資料だからオークションに出されてしまえば学者達が高額で買収してしまう』

「リタは何処に行つたの？」

『奥の部屋で何か話してるよ、騎士の青年と一緒に』

リタに関する質問には即答するネイビーに疲れたような顔でヤスムネが見て言つ。

「帝国で重宝されているお前が何故立ち会いしないんだ？」

ヤスムネはネイビーが据わっていた向かいの椅子に座る。来客専用だけあつて座り心地が良かった。

『知らされているのは世間一般に名前だけさ、姿を現す必要性皆無、納得？ 沈黙了解で頼むよ』

「沈黙りよーかい」

長椅子だつた為にヤスムネは他に客が居なかつた為に横になる。

『濡れたんなら乾かしたら』

「自然感想で十分、OK？」

『ま、別に良いけど』

二人はそれだけ会話をすると沈黙に入る。

するとヤスムネが横になりながらネイビーに聞く。

「今話してんのって……此処の、ノールの執政官について、だろ？」

ネイビーは言葉を言わなかったが肯定の頷きでヤスムネの返答を返す。

「ユーリは色々とやっちゃったから捕まるんじゃないか、ハッハッハッハッ！」

『ヤスムネもヤバいんじゃないの』

ハッハッ……ああーそうだった、とヤスムネが気ダルそうにため息を吐く。

そんな二人のやり取りをしていると宿屋に新たに来客者が入って来た。

「雨が激しくなっていたな、頭が大変な事になっているぞ、ウィチル」

「ソディアこそずぶ濡れですよ」

入って来たのは騎士服を着ていたソディアと呼ばれた女性とリンゴのような頭が特徴的な魔導士の服を着ている眼鏡の男の子はウィチルと呼ばれ、指摘された頭を気にしつつ奥にへと進む。

そして進むのなら必ずヤスムネとネイビーに目が届く、勿論二人は

何気にポーカークフェイスを気取っていたが、内心は心臓がバクバクしながら停止していた。

二人が立ち止まらない事を二人が願っている、ふとヤスムネは横にいるネイビーに目がいく。

奇妙なガスマスク、

目立つ白衣、

（ネイビー（バカ）が居やがったアアアアアアア！！！！）

こんな不審者極まり無いこの人物を無視出来る程に騎士は怠けている筈も無く、

「・・・・・・・・ん？」

ソディアと呼ばれた女性騎士が訝しげに二人を睨んだ。

（ネイビー・・・・・・・・バレたら百発くらい殴る）

ヤスムネが覚悟を決め、内心ネイビーを殴ることを決意し、ソディアから受ける一言を待ち受ける。

「おい、その二人！」

ホラ、来たよ。

脱獄したヤスムネは勿論、アスピオの市長であるネイビーが此処に

居るのに気付くのは時間の問題だろうと思っていたヤスムネは威風堂々とポーカーフエイスを決め、寝ながら構える。

「他に客が居ないからと言って横になるのは規則違反だぞ！」

「え、あ、ちょ、そっちツスカ!?」

ヤスムネは驚いてソディアに顔を向けると「?」といった感じに困りながら『そ、そうだ』と返してくれた。

「あ、はい、そうですねえ！ 他にもお客さんが来るかもしれないんだから俺だけ椅子を全部使っちゃダメだよねえ〜!」

ヤスムネはすぐに行儀の良い正しい座り方をして視線を垂直線にして目を泳がす。

そして一番の問題がネイビーだったのでヤスムネはハラハラしながら後の状況を見ていると、ネイビーを見たウィチルと呼ばれた少年がギョッ！ と目を見開きタラタラと冷や汗を流していた。

「さ、さあソディア、すぐにフレン様にご報告をしなければいけませんよ！」

ウィチルがソディアの背中を押しながらそう言う。

「……?……急にどうしたウィチル、まだそこに奇っ怪な恰好をしている男に注意をしていな……………」

「ただ大丈夫ですよ！ 僕には冷血無比の白衣の悪魔なんて見て
ませんから！」

「今、白衣のつて……………」

「さあああ行きましょー！」

ソディアは困惑の表情を浮かべながらウィチルに押されて奥にへと進んで行った。ウィチルの表情は青白くなっておりまるで青リンゴのように頭をびくびくしながらソディアと奥の部屋に入って行った。

「……………お前、あの子になんかしたのか？」

『え、知らないけど』

「あっけらかんと返すねアンタはー」

ヤスムネは女性騎士が居なくなつた事を良いことにまた横になる。そしてネイビーはガスマスク越しで瞳がどんな風な動きをしているのか不明ながら呟いた。

『この連続した豪雨に暴風の原因は、絶対に魔導器^{フラスティア}の影響だよ』

「は？」

『季節柄、荒れやすい時期だけど船を出すたびに悪化する理由がどこにも無い、皆無』

ヤスムネは顔をネイビーに向けて話を聞く。

『ヤスムネが居ない間、聞いた話だけど、ノールの執政官の屋敷内に魔導器らしき物が運び込んだ目撃者が居たよ。執政官の名は“ラゴウ”』

「ラゴウ……評議会か」

ヤスムネは幽かに目を細めた。

『それと天候を制御する魔導器を造ったのは僕だね、造るのに一苦労だったよ、何せ評議会からの威圧を掛けられたし……』

そこでネイビーは一度、息を吸う。

『ただし造ったのは形だけさ、どの原料を使って動かすかは評議会^{ネービー}で考えてくれと言ったけど』

「……まさか」

ヤスムネはネイビーがどんな意味で言っているのか遅れて理解した。

「その原料って“水道魔導器”^{アクエフラスティア}か!？」

コクリとネイビーは静かに頷いた。

『水道魔導器の魔核^{コア}は『複雑な性質と能力』、そしてその形を圧縮・

引張と人間が学び覚えた技術では無理だったものをクリティア族が発明した術式それを注ぎ込まれる事に水道魔導器の魔核が新たな力を産ませる事が可能になった」

だが、とネイビーは付け加えた。

『高熱で溶かし形を造り冷却、硬化を高めたりとクリティア族以外の人間が魔核を己の技術で試してやってみたりしたけど駄目さ。クリティア族の術式や技術に敵いようが無い』

「だが、お前はやってのけた」

ヤスムネは微笑みながらネイビーに言うが、ネイビーは不服そうな顔になる。

『何もしちゃいないさ“クリティア族の技術”をとことん学んだ僕だっから出来た芸当さ』

ネイビーはポケットから一つの鉄球を取り出した。掌に収まる位の小ささだ。

それをネイビーは魔術を使って“溶かした”。

「ぐわあー！？ 何やってんだお前！」

ヤスムネはネイビーのいきなりの行動に驚いた、が溶かした赤々と溶けている鉄が朱色になりながらも床には落ちなかった。

ネイビーが魔術的なかで溢れないようにしてるらしい、その証拠にネイビーの掌には浮かんだまま落ちない溶けた鉄があった。

『人間は鉄を溶かし、様々な形にする事によってまた新しく学んだ。

それを覆したんだ、クリティア族は』

ネイビーは浮いてある溶けた鉄を魔術で人形ひとがたにして、そして一気に冷却させた。

ズシューウウ！ と溶けたい鉄が一気に冷やされ、固まっていく。

『化学式、元素、それも利用して更に上へと登り詰めたクリティア族の知識。その知識に踏み入れればまだ見ぬ不透明いろな知識を僕の頭脳に刻み染められる！』

ネイビーは出来上がった鉄の人形を机の上にカタツと置いた。

「お前がどんな風にそんな考えになったのか分からねえけどさ」

ヤスムネはズガツとネイビーの胸ぐらを掴み、そして勢い良く引き寄せる。

「他人を“巻き込む”な！」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「お前まで壊れんな、ネイビー。俺達がイカれたら残したアイツらどうすんだ」

ヤスムネは静かに、だが何処か怒気の含んだ声で言う。

「俺達は屍を踏み締めて生きてこれたんだよ、未熟だったから無様に生き残ったんだよ。俺達は“生かされたんだ”」

そしてヤスムネは力強く、そしてはつきりと言う。

「まだ明日を見て踏み締められないあの子達が、俺達を待ってんだ、もう一度の青空の下を本気で走らせろ事が出来るのが俺達かもしれないんだ！ その俺達が先に壊れてどうすんだ！ まだ終わっちゃいねえんだよ俺達の戦争は！！」

ガタツ！ とネイビーの胸ぐらを掴み上げる。

「お前が造った魔導器ならどう壊すかぐらい分かんたろ！ だつたら吐き叫べよ、だつたら行動しろよ。お前の頭脳は何の為に在んだよ、あの子達を守る為に身に付けた頭脳だろ！？ クリティア族の知識なんて別に要らねえだろ。自分の頭脳で切り開け……………」

ガチャッとそこでヤスムネの後ろからドアが開く音が鳴った。

「な、何やってんのアンタ！」

茶髪の天才魔導士少女、リタが駆け寄ってきた。

ヤスムネは後ろを向くとユーリが不思議そうに、エステルは心配そうに、カロルは驚いた顔でヤスムネとネイビーを見ていた。

確かにいきなりヤスムネがネイビーの胸ぐらを掴み上げているのか意味が分からないだろう。

『……………技術を提供したのは、僕だ』

「そうか……………」

ヤスムネはネイビーの胸ぐらを離し、入口にある扉のドアノブを握る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ルートが居た」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「多分だけど、な」

ガチャッとヤスムネは宿から出て行った。

「な、何があつたんでしょうか・・・」

エステルはオロオロしながらユーリに聞くが分かる筈も無いので首を横に降る。

「な、なんか大声上げてたね、ヤスムネ」

項垂れているネイビーを見ながらカロルが言う。

「何かあつたのは、確かだろ」

ユーリも項垂れている奇妙は恰好のネイビーを見て呟いた。

リタも無言でネイビーを見ている。

ネイビーは今どんな表情をしてるんだろう。

悲しんでいる？

泣いている？

楽しんでいる？

笑っている？

いやどれも違う。

リタはポスツとネイビーの隣に座って脇腹を小突く。

『あたっ、痛いなあ、リタ』

「・・・・・・・・・・・・・・・・バカ」

リタは分かる。

長年一緒に居たからこそ分かる。

コン・ネイビーは苦しんでいる。

何億の杭を身体に突き抜かれるように。

苦しんでいる。

暗い闇に包まれる鬼才は逃れられない。

駆けようにも暗闇が道を塞ぐ。

もう一度、今一度、

一筋の雷光^{ヒカリ}を照らして下さい。

そうすれば、また歩き出せるかもしれない。

そうすれば、また駆けられるかもしれない。

ネイビー
苦者は苦みを齧^{かじ}った。

苦者（クーシャ）の世迷言（ヨマイゴト）（後書き）

ヤスムネとネイビーの関係は今後やっていくつもりです。

どんな過去なのか、どんな体験をしてきたのか。

因みに年齢は

名前 / ヤスムネ

年齢 / 26歳

名前 / コン・ネイビー

年齢 / 27歳

とネイビーの方が年上です！

炎の嵐と輝く雷と宵の闇（前書き）

夜中にやったので変になっているかもしれません！

そしてレディアントマイソロジー3にハマっています！

この小説はオリジナルのキャラが出て来ますが自分なり原作キヤラとちゃんと接点を紡ぎ合わせていきたいと考えております故にどーぞお読みになってくださいましー！！

今回は完全オリジナルの話です、ユーリとか登場しません、すみません（泣）

炎の嵐と輝く雷と宵の闇

ヤスムネは内心焦っていた。

仮にも昔の仲間だったとは言え、現在は紛れもなくアスピオの『市長』の胸ぐら掴んでしまったのだ。

（お、俺もユーリと同じく指名手配か！？）

そんな事を思いながらもヤスムネの足はラゴウの屋敷にへと向かっていた。

雨は相変わらずでザーザー、と降っている。

ヤスムネは雨に打たれながらラゴウ邸の手前にある橋まで登った瞬間だった。

ヒュンツ、と金属のような物体がヤスムネに向けて飛んで来たのだ。

「危ねッ！？」

ヤスムネは雨で視界が悪くなったせいかわ反応が遅れ、頬を掠れる。

「見いゝつけた、雷獣さん♪」

そしてヤスムネに向けて飛んで来た方向を見ると、そこにはハルルでヤスムネを倒そうとしていきなり襲ってきたシュヴァーン隊副隊長の女性騎士、センカ・シンシエスの姿があった。

真紅の腰鎧に肩から伸びる短マント、腕にも紅色の手甲、そして愛用としている黄色い双剣。

間違い無くセンカだった。

「センカ、もうここまで来てたのか？　可愛い部下はどーしたんスか」

ヤスムネは警戒しながらセンカとの距離を置く、センカもセンカでヤスムネの対応を面白おかしく見て微笑む。

「ルブラン達はちよつと用があつて私とは別行動・・・ねえ、そんな事よりお姉さんと遊びましようよ？」

そう言つてセンカは妖艶な顔をして投げつけた双剣の片方を握り締め、ヤスムネにザツと疾駆する。

「超遊びたいわ・・・でもそんな激しくされたら俺再起不能になつちまう」

「あらあら、男の子ならもうちよつと我慢するものよ？」

センカは腸を裂くようにヤスムネの腹部に躊躇無く貫こうと黄色い剣を突こうとしたが、ヤスムネは体よく横に飛び避け、武器である刀の柄を握ろうとした、が、

「あれ？　追撃が無い？」

センカの嵐のような剣撃が無いのに驚き、センカを見ると投剣した我が剣を拾っていた、無防備にも背をヤスムネに向けてた。

そう、無防備にも剣を拾うのに腰を深く曲げている為お尻が艶かく上がっていた。

ヤスムネはさぶ濡れになりながら立ち上がると、センカにそう言って返答を待つ。

だが返ってきたのは、

「ええ、だって興味無いもの」

何の感情が込もっていない答えだった。まるでその『質問の返答さえ無意味に感じさせる』程の声色、ヤスムネの顔さえ見向きしていない。

「お前、それでも騎士団かよ……」

だがヤスムネもそう返ってくるのが分かっていたのか、静かにそう返す。

今度はちゃんとセンカの顔がクルリとヤスムネと向き、瞳を細くして話す。

「あら？ それはどんな意味を表してそう言っているのかしら？」

センカがそう言いながらヤスムネに近付く。

「貴方は“今の帝国騎士団や評議会がどれだけ腐敗しているのか分かって”そう言ってるのでしょうか？」

ただ静かに、そして何処か殺意が籠^{こも}った声色でヤスムネに言う。

「私はシュヴァーン隊長の命令で『捕らえる』と言うのなら喜んでラゴウ執政官を捕縛してあげる、でもそんな命令は受けていない、

そして私には何の興味が無い、どれだけその執政官が反吐野郎へトだったとしても私には関係ないのよ結果的にね？」

そして力強くセンカは人差し指をヤスムネの胸に突き指し、

「私が興味を持つ物はただ一つ……『戦い』よ、戦いは『生』を感じさせてくれる唯一の方法、それ以外には死ぬほど興味が無いの、分かる？ 本当に興味が無いのよ、例え目の前で狡猾な男が瘦そく躯の子供を殺そうとしても、例え餓え苦しみ野だれ死のうとしている人が居たとしても、全然興味が無いのよ」

知っている。

ヤスムネはこの魔ま艶えん美しくも壊れている女を知っている。

シュヴァーンと言う騎士団の隊長と出会う日まで死闘たたかっていた女を知っている。

だからヤスムネは無言でセンカを見た。

そのヤスムネの反応にセンカはふて腐れたように睨にらんだ後、ザーザーと降る雨の中、港街カプワ・ノールを出て行った。

「センカ、お前もまだ苦しんでいるんだな」

ヤスムネがそう呟くと再びラゴウ邸にへと歩みを進めた。

橋で少し騒いだせいか、見張りをしている傭兵が厳重に警備を固めていた。

ヤスムネはラゴウ邸の手前にある壁の物陰に隠れて様子を伺っていた。

そして一度見に来た時にヤスムネが気に仕始めた傭兵の青年を探す。

「あれ？」

だが傭兵の顔を確認していくとさっき会った傭兵が居なかった。

交代したのか？ とヤスムネが思っていると、トントンと肩を叩かれた。

（見つかったッ！？）

ヤスムネがそんな風に思ってから後ろを振り向くと、

シュコーシュコー、とガスマスクを付けているネイビーが居た。

ビクッ！！ とかなり驚いたヤスムネだったがネイビーに止められてなんとか傭兵に気づかれずに済んだ。

ヤスムネはいきなり現れたネイビーに何か質問しようとする、手で静止させられる。

『「技術を提供」したのは僕だ、僕も手伝っよ』

若干声色のトーンが下がっていたがガスマスク越しに見えるネイビーの瞳にヤスムネは溜め息混じりに言う。

「おう、じゃあ早速行くか」

ヤスムネは堂々とラゴウ邸の入口にへと歩いて行く。

は？ とネイビーは思った。

何故あんな堂々とラゴウ邸の正面からと思っていると、何やらヤスムネは門番をしていた傭兵と話をしている。

ネイビーは遠くの壁から見ていたので何を話しているのかよく分からなかったが取りあえず何か取り引きをしているらしく、ヤスムネの懷から珍しい形をした腕輪型の魔導器^{ブラスティア}を2つ取り出し、門番二人に渡す。

すると門番はまるで急用が出来た感じな雰囲気になって門から居なくなった。

あれあれ？ とネイビーが思っているとヤスムネはネイビーにグー、と親指を立ててラゴウの屋敷の正面玄関から入った。

（ありゃ、入ってっちゃったけど・・・大丈夫なのかな？）

ネイビーに何も言わないで入って行ったヤスムネに後を追うようにネイビーもコソコソと正面玄関から入る。

流石は評議会議員なだけあり中は豪華な物が沢山あり、ネイビーはガスマスク越しに目を擦った。

シュコーシュコー、と先に入って行ったヤスムネの姿を捜すが何処にも居ない。

ネイビーは溜め息を吐きながら取りあえずこの天候を操^{ブラ}っている魔^{スティア}導器を探す事にした。

屋敷の中は本当に豪勢で廊下を歩く度に無駄に金ピカな像に子供の落書きなんじゃないか、と思わせるような肖像画まで飾つてある。

（評議会のご老体は随分と有意義な生活を送られているんだネ）

ネイビーは白衣のポケットに手をつ込みながらテクテクと廊下を歩いていた。するとネイビーの肩にポンッと誰かの手が置かれた。手の正体を知るべく振り返ると、

「ネイビーお前何堂々歩いてだバカっ」

先に侵入したヤスムネだった。

『少なくともヤスムネよりは馬鹿じゃないよ？』

「え、あ、まあ・・・そうだけど・・・うん、そうだけどさ・・・
・・・俺が、言いたいのはその馬鹿じゃなくて、その・・・」

何ともメンタルが弱すぎるヤスムネが落ち込んでいるとネイビーはまたテクテクと廊下の置物を物珍しく見ながら歩いて行く。

「デメエ待てコラ、バカセ！」

『バカセ？』

「おう！ 博士と馬鹿を合わせてだから“バカセ”だ！ どーよ」

『とことん程度の低い考えを持つ男だねヤスムネは』

「お前はいつからそんな毒舌になった！？ ん、ハツ・・・まさかそれが本心！？」

ぎゃあぎゃあ！ と騒いでいるヤスムネとネイビー、普通はこんなに騒いでいればラゴウが雇った傭兵がわんさか出て来そうなのだが、見事に誰一人出て来ない。

ヤスムネとネイビーは天候を操る魔導器を探すのに部屋を一つ一つ探して行ってるのだがまだ発見出来ないで居た。

天候を使って悪巧みするラゴウを許せないヤスムネでもあったが、こんなにも広すぎる屋敷を全部端から端まで探すなんて退屈ですぐにダラダラと動くようになった。

研究者のクセに妙に凄い行動力を発揮するネイビーは白衣をひらひらさせてテクテクと歩みのペースを弛めないで探している。

「つーか広いんだよこの屋敷、そのラゴウとか言う爺さんはご老体のクセにこんな広い屋敷持つて何したいんですか？ 皆でお食事会とかですか、それともパーティーか？ ギャハハハ、同じか！」

『つべこべ言わず探そうよ、それよか僕はさっきの門番をどうやって退かせたのか知りたいね』

ガチャ、と部屋のドアを開けて魔導器が無いか確認しながら聞くネイビー、ヤスムネは欠伸をしながらネイビーの問いに呆気なく答え

る。

「ああ、ありや交渉したのに決まってんじゃん、『ブラステイア魔導器を無料でやるから屋敷入れさせて』ってな」

『そんな簡単に入れてくれるものなの？』

「『信用してないなら売るのも良し、10万は軽くいくぞ』と言ったら馬鹿正直に言うこと聞きやがった。模造品っつーこととか考えて無^ねーのかねあの門番傭兵の奴らは、仮にもギルドに属してる奴らがよ」

そんな風にヤスムネとネイビーが話していると、ネイビーが次の部屋のドアをガチャ、と開ける。
すると、そこには。

「ふむ、このうちを捕らえる罫^{トラップ}を用意するとは、中々じゃのう」

ガチャン。

『お前こそ現実受け入れろよ!! 今この現実受け止めるー! 夢も希望無いでしょうが!?!』

「大丈夫だ、ホラ、あそこに可愛い娘が見えて来た、アハハハハ」
「見てみるよ、呼んでるよ俺のこと」

『アハハハほとんどー』 ってリアルに現実逃避してんじゃねえよ!?! 三途の川じゃないのそれ!?! 行くなヤスマネ! 僕を置いて行くな!』

「三途の川かあゝ、ああ、でも死ぬ前に………
リタちゃんにチュ……チュ……チュウしたかったなあゝノノノ
やべっノノノ ネイビーが居ないからって本音が」

『神様アアア! どうかコイツを三途の川では無く地獄のマグマ川まで引き連れてって下さいイッ!! つかテメエ兄の目の前で良く言えたならゴラア!?! 殺す!!!』

もうめちやくちやに浮遊時間の間に喧嘩しまくる二人にやっと終わりが着いた。

ドカツツツ!!

「『痛てええええええええええええええええええええええ!!!』
?』」

当然人間がこの位で済む筈がありません。この二人はおかしいので痛いとかぶだけでなんとも無いみたいです。

「痛たたたた、って此処どこだ？ ラゴウ邸の．．．．地下？」

ヤスムネはパンパンと服についた汚れを落としながら辺りを見ている。

薄暗く、良く周りが見えないが．．．分かる事はあった。

「．．．．．死臭、だと」

そうなのだ、今ヤスムネたちが居る場所はどんな風な場所なのか良く分からないが、とんでも無く臭く、生き物が腐敗したような匂いが充満しているのだ。

『ガスマスク越しでも匂うね、血と．．．．あとこの匂い何処かで．．．．』

「．．．．ツ！？」

ネイビーが辺りを探索しようと立ち上がりガスマスクを直していると、ヤスムネが愛刀の柄を握り警戒する。

「ネイビー．．．．魔物だ」

『なんだよヤスムネ、もうこの暗さで目が馴れたの？』

ネイビーがそれと言った瞬間だった。

ガシャンッ！ と暗闇の奥から金色に輝いた野生の眼がネイビーに襲い掛かる。

「出やがった！」

ヤスムネは刀を鞘から抜き、黒い刀身でその襲ってきた何かを斬り伏せた。

ズバツ、と地に転がったのは魔物の肉片だった。

「……こんな趣味をお持ちとは、僕はこんな反吐野郎に「技術」を提供してしまったなんて………ム力つくね」

ズバツ！ とヤスムネは周りに居た他の魔物を斬り伏せていた時だった。ネイビーは白衣の内側にあるポケットから単語帳のような物を取り出していた。

「おいネイビー！ こんな時に暗記の時間かよ！ 早くお前の魔術でコイツら一掃して――」

くれよ、とヤスムネの言葉は最後まで続かなかった。

ヤスムネが振り下ろして斬り落とそうとした魔物の首が先に“斬られた”からだ。

「はあ？」

意味が分からなかったがすぐに次の魔物を狩る為すぐに次の反応をしようとしたが、振り返った瞬間にその反応を打ち消した。

二人。

そうこの場に居るヤスムネとネイビー以外の魔物達全員の首が跳ねられていた。

「なんだよこれ」

ヤスムネは予測不可能な事態に困惑しながらネイビーに近づく、するとヤスムネはネイビーの片手に単語帳から破り取られた単語紙があるのに気づく。

「ネイビー、これ・・・お前がやったのか？ あの“一瞬”で・・・」

ヤスムネがそう聞くとネイビーは残りの単語帳を懷に戻した。

『行こう、ここは気に食わない場所だ』

表情なんて分からない。ガスマスクから見たネイビーは暗く、恐ろしく見えた顔だった。

(・・・あつ・・・あつ・・・あの、一瞬にだぞツ?)

ヤスムネがさっきの現象が一体何なのかネイビーに問い詰めたかったが止めた、今のネイビーは気が立ってる。変に刺激しないのが得。

ヤスムネは黒刀を鞘に収め、ネイビーの後を追った。

無言で歩き続けるヤスムネとネイビー。
そして暗闇からでも分かる最悪な光景。

腐敗した人間の肉と、白骨化した人骨だった。

「……………ハハハ、同じ人間がする事かよ、これは」

『娯楽を尽くす為に人命さえ遊び断ち尽くす。それが今の帝国の評議会……………僕はその帝国の犬さ』

吐き気を誘う死臭を我慢しながらもヤスムネとネイビーは歩いて行く。

そんな二人に何か聴こえた。

「……………おい、ネイビー」

『……………幽かになら聴こえた』

ヤスムネはすぐに壁や床に耳を当てる。

「子供の泣き声だ!!」

『待つて』

ヤスムネはすぐにでも声の根源に向かおうと駆けようとしたがネイビーによって止められる。

「なんだよッ!!」

『子供はこの場所から東南の方向に踞うずくまってる、魔力を壁や床に這わせてもう確認した。子供の周囲には魔物がまだ居ない、それよりも大変なのはこっちだ』

はあ？ 大変って何が！ とヤスムネが聞こうした時だった。

暗闇の奥からまるで熱風のような暑苦しく、そして死臭が交ぜ合わさった感じで気分を悪くさせられた。

魔物の仕業か？ とネイビーに聞くが首を横に振られた。

それじゃあ何、とヤスムネが熱風が送られる方向を見てみると、そこには。

「侵入者は、お前たちか」

そこにはヤスムネを追い返したフードを被った傭兵門番をしていた青年、シラヌイだった。

「やあシラヌイくん、また会っちゃったわね」

シラヌイと呼ばれた青年傭兵はチラツとヤスムネを見ると何故か溜め息を吐いた。

「侵入者を捕縛する、抵抗するなよ、アンタら不法侵入してんだからな」

シラヌイは腰に差してあった双剣の片方を抜き取る。

『ヤスムネ、もしかしてコイツが……』

「構えろネイビィィィー!!」

ネイビィがヤスムネに聞こうとした時、ヤスムネは叫びながら己の武器を抜き、最大の“技”と“業”と“術”の衝突。

「旋れ凶刃の風、焰色に染まりし紅色、焼き尽くすは炎嵐！ 我が二つ名を此処に示す！」

「輝け、退魔の雷光！ 凪ぎ払うは邪悪な亡念！ 照らし覆せ大雷！」

『貧浴な闇界ここに下り、邪を打ち砕かん！』

ラゴウ邸地下にて、強大な衝突がカプワ・ノールを揺らす。

「《炎嵐斬灰廊》！」
えんらんざんかいろう

「《悪斬雷王刀》！！！」
アクキルイカツチノオウタチ

『ネガティブゲイト！！』

輝き斬らす雷と駆け巡る炎の嵐、そしてその二つを覆い被さるように広がり包む闇。

その三つの衝突は10年前にも起きているのは、誰も知らない。

炎嵐の傭兵ルート・フレイヴ。
えんらん

雷弼の青年ヤスムネ。
サンダ・テーゼ

鬼才の魔導師コン・ネイビー
きさい

鍵はこの三人が握る。

炎の嵐と輝く雷と宵の闇（後書き）

スキット

《ウィチルとリタはお知り合い？ かあらあの！》

ユーリ

「そういや、あのウィチルつてもアスピオの人間だって言ってたな」

エステル

「リタとも知り合いなんですよね？」

リタ

「ん．．．．．？ ．．．．．さあ？」

カロル

「さあつて．．．．．」

リタ

「なんか視界の端には入れたことがあったような気がするけど．．．
．。ぼんやりとしか覚えてないのよね」

ネイビー

『全く、そんな人間関係を築いて行くと後が大変だぞリタ』

リタ

「げえ．．．．．」

ヤスムネ

「あからさまに嫌がられてるなネイビーさん」

ネイビー

『いいかいリタ、友人とは言うのはかけがえのないものなんだ』

リタ

（うげ、久しぶりの説教・・・てか皆の前で止めてよね）

ヤスムネ

（ふっ、無視か。馴れて来たのが悲しいな）

カロル

「わあ、見て見て、エステルっ、リタが叱られてるよ」

エステル

「兄妹、羨ましいです」

リタ

「くッ／／／／」

ネイビー

『そう、友人は良いよ・・・だって友人は代わりに
お金を使ってくれるのだから！』

リタ・エステル・カロル

「「「えっ？」」」

ネイビー

『この間もヤスムネに100万ガルドくらいあげたんだ、使う必要
が無い僕の変わりに使うヤスムネはなんてかけがえのない“友達”』

なんだろう」

リタ

「・・・誰よコン兄の純情な心を誑たぶらかしたのはーッ！」

ユーリ

「一人しか居ねえだろうなあ」

リタ

「ハッ、何処に行ったヤスムネーッ！」

エステル

「あっ！ もうあんな場所まで逃げてます！」

リタ

「くそう！ コン兄の収入が絶妙に減っていったのはあのバカヤローのせいかぁーッ！」

エステル

「あっ！ 何か転けましたよヤスムネさん！」

リタ

「焼く！」

カ
ロ
ル

「えつと？」

・
・
・
・
何の話だったわけ？」

狡猾の執政官と炎嵐の傭兵（ルート）（前書き）

福島県で、と言うより東北で起きた大震災で被害を少なからず受けた十握剣です。

幸いにも家族が誰も欠けず居た事が何より嬉しかったです。

ですが福島県で何カ所か生き埋めになったり、大津波で沢山の人たちが流され、まだ中学生の女の子だと言うのに母親と妹が波に拐われるのを“目の前”で見て、泣きながら絶叫している場面がテレビで報道され、自分が今どれだけ奇跡的に助かり、そして家族が無事である事が何より大切なのを改めて知りました。

被害に合って初めて知る気持ち。

思い改めます。

そして次に原発に水素爆発、そして度々襲い掛かる余震、福島県はまだ安眠する事は出来ません。

ガソリンも無くなったら車も動けず、避難する事も出来なくなりま

す。

放射能、怖いです。

地震でさえ怖かったと言うのに、今度は原発で福島を苦しめます。

岩手県や宮城県、はっきり言って福島より岩手県や宮城県の方が被害が大きいと思います。

そしてテレビに映るのは不安にさせるような報道内容、もちろん安心させる報道もありますが、被害を受けた地域や人たち、これを見て気分を明るくなる人は居ないと思います。

自分もそうでした、だからせめてこの小説サイトで面白く、明るい文で皆に笑顔を送りたいです。

笑顔になりましょう。

笑顔になれば周りも気が和らげます。

せめてこの小説が皆を喜ばせるようになりますように……。

長々とすみませんでした！

今回の話は凄く長くなっちゃいました。

オリジナル過ぎますが、どうか見て行って下さい！

負けるな福島アアア！

ウルアアアア！！！

ガソリンプリーイズ！

狡猾の執政官と炎嵐の傭兵（ルート）

—そう、今から丁度10年前に、史上最悪な『戦争』があつた。

《人魔戦争》

馬鹿な人間な協定を破ったせいで戦争になった。人類の飽きるような“欲”のせいで人類を殺した。

その戦争に参加したのは帝国騎士団も勿論ギルド連合も参加した。

そして、そこに参加した者に年端もいかないう少年少女たちも戦争に駆り出されていた。

その少年少女が集う傭兵ギルドも《人魔戦争》に参加しており、そこに一番年齢が高い三人組の少年たちが居り、一人は首領^{ボス}、一人は参謀役、一人は斬り込み隊長となっていた。

その三人の少年たちが立ち上げたギルドは新星のように瞬く間に有名になった。

一つは年端もいかないう少年少女たちがプロの傭兵集団たちにも劣らぬ技量や戦闘能力。

二つは首領と参謀役、斬り込み隊長の三人の実力だった。

斬り込み隊長である少年は難しいと言われている『双剣』を手足の
ように操り斬り刻む剣撃、そして魔導器フラスティアから生まれる魔力で火炎と
疾風を巧みに操り、炎の嵐を生み出す。

彼が戦い通った道は炎の嵐となり、白い消し炭しか残らなかった。

彼の名はルート・フレイヴ。

ギルドの仲間や味方から言われた二つ名は“炎嵐のルート”。

ルートは二つ名を恥じぬ戦いを『人魔戦争』で発揮する。

そして参謀役としてそのギルドを上手いように行動させたり、“多
数対少数”では勝てない、という理論を砕かせる策を張らせたこと
もある少年が居た。

魔道まどうに歩みし魔道を極み尽くし、魔道を真に導いて行くこと知った
少年。魔導士フラスティアならば魔導器を知り尽くさなければならない、研究
を研究を重ねて知る真の魔術の術式。

少年は瞬発的に発動させる術式を生み出し、どう如何に迅速且つ効
率良く殺せるか。彼は自作した魔導器と特殊な術式で施した紙幣で
その戦争を乗り越えた。彼の生む魔術は正に“真の魔術”であり、
人道的主義が如何に無意味なのかを思わせる程の壊滅的な破壊力の
魔術を数々作り出した人物。

彼の名はコン・ネイビー。

後にアスピオや帝国に置いて必要不可欠な人物となり、クルノス1
4世の為に造った魔導器、皇帝魔導器エンペラフラスティアを生み出した人物である。

この二人だけで十分過ぎる戦力を持っているが、その二人が“首領”と認めた少年が一人居た。

例えるならば

ルートは“戦力”

ネイビーは“知力”

そして首領には“人徳”があつた。

首領となる者、器は天より高く海のように寛大に広くなければならない。

だがその首領にはそんな大それた程器は大きく無かつた、だが皆はその首領しやうなんに付いて来たのだ。

強さに惚れたのでは無く、知恵に惚れたのでは無く、彼の“人生”に惚れたかもしれない。

まだ数年しか生きていない彼の人生に何処に惚れる要素があるのか、分かる筈も無いかもしれない。

だが彼は、彼より小さな子供や彼より長く生きた老人や、彼より大きな幸せを手にした人たちを、自分にある力で守れる人をこの手で守れるなら、守りたい。

その決意、意思、覚悟に、惚れたのかもしれない。

だから彼の元に力ある少年や少女たちが協力してくれたのかもしれない。

首領となつた彼もそんな仲間になつた兄弟きやうだい妹を守る為、力を得た。

雷。

彼が扱う魔導器は特殊、ブラスティアと言つより『危険』な魔導器だった。

大雷。

その魔導器は常に雷を帯びており、装着すれば帯電し、電死する。ブラスティア
そんな危険な魔導器を扱えたのが彼だった。カミナリ

彼はその『危険』な魔導器を装備してあの戦争の最前線で戦った。
本物の嵐のように天を暗雲で覆い、そら雷雲となり雷を地に降らす。彼
が吼える度に雷鳴と鳴り轟き、彼が一太刀振るえば雷の波となる。

彼につけられた二つ名は“雷神”と“雷獣”。

ギルドの名は『闇を駆ける雷』。

《人魔戦争》に戦出した人物なら知る者は沢山居た。

そしてそのギルドの首領を務めた少年の名は、

ヤスムネと言う――

ラゴウ邸の地下では間違い無く莫大な爆発が起きたに違い無い“痕”があった。

天井や床もそうだが、壁や辺りには焼き焦げた黒い炭、そして木造建築なのか木々には雷が帯びていた。

だが何故こんなにも被害が“小さく”済んだのかと言うと、

『ヤレヤレだ……』

白いガスマスクに白衣に身に包んだ青年、コン・ネイビーが魔術で圧縮させ、被害を少なくしたのだ。

「どりゃあー！！いきなりあんな大技出して来たバカ野郎はど

「行ったー！」

そして技を粉碎する為にやむ得なく技を出した黒髪頭に黒い着物を着た青年、ヤスムネは愛用の黒刀を振り回しながら天井から降ってきた瓦礫の横から出てきた。

『…………奥に行つたっぽいね』

「あの野郎！」

ヤスムネが追い駆けようとした瞬間だった。

「あ、がッ!？」

ヤスムネはグラッ、とふらついたと思つた次の瞬間、グシャアと吐血する。

ネイビーから背を向けているようでまだ知られていないが、ヤスムネは知らないように上手い具合に隠す。

「フ、ファーストエイド……………」

ヤスムネは小さく治療術を発動させ、吐血を止める。

『…………?…………ヤスムネ?』

ネイビーは止まっているヤスムネを不思議がりながら近付く、ヤスムネは手に付着した血を床に擦り付けながら消してネイビーと向き合う。

「多分、さっきのがルートだ」

『……ッ!?……………やっぱり、あの技は、ルートの』

ヤスムネの言葉にネイビーはすぐに予想していた事が当てられた。

「今は事情なんかで偽名シラヌイで名乗ってるけどな」

ヤスムネはネイビーと向き合うように座る。さっきのぶつかりで魔物たちも怖がっているのか周りには居ない。

ネイビーは考えるようにまた懷から単語帳のような物を取り出す。

『この屋敷に入る前にこの紙幣を入口に貼っておいた』

そう言つてネイビーは千切つた単語帳の紙幣をヤスムネに渡す、ヤスムネは不思議そうにしながら紙幣を受け取る。すると紙幣の中枢に魔法陣のような印が浮き上がり、その印が紫色に光ると真っ白だった紙幣が透明になり、ヤスムネの耳に声が聞こえる。

《何度見ても、おっきな屋敷だね。評議会のお役人つてそんなに偉いの?》

《評議会は皇帝を政治面で補佐する機関であり、貴族の有力者により構成されている、です》

《言わば、皇帝の代理人つてわけね》

《へえ、そうなんだ》

《どうやって入るの?》

《裏口はどうです?》

小さな男の子の声と少女たちの声が聞こえてきた、しかも聞き覚えがある。

「・・・なにこれ、どーしたの?」

『・・・シツ!・・・今エンジェルボイスを堪能試験中』

今のネイビーのヒントで大体分かったのだがヤスムネはまた特殊な透明紙幣に耳を傾けると、

《・・・っ!?》

《こんな所で叫んだら見つかったちゃうよ、お嬢さん》

《えっと、失礼ですが、どちら様です?》

《なぐに、そっちのかっこいい兄ちゃんとおちよとした仲なのよ。な?》

(ん・・・このおっさん声、何処かで)

ヤスムネが懐かしむようにこの声の主を黙索していると、

《いや、違うから、ほっとけ》

「おオオツ！ これユーリじゃあん！！？」

『ウワゝオ、一発で分かってんじゃん』

ヤスムネは透明な紙幣を掲げながら大声を上げる。

「おいバカセ！ いつの間にこんな仕掛けをしてやった」

『ヤスムネが何も考え無いで進んで行く前に仕掛けました』

「正直に答えたのに何故かバカにされてる気がする！ つーか何でユーリたちもこの屋敷に！」

『ああ、そう言えばヤスムネに話してなかったね、リタ達のこと』

ネイビーがユーリたちがリブガ口の角を取りに行った事や、行く理由をヤスムネに話した。ヤスムネは話を聞くと暗い顔になりながら、よっこら、と年寄りが言いそうな言葉を呟きながら腰を上げた。

「ならユーリが侵入して来そうだな」

『どうしてさ？』

ネイビーが訊ねるとヤスムネは小首を傾げて、

「男の感だ」

『気持ち悪いこの上無いね』

ネイビーに殴り掛かろうとするヤスムネだったが、すぐに次の行動に移す。

「とーにかく、早く行った方が得策では？」

ヤスムネはカツン、と鞘に収めた長太刀を床に小突きながら言う。
ネイビーも周りに魔物が近寄っているのを微々たる魔力で感知する。

『そうだね、丁度リタたちもラゴウ邸の地下に入って来たし・・・』

「ウソ？」

『ホントだよ、早く行こう』

そう言っただけで単語帳を懐に戻し、白衣を翻しながら奥の部屋に歩いて行った。

「憂慮極まり無いよな」

ヤスムネも長太刀を杖にしてネイビーの後を追った。

(・・・強くなつてたな、あの二人は)

侵入者であるヤスムネとネイビーを消そうとやって来た、ラゴウに雇われた傭兵のシラヌイはフードを深く被りながらそう思う。

背はヤスムネより大きくネイビーより小さい、腰には双剣を交差するように収めている。歩く度に剣と剣が揺れ、鈍りの音が鳴るがシラヌイはその音で自分の心を磨がす。

シラヌイはそのまま歩いて行くと、目の前にオレンジ色の短髪に左肩から手まで装備している白い軽甲冑、そして下半身は黒い短パンツに太股から膝までまた白い軽甲冑を装備している少女が居た。

「さっきの爆発、って言うかさっきの地震ってもしかしたらもしかすると・・・」

テクテクとシラヌイは無視して横を通り過ぎようとするが、

「ちょっとオーツ！ 悲しいじゃないのよ！ 無視しないでっ！」

「むがー！ 引っ付くなフタバ！」

シラヌイの腰にまわり付くフタバと呼ばれた少女。その少女の腰にはシラヌイと同じ『双剣』が収められていた。

ジタバタと暴れるフタバの頭を掴んで離させようとするシラヌイ、だがこの少女に確か頼み事をしていた事を思い出すシラヌイ。

「護衛対象はどうした？」

シラヌイが言う護衛対象と言うと一人しか居ない。

「ああ、あのラゴウとか言うお爺さんならアタシと一緒に降りて来たよう」

バタバタと暴れていたフタバだったが、シラヌイの質問に答えながら離れる。シラヌイはずれたフードを被り直して、

「すぐにお守り^もに行こうか、面倒事になりそうだ」

「つか、アタシはシラヌイが居ない！　ってうるさく吠えてるお爺さんからの命令で探してたんだよ」

そう言ってシラヌイを引き連れて、フタバは護衛対象であるラゴウの場所にシラヌイを連れて行った。

薄暗い地下、そこからどうやって上に出れるのかずっと探し歩く黒衣の男と白衣の男。

「ぶっちゃげてまだなのこの地下！？　まだ地上に出る道無いの！？」

『はたまた範囲が広い場所だねえ、あ、丁度良い魔物の胴骨だ、椅子にしちやお』

うがぁ！ と頭をガシガシしながら叫ぶヤスムネと対照的に疲れたから休むネイビー。

「あ、あれだ、もうネイビーの魔術で一氣にドカンッ！ とね」

『そんなん下手してラゴウさん死なれたら困る、評議会の老人死んだら死刑モンだよ、極刑モンだよ、やだよ』

そう言つてネイビーの近くに座るヤスムネ、はつきり言つてこれは二人だから大丈夫なのだが、常にこの地下は魔物や死骸の匂いで尋常じゃ無く臭い。

ネイビーはガスマスクをしているからまだマシでも、ヤスムネは辛い筈なのだが、

「……しりとりでもやるか？」

こんな感じである、ネイビーも『やらない』と素っ気なく返すとヤスムネも悲しそうに周りを見る。

恐らく魔物が食い散らかした腐敗した人肉、人骨。その光景に脳裏に浮かぶは十年前の映像。

ヤスムネは振り払うように頭を振るうとすぐに立ち上がり地上に繋がる出口を探し始める

そんなヤスムネを横でネイビーはズバツといきなり元氣良く立ち上がる。

そんな元氣良く立ち上がったネイビーにヤスムネは芳しく無い表情になりながら、

「畜生！　こんなネイビーを見ると余計な事になる予感しか思いつかない！」

『我が愛しの天使キターー！』
エンジェル

「ほらキタよッ！！」

ズバアアア、と走り出すネイビーに掴まりながらヤスマネはネイビーに聞く。

「一応分かってるけど聞きます・・・どうしたッ！」

『リタの魔力を感知したのさあ、ハハーハー』
♪

「チキショー言わずもがなッ！」

そして走っていると声が聞こえる部屋の廊下に出る。

『ムムム！　リタの魔力反応はこっちだ！』

「オイ博士！　あんた今ストーカーみたいな事してるの分かるか！」

『違う！　これは妹が居ないとこの世が終わりみたいな感じの症状に襲われる類いだ！』

「知ってる！　それシスターコンプレックス！」

そんな二人のやり取りをしていると、ネイビーが力強く声が聞こえるドアを開く。

目の前に飛んできたのはネイビーの愛する妹^{リタ}では無く。

「死ねええええええ！」

ファイアボール
火炎球^だった。

「うぎゃあああああああああああああああッ
ッ！！？」

『おおおおおっ おおおおおおっ おおおおおおっ
！！！！』

一人は顔面に火炎球が直にぶつかり焼ける激痛を抑えながら転がり
回り、特殊な防護術式を施した白衣なのか、服に発火せずにリタの
火炎球を受け流したネイビー！

「いやふざけんなよテメエ！？ 何でお前だけそんな高性能な術式
施してんの！？」

『ククク、我が妹の魔術も日々成長しておるわ、良きかな良きかな
！』

「おーし、すぐそこに座れシスコン博士、今すぐテメエの頭力チ割
つてやんよ」

両手を広げて喜んでいるネイビーに本気で頭を力チ割ろうとするヤ
スムネの二人組を奇怪な眼差しで見るユーリ一行が居た。

「何してんだアンタら？」

ユーリの言葉にヤスムネはネイビーの鳩尾に拳一発殴らせて向き直る。

「俺はちよつと野暮用でね、つて言うか痛い、痛いなあ、ネイビーの鳩尾にパンチしたら鉄みたいに固かったんだけど、そんなに綱のよーな筋肉体質になっちゃったのかなネイビー博士？」

『え、だって絶対に殴るな、と思ったから鳩尾に鉄板入れといたよ、僕グッジョブ』

「殺す」

また喧嘩が始まる中、ユーリは二人をほつといて地下で独り泣いていた子供、ポリーに向き直ると、

「ポリー、男だろ、めそめそすんな。すぐに父ちゃんと母ちゃんに会わせてやる」

ユーリは小さくなって泣いていたポリーにそう言つとポリーも男の子らしく「・・・うん」と返事をする。

その小さな男の子を見てヤスムネは次々とネイビーに先読みされて塞がれてる中、諦め、カロールに話を聞く。

「僕らはどうやって屋敷に入ろうか迷つてたら胡散臭いおじさんに会つて、そのおじさんがなんとかしてくれるって話になったんだけど、逆に利用されちゃって・・・」

「だからリタちゃんはあるに不機嫌そうな顔になってんだ」

そう言つてカロルとヤスムネはネイビーの特殊な術式を施した白衣について質問攻めしているリタに目を向けてた。

（“レイヴン”・・・レイヴン・鴉ね）

そんな風にヤスムネが思いユーリたちと歩いて行くと、巨大な鉄格子が張られた部屋にたどり着くと、格子の先に初老の男と、先程ヤスムネと衝突会つた傭兵と、ヤスムネが良く知る顔、フタバが居た。

「はて、これはどうしたことが、おいしい餌が、増えてますね」

「・・・・・・」

「ふん・・・」

初老の男は愉快そうに微笑みながらそう言つ、シラヌイは無言で、フタバはつまらなそうに鼻を鳴らす。

「あんたがラゴウさん？ 随分と胸糞悪い趣味をお持ちじゃねえか」

ユーリが侮蔑の含んだ眼差しでラゴウを見る、だがラゴウはその眼差しも上回る腐った眼でユーリたちを見る。

「趣味？ ああ、地下室のことですか。これは私のような高雅な者にしか理解できない楽しみなのですよ。評議会の小心な老人共ときたら退屈な駆け引きばかりで、私を楽しませてくれませんかね。」

その退屈を平民で紛らわすのは私のような選ばれた人間の特権というものでしょう?」

エステルは信じられないような事を聞いたように顔を蒼白する。

「まさか、ただそれだけの理由でこんなことを……?」

そんなエステルを他所にラゴウはまた楽しく笑いながら言う。

「さて、リブガロを連れ帰ってくるとしますか。これだけ獲物が増えたなら、面白い見世物になります。ま、それまで生きてれば、ですが」

クク、とラゴウが笑うとユーリが手をひらひらさせながら悠長に呟く。

「リブガロなら探しても無駄だぜ、オレらがやっちまったから」

「……なんですって?」

「聞こえなかったか? オレらが倒したって、言ったんだよ」

「くっ……. なんていうことを……!」

狼狽^{うろた}えるラゴウ、ヤスムネは不思議そうに見ながら思った。

(ユーリがカマ掛けてるかもしれないーのに信じんのかあの爺ちゃん、つかルートの奴も気付いてんじゃ……)

ヤスムネがそう思っているとラゴウが近くに居た傭兵シラヌイに叱

咤する。

「シラヌイツ！　すぐに傭兵共をリブガロが生存しているか確認して来なさい！」

そんなラゴウにシラヌイは静かに報告する。

「リブガロは生きてます」

「ほ、本当なのですか！」

ラゴウは焦っていた事を恥じているのか汗を拭いながらまた平然とした表情に戻そうとしたが、

「生きてはいます、が、リブガロはその奴らに負け、角を取られ、逃走しました」

シラヌイの無情の声に今度はラゴウが蒼白な顔になった。恐らくその魔物を捕まえるのに多額なお金を使ったのかもしれない。
リブガロ

そんなラゴウにユーリは追い討ちを掛けるように言う。

「飼ってるなら分かるように鈴でもつけときゃ良かったんだ」

だがラゴウは開き直るように手を後ろに回す。

「ま、まあ、良いでしょう。金さえ積みめばすぐに手に入ります」

そんな腐った言動に耐えきれなかったようにエステルはユーリの前に出てラゴウに大声を上げる。

「ラゴウ！ それでもあなたは帝国に仕える人間ですか！」

そしてラゴウもエステルを目にした途端にまるでお化けでも見たかのように目を見開く。

「むむっ……あなたは……まさか？」

そしてその瞬間だった。

ユーリは刀を鞘から抜刀し、青い衝撃破“蒼破刃”で格子ごとラゴウを吹き飛ばそうとした。だが、その事を予知していたかの如く、傭兵であるシラヌイも双剣の片剣へんけんを抜きラゴウを守るように鉄格子を“焼き斬った”。

ラゴウは腰を抜き、シラヌイの背に隠れるようにしながらユーリに叫ぶ。

「き、貴様！ な、何をするのですか！ シラヌイ！ すぐにこの者たちを捕らえなさい！」

そう言い残してフタバを連れラゴウは逃げて行った。

静寂。

シラヌイの前にユーリやエステル、勿論リタやカロール、ラピードは只ならぬ強さをこの傭兵から肌で、感覚でピリピリと感じ取ってい

た。だがいつまでもそんな事をしている訳も無く、ユーリが先頭に立ってシラヌイにもものも押す。

「オイ、あんたもオレらと闘^やり合うのか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ただ無言に、シラヌイは赤いフードを被り直し、そして“疾駆”する。

（速いッ！？）

ユーリも僅かな反応で迫り来るシラヌイの凶刃を愛刀の「ニバンボシ」で弾く。

だが迫って居たのは凶刃だては無く片手に炎が纏っているのにユーリは遅れて気付く。

「烈破掌・焰」

「——ッ！？」

ユーリの懐に入った片手には炎の球体が存在した、と認識した途端にその炎の球体が『炸裂』し、ユーリはその炎の炸裂に僅かに身を後方に下がらせ衝撃を和らごうとする、だがシラヌイはそれを知っていたかのようにグイッとその炸裂した炎を押し込んだ。

ユーリは焼ける激痛を抑えながら転がる。

この出来事がさっきの『瞬間』に起きたのだ。

「なっ！ ユーリ!?」

「うわああ！ 何この人、強いよ！」

ユーリが吹き飛ばされた事に驚いたエステルとカロルの二人。
だがリタはすぐに魔術の詠唱に入り追撃を成す。

「あどけなき水のたわむれ、シャンパーニュ！」

炎を消すようにシラヌイの足下から無数の水滴を弾けさせて攻撃する。

シラヌイは避けようとするが、何かに思いとどまったように動きが止まり、シャンパーニュを喰う。

そしてヤスムネは鞘に収めたままの長太刀で、

「一回話そーぜ！ 雷^{らいさいてん}砕点ッ！」

鞘のままで鋒をコツンとシラヌイにぶつけると、ぶつけられた集点に雷が放電し、そしてバチバチッ！ と雷^{なじ}が詰る音が響く。

『ヤスムネ、任せるよ?』

「行つてらー」

吹き飛ばしたシラヌイに目線を合わせたままネイビーに返答する。
ネイビーに言われユーリやエステルたちもすぐにラゴウの後を追った。

そして鉄格子がある部屋にはシラヌイとヤスムネ、二人だけが残る。シラヌイはジリジリとヤスムネと距離を離して相変わらず片剣だけで構えている。

「さっきの技」

そこでヤスムネが呟く。

「ユーリぶつ飛ばした技じゃねーよ、俺の《悪斬雷王刀》アクキリイカツチノオウタチとぶつけた技……あの技は『双剣』に意識を集中させて初めて出来る技だって、昔お前から聞いたんだけど、片方の剣だけであんな大技出来るよーになったのか？ ルート」

誰も居なくなったことで偽名シラヌイで無く真名ルートで呼ぶヤスムネ、シラヌイは何も答えず構えている。ヤスムネはまだ鞘から刀を抜かずに話をする。

「それに、さっきリタちゃんリタが放った魔術シャーパーニユ、避けれた筈なのに避けなかったのはわざと……だろ」

ヤスムネがそこまで言うのとシラヌイはやっと構えを解いて、口を開く。

「オレが傭兵こんなになってんのは、ヤスムネも知ってるだろ」

「……ルートがあへの反吐野郎ノドの護衛してるって話は聞かなかった」

「話せる筈が無い、話せる機会も無いよ」

そしてルートは、いやシラヌイは口を閉じる。それがどんな意味なのかヤスムネにも分かった。

「クソ面倒くせえ人生だな、オイ」

ヤスムネは鞘から長太刀を抜き取る。

そしてシラヌイはもう片方の剣を抜き、正真正銘の『双剣士』となる。

「行くぞ、雷神ヤロー」

「最悪だ、炎嵐ヤロー」

シラヌイは腕輪型の武醒魔導器ボーディプラスティアから双剣に、そして双剣から巻き上げる魔術で作り出した炎を操り、その炎の気流を操り渦を巻く。

ヤスムネは何処かにある武醒魔導器ボーディプラスティアで黒い長太刀に雷を帯電し、開くように横に構える。

そしてまた衝突する。

ネイビーはユーリたちと離れ、一人だけ先に奥へ奥へと突き進む。

『早く、あの魔導器プラスティアを何とかしないとイケない……これは僕

がやった愚行。その愚行を自ら掃除する』

白衣をヒラヒラとさせながら歩いて行くと、ネイビーはひときわ大きな広間に出たネイビー。

その広間の中央には巨大な魔導器が鎮座している。

『アレだ!』

ネイビーはガスマスク越しに見える巨大な魔導器から掲出される魔力の数値、そしてそこから割り出されるこの悪天候の動きを逆算していく。

ネイビーが魔導器を調べようとすると、大きな揺れが下から伝わり、足取りを悪くさせる。

『ルートとヤスムネが戦ってるのかな』

そんな事を言っていると、後からやって来たユーリが広間に着く。

「おいアンタ、オレらより早く行ったんじゃないのかよ?」

ユーリやエステルたちが広間に入ってきた、リタはネイビーに目もくれず先に巨大な魔導器の操作盤の前まで走り、すぐに魔導器を調べる。

「あ、そう言えばアスピオの市長は自分が住んでる都市でも絶対に迷う方向音痴の人だって、ナ……『魔狩りの剣』の人が言った!」

『失礼な情報だなそれは！』

ネイビーはプンプンとガスマスク越しに怒りを表して怒っていたが、リタがブツブツと呟きながら巨大な魔導器を調べているのに気付कि、ネイビーも近寄る。

ネイビーが近付いたのに気付いたリタは自然と口が開き、ネイビーに愚痴を言うように吐き捨てる。

「複数の魔導器をツギハギにして組み合わせている……」
ブラスティア

『……ストリムにレイトス、ロクラーにフレック……確かに多数の魔導器を組み合わせてる。この術式なら大気に干渉して天候を操れるけど……』

「こんな無茶な使い方してるのは酷いわよ！ くっ、エフミドの丘といいあたしよりも進んでるくせに、魔導器に愛情の欠片もないわ！」

ネイビーも操作するリタの操作盤に目をしながら返事をする、そして同時にネイビーの頭の中には軽い疑問が浮かんでいた。

（この技術は確かに僕が流したモノもある、だけど“こんな酷い”組み合わせは見た事無い。僕の技術と、何かを組み合わせた事でより効率良く、より行進的に倍増させたのか？）

そんな風にネイビーが思っていると、何か騒ぎを起こさないといけないのか、カロールは武器を取り出して柱を叩き込む。

ズシンズシンッ！ と調べているリタを邪魔するように叩きまくるカロール。

ネイビーは妹の気性が分かるので頭に手を回して体勢を低くする。
そしてネイビーの思った通りにリタは若干苛立ち混じりに、

「ああ、もう！」

ファイアボールを広間の上方に放つ。

そしてファイアボールが翻すようにキュインツと曲がりカロルの一歩手前に着弾する。

「うわあっ！ いきなり何すんだよっ！」

君もいきなり柱をドツきまくるのはどうか思うぞ、とネイビーが相変わらず抱腹前進しながらリタの背後に回ろうとする。

「こんくらいしてやないと、騎士団が来にくいでしょっ！」

『流石はリタ！ そこまで思考思索してたなんて天才だね！』

「バカ兄貴も早く何かしろっての！」

ドスツとネイビーの脇腹を殴りながらもリタはファイアボールを連発をしまくる。

そして下に居るユーリたち。エステルが心配そうにしながらリタに言う。

「でも、これはちょっと……」

そしてネイビーはユーリたちと離れて行動した為にいつの間にか一人追加されている少女に驚く。

「なに、悪人にお灸を据えるにはちょうど良いくらいなのじゃ」

ファイアボールが炸裂して、屋敷が軽く揺れる。ネイビーが屋敷が崩れないか心配になりながら魔導器をいじっている。

「人の屋敷でなんたる暴挙です！」

恐らく地上に繋がっている場所にある扉からラゴウと数人の傭兵を引き連れていた。

「お前たち、報酬に見合った働きをしてもらいますよ。あの者たちを捕らえなさい。ただし、くれぐれもあの女を殺してはなりません！」

そうラゴウが告げると、傭兵たちは次々にユーリたちに襲い掛かる。

そしてネイビーにも当たり前に傭兵が襲う。

「おらあ、死ね！」

『死なない！』

そう言つてネイビーは迷わず敵に背を向けて逃げる。

傭兵も奇妙なガスマスクを被っている男が逃げた事に少し驚いたが、すぐに追い討ちを掛けようとするが、銀色い閃光がネイビーの横を過ぎると、傭兵は「ぐへっ!？」と呻き声^{うめ}を上げながら倒れる。

ネイビーは振り返ると、そこにはルートと一緒にラゴウを護衛していたオレンジ色の短髪双剣士少女のフタバだった。

フタバは刃が捻り曲がった剣と波線のように傷口を酷く開かせるように造られた剣の双剣を綺麗に携えながらネイビーと向き合う。

「やつほネイビーさん♪」

『おお！ フタバちゃんじゃないか』

フタバは双方共違う剣を掲げて、右手に掴んだ剣を後方上に構え、左手に掴んだ剣で前方下に構える。

この意味にネイビーは嫌な感覚に襲われる。

『右剣に“ハルパー”、左剣に“ファイターサーベル”。どれもルートが昔愛用してた剣だね、普通双剣なら双方同剣だと思うんだけど、二つバラバラになる事でその剣の性質を巧く引き出すのが『双剣士』、なのかな？ 勝手に僕が思ったことだけど』

ネイビーがそんな風に言いながら、僅かに距離を離そうとするが、フタバはすぐに斬り掛かった。

「魔神剣・双牙！」

二つの斬撃がネイビー目掛けて放たれる。

『ぐむっ！』

ネイビーは身体を捻^{ひね}らせてフタバの斬撃を避ける、だがフタバもそんな隙を与えない。

「秋沙雨！」

無数もの突きを双剣で攻撃するフタバ。

『我が身を守れ、バリアー！』

ネイビーは掌を前方に構えると、薄い魔力で作った障壁^{バリアー}でフタバの秋沙雨を防ぐ。

「ああ！ このおー！」

フタバも塞がれた事に悔しいのか、すぐに身を翻して構え直すと、

「そんなバリアーぶっ壊す！ 驟雨^{しゅうまじんけん}魔神剣ッ！」

『ぐつつ！？』

隙無き無数の突きを繰り出したと思った瞬間に追撃の魔神剣。

ネイビーもこの技には流石に怯む。

「まさか、こいつらって『紅の絆傭兵団^{ブラッドアライアンス}』？」

横からカロルが襲ってくる傭兵たちと戦いながら気付いた事を口走る。

（『紅の絆傭兵団^{ブラッドアライアンス}』・・・）

聞き覚えのある名にネイビーが思索していると、フタバが容赦無くネイビーに斬り掛かる。

『流石ルートの弟子、真っ直ぐに突っ込んで来るね、面白い程に！』

そしてネイビーも懷から取り出した単語帳から千切った紙幣をピンツ、と指で弾き、フタバの目前に飛ばす。

『ソードシヨック・・・』

「——ッ！？」

パン！ 紙幣が小さく炸裂するとフタバはガクンツと体勢を崩し、その場に倒れ込む。

「うおっ、どうしたんだコイツ」

そして先に傭兵たちを倒したユーリがネイビーに加勢しようとしたが、急に倒れたフタバに驚く。

『ソードシヨック、僕が編み出した魔術だよ。目に見えない剣が無数に突き刺さる激痛を脳に直接送り込む事で相手を“外見的ダメージ”を与えないで気絶させられる魔術。まあ、今は昏倒させたけどね』

サラリとえげつない事を言い放つネイビーにユーリは一瞬恐れを抱く。

そしてまだ暴れ足りないのかファイアボールをまだ連発するリタに気付き、すぐに止めさせる。

「十分だ、退くぞ！」

「何言つてんの、まだ暴れ足りないわよ！」

「早く逃げねえとフレンとご対面だ。そういう間抜けは勘弁だぜ」

カロルたちも傭兵たちを蹴散らしたのか、ユーリたちは集まる。

「まさか、こんな早く来れるわけ……」

そう言いながらファイアボールを放つリタ、するとリタが放ったファイアボールが扉の上にぶつかり視線が自然と扉に向く、するとそこには黄色い髪に真面目そうな騎士と女性騎士、そしてリング頭のような魔導士が立っていた。

「執政官、何事かは存じませんが、事態の対処に協力致します」

そしてその騎士を見た瞬間に自然とエステルは口を開く。

「フレン!？」

「ほらみる」

ユーリは言った通りだろ、といった感じに顔をリタに向けると案の定リタもバツの悪そうな顔になる。

そしてフレンたちが来た事を忌々そうにラゴウはメガネを直しながら言葉を吐く。

「ちっ、仕事熱心な騎士ですね……」

そしてその時、パアリン！ と窓を破って竜に乗った人間が入って

くる。

ラゴウやカロル、その場に居た皆が突然の来訪者に驚く。

「うわぁ・・・！ あ、あれって、竜使い！？」

そしてその竜使いにフレンたちが応戦するが、竜使いは彼らを避けて巨大な魔導器に向けて槍を構える。

『嫌な、予感だ』

「な、まさか！」

そしてネイビーが一番に反応し、すぐにリタも嫌な光景を浮かべる。そしてリタが思った事は的中し、竜使いは黒長い槍で魔導器を斬り撫でた。

「ちょっと！！ 何してくれてんのよ！ 魔導器を壊すなんて！」

「本当に、人が魔物に乗ってる・・・。」

そして飛んで居る竜使いにリタは怒り心頭に、

「待て！ こら！」

すぐにファイアボールを竜使い目掛けて放つ、そしてリタに習いウィチルもファイアボールで応戦する。

だがリタやウィチルのファイアボールに掠りもしないで竜使いは避け流す、そして魔導器を破壊したかちゃんと確認すると、竜は炎を吐き出し、フレンたちの足を止める。

「くっ、これでは！」

フレンは追う事が出来ないのを悔しがるように竜使いの背を見る。

「船の用意を！」

そして逃げる事を一番に考えているラグウは腰を抜かしたまま傭兵たちにそう告げる。

そして逃げるラグウを追う為にユーリはすぐに後を追った。

だがネイビーは先に行くようにユーリたちを促し、水の魔術を用いて炎を消す。

『いやあ、大変でしたね。フレンくん』

そして炎を一瞬にして消した人物にフレンやソディア、そしてウィチルが一番に驚いていた。

「貴方は、コン・ネイビー博士！」

「な、変人では無かったのですか！？」

フレンはフタバを抱っこしながら歩いて来るガスマスクに白衣を着込んだ男性に敬礼をする。

ソディアはフレンが言った言葉が本当なら失礼至極だと思いすぐにネイビーに頭を下げ謝ろうとしたが、

「や、やっぱりネイビー博士だったんだ〜」

ウィチルはかなり嫌そうな、もとい苦手そうな顔でネイビーと向き合った。

「それで何故ネイビー博士がこのような場所に？」

『うん、ちょっとこの巨大な魔導器に用があつてね。それよりフレンくん、すぐに君たちは船を用意してユーリくんたちを追った方が得策では？』

そしてネイビーの言葉でやつと思ひ出したのか、すぐにソディアやウィチルに指示を出して船の手配を進めた。

「博士、その子の治療は如何致しましょうか？ 街に行けば騎士団の治癒術師が降りますが」

そして指示を飛ばしたフレンはネイビーが抱えていたオレンジ色の短髪双剣士少女のフタバを見てそう言うと言いつつネイビーは『大丈夫』と答える。

そしてネイビーはフレンと一緒に港に向かう、するとそこには。

「ねー、ちょっと、ねーってば」

「ええいウルサイ！ 貴様は黙っている！」

縄でぐるぐる巻きに縛られたヤスムネの姿があつた。

そして何かをされたのか、ソディアは少し涙目になりながらヤスムネを蹴っていた。フレンに目が入ったソディアはすぐに開き直り、報告をする。

『ちよつと、ちよつと、ヤスムネはルートとかつこ良く地下で戦つてたんじゃないの？』

「アイツ途中で逃げてよ、地下室の奥の奥まで進んだら港に繋がってた穴があつて、その穴から出たら海にボチャツと入っちゃって、もーテンパっちゃてテンパっちゃて、バタバタと溺れてたら騎士団の人たちが船の準備をしているじゃありませんか！ 俺はすぐに騎士団の人たちに助け呼んで、駆け付けてくれた騎士に手を差し出したのよ……そしてたらピンポイントに、その……助けてくれたのが、あのソディアとか言う娘で、ピンポイントに、その……」

『え、何？ 胸でも触っちゃったの』

「えっ！ 見てたのか！？」

『うわあ、当たっちゃった』

とてもアホな理由で捕まったヤスムネを他所にネイビーは抱えていたフタバを港にあった椅子に横にさせ、そしてフタバの目前で指をパキンツと鳴らすと。

「……がはっ、ゴホッゴホッ、ゴホッ」

フタバはすぐに目を開き、息を整えて、落ち着かせる。そしてフタバはガスマスクを株っている変人博士に一言。

「こるス気か！」

『色々と混乱しているようだねー、言えて無いよフタバちゃん。殺す気が、って言いたかったのかな？』

ネイビーが怒り心頭にしているフタバを軽くあしらえていると、フ

レンとウィチルがネイビーの近くまで来る。

「準備が整いました、ネイビー博士も我々と向かいますか？」

「博士は忙しいのでご無理をなされなくても良いのですよ？（来なくて結構です、僕の立場が危うくなります、つーか来るな）」

フレンが純粹にそう聞き、ウィチルはかなりのにこやかに喋っているが裏ありまくりの言葉にネイビーは買った。

『良いでしょーッ！ この僕のアイデンティティ魔導器専門的知識を生かしてください！』

その言葉にウィチルは酷く衝撃を受け、そしてガスマスクで表情が見えないネイビーの素顔にビクビクしながらウィチルは敬礼をする、フレンもすぐにでも行けるようにネイビーを促す。

そんなネイビーを横目にフタバはどうするかフレンが聞いてみると、かなり猫被ったキャラに変化して『ネイビーの護衛人』として一緒に騎士団の船に乗り込むことになったフタバ。

恐らく無料ただで船に乗ってカプワ・トリムに向かおうと考えているのだろう。

そして肝心のヤスムネはというとフレンの命令で連れて行く事になり、ソディアが責任持って連れて行く事を命じられ、ぐるぐるに何重に縛ったヤスムネを引き摺りながら船の中へと入って行く。

ヤスムネを頭からでは無く、足にまず縄を縛り、持ちやすいように
するとするとズルズルと引き摺りながら船に上がって行く、船に上
がるのに階段があったのだがソディアはただただ無言でヤスムネを
引き摺りながら登って行く。

ガクンッ！ ガツンッ！

ドカツ！ バガンッ！

「痛えええええ！ ちょ、マジで足から引き摺るの止め、止めて、
や、うぎゃああああああ、頭がハゲるうー！ー！」

引き摺り方で分かるがかなり怒っていたソディア、後でフレンが宥
めたのはネイビーとフタバの目撃で分かった。

そしてヤスムネは船の上で邪魔モノ扱いされて、辺りを転がってい
たのを騎士たちの証言ですぐに分かったのだった。

騎士の証言1

『正直邪魔だった』

騎士の証言2

『死体かと思った』

騎士の証言3

『余りにも邪魔過ぎたから海に捨てようと一瞬思ったが、海にゴミ
を捨ててはいけないと親に言われたのを久々に思い出し、本当に思

いとどまりながら捨てるのを止めた』

狡猾の執政官と炎嵐の傭兵（ルート）（後書き）

スキット

《竜使いについて》

カロル

「まさかラゴウの屋敷で竜使いに会うなんて考えてもいなかったよ」

ネイビー

『予想の外だね』

ユーリ

「竜、だっけ？ あんな魔物見るのも初めてだったな」

エステル

「はい。なんだか他の魔物とは全然雰囲気違っていました。あのあと、どこに飛んでいったんでしょう？」

リタ

「あゝ、もう！ あたしの前で、バカドラの話しないで。思い出しただけでも腹が立つてくる！」

カロル

「思ったんだけど、バカドラってどういう意味？」

ネイビー

『“バカ”な“ドラ”ゴン、じゃないのかな？』

ユーリ・カロル

「「ああ」」

エステル

「さすがリタのお兄様です」

ネイビー

『いやあ、何のこれ』』

リタ

「うっさい！」

スキット

《シラヌイについて》

カロル

「あのシラヌイと言った傭兵、凄かった・・・」

エステル

「はい。剣の筋といい、隙の無い動きといい、只者ではないです」

リタ

「なんたってユーリが吹っ飛ばされたしね」

ユーリ

「へっ、あんなに油断しただけで後はどうにでもなったぜ……………
、多分な」

リタ

「ま、確かに速い、いや、速過ぎよね」

ユーリ

「簡単に懐に入られちゃった、あんな強い傭兵雇うとは、ラゴウの目は節穴じゃねえってことか？」

エステル

「でもリタの魔術を受けましたが……」

リタ

「……引かかる攻撃の受け方だったけどねえ」

カロル

「でもヤスムネが引き止めてくれたお陰でラゴウを追うことが出来たよね！」

エステル

「ヤスムネさん、あの傭兵さんと顔見知りのような口振りでした」

リタ

「何気にバカ兄貴も挙動不審だったけど……」

ユーリ

「何にしろ、あの傭兵とヤスムネたちに何かしら関係がありそうだな」

港の街カプワ・トリム（前書き）

《戦争》に参加した人は少なからず苦しみを持って生きていつていてると思います。

仲間が目の前で殺される。

助けられなかった。

そして精神的な障害。

ちよつとしたネイビー博士の話

港の街カプワ・トリム

ごろごろー

「もっと早く行けないのか！」

ごろごろー

「申し訳ございません、ですがこれが最高速度です」

ごろごろー

「セロスプラスチック駆動魔導器の起動はどうした」

「は、はっ。その駆動魔導器にネイビー博士が何か細工をしているらしく今は手を出せない状態です」

「……博士は何をしているんだ」

ごろごろー

どすっ！

「ウザい」

「おがっー!!」

さつきからごろごろと船の上を転がっていた縄を何重にも縛られたヤスムネは作業している騎士たちから邪魔そうな目で見られていたのを気付いたのか、ラゴウ執政官の護衛をしていた傭兵少女のフタバは溜め息を吐きながら、どすつとヤスムネに座る。

「そー思っただったら縄解いてくれよ。ちょっと痒い^{かゆ}トコあんのに搔けなくて苦しんでんの！」

搔けない所があると確かに嫌だなあ、とフタバが少しだけ同情する。だが手を貸すなんてこれっぽちも思ってないフタバはずっとヤスムネの背に乗ったままだった。

そしてヤスムネとフタバがそんな風になっているとふとフタバが何気無く、きつと感覚的に聞いてしまったのだろう。

「ね、ねえ……キユウや、スフィ……ハイファとか元気にしてた？」

「?……それはそっちの方が詳しいんじゃないかなかったっけ」

「へ……」

ヤスムネはフタバの質問に嫌な顔せず普通に返した。そして同時にフタバはヤスムネの返答に驚いて変な声を出す。

「あ、……え、うん、そうだった。うん、この間会ったんだっけ」

「因みにハイファは髪長くしてツインテールにしてたぞ」

「えっ、嘘ッ!?……ってそうだったわねえ」

「、ヘイファは髪型をツインテールにしてたんだったわねえ、アハハハ！」

微笑ましくヤスムネは嘘をつくヘイファを見てみると、ツカツカと近寄ってくる相手を見てヤスムネは警戒もとい臆病^{おくびょう}る。

「……貴様の縄をほどくように命令された」

フレンの部下であるソディアはヤスムネを虫を見るような目でそう言ってきた。

そのソディアの眼光にヤスムネは視線をずらして話し掛ける。

「そそそそれじゃあ、なな縄をほどいてもらおうかなー。アハハ」

ギロリ、とまた睨み付けるソディア。ヤスムネは当然のように黙り込む。そんな女相手にとことんヘタレ&弱腰のヤスムネを溜め息を吐きながら見つめる元仲間^{ギルド}のフタバ。

ザックザック、と剣で縄を切っていくソディアにヤスムネは『ひいいい！！ もうちよつと優し・・・ひぎゃあああーッ！！？』とビクビクして縄をほどく、もとい切られ自由になるヤスムネはゼエゼエと息を吸い込みながら整えていた。

「結構怒ってたねえ、何をしたんだか・・・」

「……手が狂っただけだ」

ヤスムネはそう言って黒い眼鏡をかけ直しフタバは残念そうな眼差しでヤスムネを見ていると、周りの騎士たちが騒ぎ出してきた。

「どうした！ 船を発見したか！」

そしてフレンも出てくると騎士たちが乗っている船の前方に沈んでいく船を発見した。

そして同時にエステルやリタ達も無事に脱出しているのを確認する。フレンは外側によりユーリたちの確認を取る。

「エステリーゼ様にモルディオ魔導士、そしてギルドの少年にユーリ……」

フレンはもっとはっきりするように近くまで船を近寄らせる。

「どうやら、平気みたいだな」

そう言つてフレンは目を凝らして見ると、ユーリは誰かを抱いて泳いでいた。そのちょっとした様子を気ダルそうに見ていたヤスムネがいきなり身を乗り出し、

「う、海に滴る良い女か!？」

ヤスムネ（バカ）の妄言をほっというてフレンはユーリが抱いてる人物を良く見てみると、

「……っ！ ヨーデル様！ 今、引き上げます。ソディア、手伝ってくれ」

「はっ！」

フレンの号令によりフレンとソディアを中心にユーリたちを引き上げる作業に取りかかった。

『リタ無事で良かったマジでええーッツ!!』

無事に全員を引き上げたユーリたちは騎士から預けられた毛布にくるまりながら甲板に座っていた。主にリタとカロルだが。

「ったく! 近寄るなバカ兄っ!」

「うわっ、リタ! 魔術使うのは止めてよ!？」

リタはネイビーが近寄って来た瞬間に俊敏に立ち上がりネイビーと距離を離して毛布にくるまりながらファイアボールの詠唱に入るリタ。だがネイビーは恐れ構わず突っ込もうとするがヤスムネとカロルで静止させた。

「ったく、散々な目に合ったぜ」

ユーリは毛布では無くタオルのようなもので海水で濡れた長い髪を丁寧に吸い取りながら拭いて。

「大変だったな」

リタを宥めたヤスムネはユーリが寄りかかっていた壁の前に座る。正面に座ったヤスムネにユーリは少し不思議そうになりながらも船

での出来事を話す。

「ブラッドアライアンス紅の絆傭兵団だと……………」

「知ってるのか」

ユーリがヤスムネの反応に意外そうな顔になりながら使い終わったタオルを船員に渡した。

「ん、まあ、傭兵集団のギルドだってーのは知ってるよ」

「そりゃオレだって分かるっつの」

確実に何かを知り、それを隠すように含みがあるヤスムネの返答にユーリは怪訝そうな眼差しで見る。その眼差しに気付いたヤスムネは、

「とにかく頑張れ、と言っておくわ」

青年兄弟のやり取りのようにヤスムネは笑いながらユーリにそう言う。もちろんユーリの方が年上っぽいのだが事実ヤスムネは26歳でユーリより長く人生を歩んでいる。

ヤスムネはリタに言い寄る変態、もとい鬼才魔導士ネイビーの元に近寄る。だが少しかけネイビーに話し掛けるのを止めた。

「だあから離れてってばあ！」

『ちゃんと髪を乾かすんだよ、海水で少なからずそのまま放置していると髪が傷んでしまうんだから、ああそれと服もボクがさっき開発した空調魔導器を組み込んだ洗濯乾燥魔導器で洗えるよ。それで服を……服を……』

さっき開発したなあ！？　とリタとヤスムネが反応しようとした時だった。

ネイビーは珍しく長い身長である身体を低くする為に足を折り、腰を曲げてリタと目を合わせるようにする。ネイビーが真剣に話す時は互いに目を合わせる時だと長く過ごしたリタとヤスムネはすぐに分かった。

『ボクは、何気に今心拍数が高いのに驚いてる……これは過去にもあった』

ネイビーの声が確かに、そして気持ちがどれだけ入っているか分かった。

声色で分かる、“震えて”いたのだ。

『船が、大破してて、そ、そしてあの船の中に、海と一緒に藻屑になっっているんじゃないかと、ボ……ボクは……』

そう、フレンが確かにリタを確認したからと言ってもネイビーは自分の目で確かめるまでは凄い混乱状態だった。最初は駆動魔導器を弄っていたのだがリタをずっと気にしていたのか船の発見を聞いた瞬間にネイビーはすぐに甲板に出てリタを叫び続けたのだ。

まるで家族が失ってしまうのでは無いか、と陥ったように。

「……心配し過ぎ」

リタもネイビーの心情を理解したのか、苦笑混じりに笑ってみせる。

『ボクは、リタと一生、スターアリス茴香を数える事が出来なくなるのかと……』

「過保護過ぎるのよ、あたしは死なない。大丈夫、《戦争》じゃ無いんだから……死なないよ」

弱々しく、そして段々とまた混乱気味になってきたネイビーを落착かせる為にリタは恥ずかしそうに、だが安心させるようにネイビーに抱きつく。

母が子を抱くように、リタはネイビーの首に腕を回し、力強く。

そんなネイビーを遠くから見ていたヤスムネは近くに居た騎士に手を取り、ネイビーを休ませるように言付ける。

騎士は少し困惑そうにしていたのでヤスムネも一緒にリタとネイビーの側に近寄る。

「リタ、大丈夫だ、ネイビーももう落ち着いた。船途中で休ませよう」

「あ、ああ、うん、お願い／＼／＼／＼」

抱きついてたのを恥ずかしそうにしながらゆっくりとネイビーから離れるリタ、ヤスムネはネイビーと話せるように腰を低くして言う。

「戦争じゃねーんだ、リタの言う通りちょっとじゃ死なねーよ。つ

「かお前よりは生存率高そうだから大丈夫だつて」

ヤスムネはそんな風に言いながらネイビーを立ち上がらせ、近くに居た騎士に中に行くように促した。騎士も博士であるネイビーを失礼無いように船中に連れて行く。

連れて行かれるネイビーの背を見ながらリタは哀しそうな目で見ていた。

「まだ苦しんでんのか、ネイビーの奴」

そこでヤスムネが口を開く。

「知ってるの!？」

「少なからず他の奴らより知ってるよ、いや……誰よりもか」

ヤスムネも心底哀しい、いや哀しいより辛^{つら}そうな目でネイビーを見ていた。

「……昔戦中で、兄妹のように親しかった女の子を亡くしたつて目の前で、酷いような、それでコン兄は誰よりもあたしみたいな小さな女の子が“死”に繋がるような事が起こると、解離精神^{ヒステリー}病^{パニック}のように混乱状態になるの」

「……オレが見た時は手がつけられないくらいに奇行に走った時があつた。奇声を発して、もがき暴れて、まるで死んだ霊がネイビーを苦しませるように……」

驚掴みされるようにヤスムネは心臓がある部分に手を当てた。

「あたしが抱きついて、話し掛けると落ち着くみたいなの……でもやっぱり戦争の傷が分からないけど、あまりあの仮面^{カスマスク}を外す事が無いのよ、アンタは知ってるんじゃないの!？」

知っている。

ネイビーがあんなに苦しむ訳をヤスムネは誰よりも知っている。

「……色んな治療師^{ヒーラー}がコン兄を診てきたけど、やっぱり心の障害の為に記憶を無くす以外にあの症状を治す事が出来ないって、『時間が癒してくれる』って治療師は言うけど、コン兄はずっと苦しんでる!」

リタは静かに、だがヤスムネに響かせるようにそう言う。

「コン兄とアンタがどんな関係かは知らないけど、少なくともあたしは兄を苦しめた《戦争》を憎んでる、17歳よ? 17歳で……戦争に参加って、おかし過ぎるわ。それにあの魔導器^{マジック}たちも戦争の兵器^{武器}として言い様に使い棄てられた!」

リタも少し熱くなったのを自覚したのか、それとも戦争に対する怒りをヤスムネに向けても意味が無いという事に気付いたのか、虚しい表情になってリタはネイビーの元に歩いて行った。

「戦争は人の醜くさを残す。憎悪、哀しみ、死塊、全部人の醜さだ」

誰も居ない、だが吐き出したい。

「そう・・・・・・・・・・残ったのは、悪性の塊だ」

奥から心配そうに見ていたフタバがチラついていた。

ヤスムネから見た海は、全部灰色に映っていた。

無事『ブラッドアライアンス紅の絆傭兵団』の襲撃を受けずカプワ・トリムに到着したユーリたちとヤスムネ。

流石に騎士団が乗っている船を襲撃すれば帝国も黙っている筈もない。その事も考えあつての話が、そして何か“他の仕事”でもあるのかもしれない。

騎士団の船に降りて行くユーリたちとヤスムネ、ネイビーもすぐに元気になってはいるが、今度はヤスムネが少し元気を無くしている。

「ありがとうございます。おかげで助かりました」

そして船から降りるとユーリが沈みゆく船から救出した人物に礼を言われる。

そんな人物にリタババツサリと言う。

「ね、こいつ、だ――」

物言う前にネイビーが素早くリタの背後に回り両手でリタの口を塞ぐ。

「え、えつと、ですね……………」

そしてエステルが困惑するようにあたふたしているとフレンが提案する。

「今、宿を用意している。詳しい話はそちらで。それでいいね？」

一同はどのみち宿には行くのでフレンの提案に頷く。

そしてヤスムネは一人手を上げる。

「ユーリたちは行って来いよ、オレは良いや、街ん中“うるちゆる”してるわ」

「“うるちよろ”だろ、何だって良さ」

「えっ！ 来ないのヤスムネ！」

カロルがビックリしたようにそう言うときヤスムネは微笑みながらカロルの頭に手を置いて、

「難しー話は嫌いなものよ」

ぐしゃぐしゃー！ と撫で回してやるとカロルが『うぎゃああー！ やめてよー！』と言いながらヤスムネはユーリたちと離れ、別行動

となった。

その際ネイビーの護衛人として付いて来たフタバも抜き取る。
ネイビーもその事に気づいてユーリやフレンたちを促した。

そして港にはフタバとヤスムネ。

フタバは少し、いやかなり不安そうな顔つきになりながらヤスムネ
が口を開くのを待った。

そして、

「フタバ」

「は、はい・・・」

重苦しくも返事をするフタバ。そしてヤスムネは言う。

「お前はルートのトコに行けよ」

「えっ!？」

「そんで手伝って来い、お前は少なからずルートの味方で弟子だろ。
若い師匠がまた猫好きパワーフルスロットルでどっか猫と戯れてる
ぞ。そんな時はお前が引っ張れ、それが今のお前のやること」

「き、聞かないの?・・・」

「うん?・・・」

「何で、あのラゴウの爺さんを護衛してたのか・・・」

フタバは心底不思議そうにしながらヤスムネにそう質問する。
そしてヤスムネは簡単そうにフタバの頭に手を乗せる。

「言わなくて良い、早く行ってやれって」

そう言いながら撫でるヤスムネにフタバはオレンジ色の短い髪を揺らして若干微笑んでいた。

「・・・・・・・・ほら、行けって」

ヤスムネが最後にそれを言うのとフタバは一步下がり、大きく礼をして街の出入口に向かって走って行った。

そんなフタバの後ろ姿を見ていたヤスムネの背後から、

「世知辛い世の中よねえ」

なんともお惚けな、そして何処か本当に辛い^{こい}声を出す紫色の着物を着たおっさんが居た。

「レイヴンさん」

そしてヤスムネはそのおっさんを知っていた。

「おお、君が知ってるレイヴンさんよ」

レイヴンと呼ばれたおっさんは髪を後ろに纏め上げ、中途半端な髭剃りだったのか髭がボサボサになっていた。

「『^{ブラッドアライアンス}紅の絆傭兵団』の船でカプワ・トリムまで着たんスカ」

「おろろ？ 何でそこで『^{ブラッドアライアンス}紅の絆傭兵団』が出てくるのよー」

レイヴンはケタケタと笑いながらそう言うが、ヤスムネから映るレイヴンは、昔一緒に戦った戦友としか見えてなく、そして少なからずその戦争で大切なモノを数多く無くした人であるのは知っている。

アバディア
「聖核を探しているんじゃないですか？」

「……あー、何でそれ知ってるの？」

レイヴンはバツの悪そうな顔をしてそうヤスムネに聞く。

「情報は最大の武器、って昔友達から聞いたな……死んだけど」

そしてヤスムネはカプワ・トリムの数ある木椅子に座る。

「まあ、簡単に言えば、オレは“生かされた”んだ。レイヴンさん」

ヤスムネは黒い眼鏡をクイと上げながらレイヴンにそう言うとき長太刀を椅子によっからせて溜め息を吐く。

「戦争は何も、生まない」

含みがあるその言葉を告げるヤスムネ。そんなヤスムネにレイヴンはまた胡散臭そうな笑みを浮かばせてヤスムネの隣の椅子に座る。

「どうした青年、若人の苦しみを味わっているのかなあ？」

「若人かあ、オレ後四年経ったら三十路かあー。歳は取って行くのもんなんスねえ」

「かー、今からそんな考えはダメダメよー？ 若人は若人らしく元気にいなさい」

そう言つてレイヴンはバンバンとヤスムネの背中を叩く。

「ゲホガハギヒツ！？」

「そんなに強く叩いて無いわよ！？」

凄い驚きながらレイヴンは逆にヤスムネの背中を摩る。

「す、すみません。ノームでルートと戦つたんで」

「あの炎つ子と戦つたのか！ かあーそりゃ怪我はするわ」

「あ、いや、喉が焼けて痛いんすよ」

「さっきの激しい咳き込みはっ！？」

「ちよつと喉詰まらせました」

そんな風にレイヴンが何気なくヤスムネを元気付けようとしているのを気付いたヤスムネは、その後は他愛の無い話をしていると前方を横切るユーリを発見した。そしてユーリは二人で椅子に座っているのに気付く。

「あつ！ このおっさん……」

「ん……よ、よお、久しぶりだな」

「おおー！ 牢屋仲間だな久しぶりの♪」

「牢屋仲間って、止めろつつの。てか挨拶の前に言うことあるだろおっさん」

「挨拶よりまず先にすること？ うーん……」

「このおっちゃんもしかしたら歳のせいでボケてるかもよユーリ（笑）」

「ま、確かに騙した方より騙された方が忘れずにいるって言うもんな」

「俺って誤解されやすいんだよね」

「無意識で人に迷惑かける病気は医者行って治してもらってこい」

「ついでにボケも治したら尚よろしい！」

「ええい！ そっちもヤスムネもその口の悪さなんとかした方がいいよ！？」

ユーリは溜め息を吐きながら答える。

その後ユーリは何故ラゴウの屋敷にレイヴンが侵入したのか質問したり、レイヴンがリタに見つかり危うく火葬されそうに成りつつ逃走。

そしてヤスムネはカプワ・トリムの街角で密かに笑いながら見ていた『美将』の二つ名を持つ女性騎士が見ていた事に気付いていた。

北西に移動する集団を発見。

「センカ副隊長」

「・・・なにかしら」

美将のセンカ、《人魔戦争》で戦い抜いた美しい殺魔の艶女。えんじょセンカに報告する騎士も僅かに艶かしいセンカに酔いそうになりながらも騎士として仕事を松任する。

「シュヴァーン隊長から指示がありました」

「うんうん、なにかしら、言ってごらんなさい」

シュヴァーンからの指示と聞くやセンカは美しい長い髪を揺らして報告しに来た騎士に近寄る。

カシャツと鎧を揺らす騎士は真正面から映るセンカに酔われる。

「早く」

そしてボー、としていた事に気付くとすぐに騎士はセンカにシュヴ
アーンからの言付けを伝えた。

——カルボクラムに集合、お前の大好きな雷獣も来るらしい。俺に
合わせて着くように。

その言付けにセンカは腰にある黄双剣の柄をなぞりながら艶かしい
吐息をしながら訂正する。

（隊長……私が大好きなのは雷獣さんじゃない、貴方ですの
に）

そしてセンカはすぐにカルボクラムに向かうべく出立する。

ユーリやヤスムネたちもカルボクラムに向かっているのに知っている
のは、数少なくは居る。

港の街カプワ・トリム（後書き）

スキット

《妙な紛らわし方》

ユーリ

「さっきネイビーが騎士に運ばれてたけど、どうしたんだ？」

ヤスムネ

「いやなーに、大した事ねーよ」

カロル

「でも、あのリタがネイビー博士を落ち着かせるように抱き着いてたよ？ これは全然大した事だよ！」

ヤスムネ

「ふふふふ、とーとーリタちゃんも兄にデレる時が来たよーだな！
その勢いでオレにもっ！！」

リタ

「その勢いで………なんですって」

ヤスムネ

「ひいひいーッ！？ リタちゃん、いやリタさんはネイビーさんの所に行って居たのではッ！？」

リタ

「バカな奴がバカな妄言を言ってたから気にして来てみたのよ……
」

ユーリ

「因みにオレは気付いてた」

ヤスムネ

「言えよッ!？」

リタ

「覚悟はいいわね……アンタ」

カロル

「はぁ、またこれで終わるんだね」

カロルとユーリが立ち去る

リタ

「……バカな紛らわしだったわね」

ヤスムネ

「ユーリの野郎も気遣って聞かなかったしな……リタは兄貴の所でも行ってる、オレはユーリたちに上手く言っというてやるから」

リタ

「また下手な紛らし方したら、殴るから……」

リタも立ち去り、ヤスムネが一人になる。

ヤスムネ

「まだ、オレたちの戦争は、終わってねーかもな……」

亡き都市 カルボクラム（前書き）

もうすぐテイルズオブエクシリアが発売です（<ε>）
マジで楽しみです！

そして更新するのを遅くなってしまい申し訳ございませんでした！
文がおかしいかもしれませんが、そこんところは、その、生暖かい目
で読んで下さいッス！

亡き都市 カルボクラム

《カルボクラム》

かつてはダングレストとカプワ・トリムを結ぶ都市として栄えた街であり、交易の要所で人の流れが盛んであったことから、ルリアン式、後期エリカズム様式など、歴代皇帝たちによる華麗な文化が花開いた。近年大規模な地震が発生し、打ち捨てられたと言われている。

「実際はどうなんだろうな・・・」

ヤスムネは暗くなった空を見上げながら廃墟と化した虚の街カルボクラムの街中を見渡した。

ヤスムネとユーリ達は胡散臭いとはいえ貴重な情報だった為にレイヴンの情報で得たこの亡き都市カルボクラムに向かったのだ。

そしてヤスムネはと言うとカルボクラムに着くと直ぐに別行動を取り、団体行動よろしくない態度でカルボクラムの街中を進む。崩れた石の建物、その隙間から生い茂る緑の生命をヤスムネは絶やさないうよう慎重に、慎重に避けて奥にへと進む。

暗い空のせいなのか、廃墟と化した街中の空気のせいか。

ヤスムネの気分は最高に減り沈んでいた。

（嫌なこと、思い出す）

人魔戦争の記憶。

ある意味、人と人との戦争とは違った恐怖がヤスムネの脳裏を再び焼き付いた記憶を炙り出す。

負の連鎖とは言ったものの、魔物に殺され、仇としてその魔物を殺す、そしてまた魔物も仇として人間を……。

魔物に意思なんてあるのか？ とヤスムネも少年の時に思った。

あるに決まっている。

いや、無いだろ？

いや、ある。

一体どっちだ、と思考を巡らせればまた考えが纏まらなくなっていく。

だが時間がヤスムネを待つ筈も無く、次々と兄弟姉妹きょうだいが殺されていけばおのずと哀しみと怒りが支配される。

泥々で苦々しく、重々しいその最悪な空気を漂わせるのが『戦争』。いや、それくらいでは留まらないだろう。

ヤスムネはそんな風にどんどんと自分で気分を悪くしていく。

そして歩むその先にはこの廃墟と化したカルボクラムを住み場とする魔物がのしのしと出てくる。

そう、自然とヤスムネは長太刀を鞘から抜刀していた。魔物も武器を持った人間ヤスムネに気付き、自己防衛でヤスムネに襲い掛かる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

本当にやる気の無い目でヤスムネは片手に握った長太刀の刃を振り上げた。

峰の部分が魔物の顎に当たり、顔が上に向いた瞬間に長太刀の刃が首を“通った”。

斬った、感覚ではない。

絶った、感覚でもない。

ただ“通った感覚”なのだ。

通過した長太刀の後を残すように綺麗な波紋が浮き出る。そして噴き出す訳でも無く魔物は首と胴体を静かに血を流しながらドスツ！と肉塊となって倒れた。

長太刀の刃には少しだけ、本の少しだけ付いた血を払う訳でも無くただ宙に浮かしたまま、ヤスムネは天に仰ぎ、長太刀を浮かし扇ぐ。^{あお}奇妙過ぎる行動をしているヤスムネに別の方向から声が発せられた。

「貴様は・・・・・・・・」

その方向に視線だけを向けるヤスムネ。
そこには巨大な体躯をし、戦いに身を投じて出来た傷を数多く残り、背にはその巨軀に似合う大剣が背負った男がいた。その男の背後には何やら色々な戦士装束に身にまとった人たちが沢山居た。

「・・・・・・・・・・なんですか」

ヤスムネは見知った顔だったが、笑顔の対応なんて今は出来ないことを理解していた。だから用件は何かその大男に聞いた。大男はそんなヤスムネの対応に怒る事も無ければ、興味を持つ事も無かった。ただヤスムネが斬った魔物に目を向け、そして再びヤスムネに視線を戻すと大男は、フンツと鼻を鳴らして一歩前に出る。

（・・・・・・・・勘弁してくれよ）

自分で勝手に気分を悪したヤスムネは、本当に気分が悪い、つまりは機嫌も最高に悪いのだ。一人で居たい時は今なのだ、そんな時にこんな大男と会うなんて、更に気分と機嫌を際骨頂に悪くさせるヤスムネ。

「腕がまた上がったようだな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（用件あんならさつさと言えよ、面倒くせえ）」

「相も変わらず、か」

大男はズンツとヤスムネの前まで近寄る、そしてヤスムネはすぐに次の行動に入った、いや、“入ってしまった”。

キガアツンツ！！！！

金属と金属がぶつかり合う音が廃墟と化したカルボクラムを風と共に流れた。

「『ボスッ!』」

大男の後を着いて来ていた戦士たちが声を上げる

その理由は実に簡単だった。

大男が背負っていた大剣がヤスムネに向けて降り下ろされたからだ。自分たちのボスがどれだけ強いかを知っている戦士たちはいきなりその一撃を食らった青年に当然焦りと心配の念を送ったの、だが。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

片手に握った長太刀でボスの大剣を受け止めていた。

未だに押し合っているのかガキガキッ! と刃同士が擦り合う。

「ふん・・・・・・・・」

戦士たちにボスと呼ばれた大男はヤスムネに押し付けていた大剣を引かせる。

何かを分かったのか、大男はそれだけを鳴らして再び街中に戻った。

戦士たちはボスのとった行動に意味が分からず困り果てていながらも大男の後を追う。

綺麗に斬られた魔物の首を見て、ヤスムネの実力を垣間見る戦士たちも居た。

そして同時にヤスムネは完全に機嫌を悪くさせていると、その場には緑のフードを深く被った男だけが残った。

その男にヤスムネは、

「テイソンさん、アンタまで俺にいきなり襲って来るなよ……
……ガチで、もう、キレル」

カチツカチカチツツと長太刀から伝わるヤスムネの苛立ちの震え、その震動に便乗してヤスムネの長太刀にバチバチツと帯電する光が視えた。

「俺様としてはお前と戦っても良いのだが……」

そこでテイソンと呼ばれたフードを深く被り、隠れた瞳から僅かにヤスムネを見ると、

「……そんな絶望に満ちりやがった目の奴と戦うのはこちらから願ひ下げだ」

テイソンもふんつと鼻を鳴らして皆の後をゆっくりと付いて行った。

「……」

一人残るヤスムネ。

ヤスムネは震える手を押さえ込みながらも、自らの手で絶った魔物の亡骸を見る。

『死』がそこにある。

《人魔戦争》で見てきたのはこの『死』だった。

ヤスムネはゆつくりと片手にある長太刀を見て、刃を見る。

刀身に映った己の顔と瞳。

「確かに、これはヒドイ」

ヤスムネは己の目を見て嘲^{あざけ}る。

確かに、これはヒドイ。

瞳が薄暗くなっていると思えば濁りどよめくような眼。間違いなく絶望している眼^めだった。

ヤスムネは刀身を翻して峰部に手を当てる。

それは冷たく、どうしようも無く冷たく冷えきっていた。

ヤスムネが一人勝手にふらふらと消え、ユーリたちは『^{ブラッドアライア}紅の絆傭兵団^{シス}』の居所を捜していた。

ヤスムネと別れ、ユーリたち一行の年長者になったネイビーはここでリーダーシップ発揮をつ！ となるわけでもなく、ユーリに何処

行く先頭に任せてリタの後を歩いていた。

カルボクラムに入れば早速、ブラスティア魔導器を発見してユーリとカロールが調べようとするとリタが魔導器の扱いに不当に思い、自らその魔導器を調べる。

そしてリタが大体魔導器の周りを一回り見てからなんの魔導器なのか理解して口を開く、と同時にネイビーも白衣を靡かせながらガスマスク越しに口を開いた。

「ちよつと変わってるけどこれキネ——」

『キネスブラスティア転送魔導器の一種だね、見た感じ起動のためのスイッチがないねえ』

「え、ちよ！ 見た感じでって！」

『コア魔核はあるかい、リタ』

次々と自分で言おうとした言葉を兄であるネイビーに言われ、膨れっ面になりながらも言うことを聞くリタ。

「ふんっ、ちゃんとあるわ。魔核の脱着でなんとかするタイプでもないみたい。どこか別のところに、起動スイッチでもあるのかしら？」

『そうか・・・うん、これの他にも同一種の魔導器がこの街に設置されてるとしたら、それを一括して管理する装置があってもおかしくないね』

専門分野であり、その分野のスペシャリストである二人の会話を聞

いていたユーリが入ってくる。

「なんだ、じゃあ動かせねえんだな。残念」

「え……何が残念なの？」

何故残念なのかをユーリに聞くカロル。

「いや、直感的になんか面白そうだなと思って」

ええ……、とユーリの答えに不満のカロル。そこにまたリタが不愉快そうな表情で、

「魔導器はオモチャじゃないの」

「その管理している装置を探し出せばいいんじゃないですか？」

エステルも意見を出すとリタは頷きながら肯定の意味を示す。

その後は街を詮索してキネスプラスチック転送魔導器を見つけ出すユーリ一行。

そして転送魔導器を利用して先にへと進んでいくと、魔物と対峙する人影が見える。

「……『ブラッドアライアンス紅の絆傭兵団』……？」

「……じゃなさそうだな」

「あれが魔狩りの剣だよ」

向こう岸に見える人影たちを見ながらカロールが言う。

「あ……あの、デイドン砦で見かけた人ですよ」

「あ、そっぴや見たな。なるほど、あいつがお前んとこのリーダーか」

すると大柄な男が、魔物の前で巨大な剣を掲げる。

「ひとりでやろうつてのか？」

術式が現れたかと思うと、男は一太刀で魔物を葬り去る。

「……なによ、あいつ！」

「とどめの一発、か……？」

「あれはフェイタルストライクだよ」

カロールから出た名にユーリが反応する。

「フェイタルストライク？」

するとカロールが自慢そうに大口を開けて説明しようとするが、ガスマスク越しで何の目の色で話しているのか分からないネイビーが割り込んだ。

『熟練した剣の使い手なら使用できる戦闘術の逸脱した技術だよ、ヤスムネやルー……いや、僕の昔の仲間たちは使ってた』

ネイビーは向こう岸に居る『顔見知りの人物』たち視線を向けながら説明した。カロルは大口を開けたまま、なんとも言えない感情と痛む心境を潜めた眼差してネイビーを見ていた。

その後ユーリがどうやってフェイタルストライクを繰り出すのかネイビーとカロルに聞いて魔物の戦闘を練習にして見事フェイタルストライクを修得した。

一行はまた新たな力を手に入れたことにより魔物をより蹴散らしながら先にへとズンズン進んだ。

「ここ、本当に地震で滅びたんでしょうか？ 建物の感じとか、少し違う気がしますけど」

歩っているとエステルがふとそんな事を言う。

「ああ、オレも同じことと思ってた。別に揺れで家が崩れた様子もないし、ちとおかしいな」

「え、じゃあ、なんで滅びたの？」

「さあな。昔ここに住んでたやつにでも、聞きゃわかるんだろうけど」

「別にあたしらの目的には関係ないからどうでもいいんじゃないの？」

リタがそれを言うとユーリも少し気にしながらも『ま、そうなんだがな』と言って話を終わらせた。

ネイビーは皆が歩く後を追^つて行くように白衣に手を潜らせていた。
ガスマスクから聞こえる呼吸音だけがネイビーを包んでいた。

（何故、滅びた・・・か）

ネイビーは暗い街並みの中、ただ一人廃墟となった家を見る。ここにも互いに笑い合って楽しく遊ぶ子供たちが居たに違い無い。
その子供たちの“今”は一体どうなったのか…………。

「…………どうしたの、コン兄」

『……………！……………』

考え事をしていたネイビーにリタが少し心配そうに訊ねてきた。ネイビーとリタの身長差が激しいのも関係あるのだが、リタは見上げる形になってしまい、ネイビーから見たそのリタの仕草は正に。

（……………、これはまさかあの“上目遣い”というやつかッ
！……！）

ネイビーはスチャツと手と手を広げ万歳状態になるとすぐに空に目掛けて、

『上目遣いキターーアアアアアアアアアアアアアアアアアッ
!!!!!!!!!!』

「「「うるさいっ!!」「」」

「えっ、えっ、急にどうしのです・・・?」

見事にユーリ、カロール、リタの一言が重ね合った、エステルはネイビーの突如起こした奇行に真面目に反応した。

その後はユーリとカロール、そしてリタで興奮状態のネイビーを抑え込むのに時間を割いてしまい、若干リタも顔を紅くさせてネイビーの腹部にパンチを食らわせた。

ネイビー曰く『魔導士のパンチじゃなかった。軽く人を気絶させる』と告げていた。

大人しくなったネイビーを引き連れ(さっきの大声に反応して魔物が大量に引きつけ、その魔物を蹴散らすのにかかりの時間浪費)、また進む一行。

そこでユーリがエステルに聞きそびれていた事を聞く。

「聞きそびれてたんだが……」

「わたし、ですか……？」

エステルは小首を傾げながらユーリと向き合う。

「どうして、トリム港で帝都に引き返さなかったんだ？」

「どうしてって……」

そこでカロルも入ってくる。

「そっか、エステルはフレンに狙われてるって伝えたかったんだもんね」

「ああ、あの時点でお前の旅は終わったはずだろ？」

『オイオイ、そんな言い方は無いじゃないか』

「それは、その……」

エステルが少し困ってる風に見えた。勿論ユーリたちも悪意で言っている訳では無く純粹に疑問に思ったのでエステルに聞いているのは最年長であるネイビーも分かっていたが、アスピオの市長と言う職業から王族の味方になるのが決まりのようになっていたのでネイビーはエステルに加勢しようとするが、リタに膝で小突かれて噎せ^むせる。

「ねえ、そういえば結局フレンって誰に狙われてたの？」

「ええと、そこまでは……」

と、そこでリタが核心的言葉を吐いた。

「“ラゴウ”じゃないの？」

「えっ、あの悪党？」

流石はリタちゃん、ネイビーはそんな風にニヤけているであろう白いガスマスクの内側からリタを見ると。リタもネイビーを睨むように見ていた。

そしてまたネイビーがウザい行動を取りながらリタを構うとまたパンチを食らう。

「本当はフレンの任務はヨーデルを探すことだったんじゃないかなってことさ。なんで同じ帝国のお偉いさん同士がそんなことになつてんのかは知らねえけどな」

「……ごめんなさい。わたしにもよく分かりません」

「ま、いいさ。それよりエステルの話だ。戻らなくていいんだな？」

ユーリがそう聞くとエステルは迷いながらも考えて、考えて、徐々に答えを探し出す。

「そうですね……わたし、トリム港からそのまま勢いでつい

てきてしまいました……。たぶん……。わたし……。もう少し、みんなと旅を続けたかったんだと思います……。だから……」

そこでまた再び考えて、エステルはユーリに目を向ける。

「……それに、ブラステイア魔導器のコア魔核、まだ取り戻してませんし……」

「それはそうだけど、それはオレの目的だよな？」

「……駄目でしょうか」

はあ、とため息を吐くユーリだったが、お人好しスキル発動で。

「じゃ、ま、ついてくるといいます」

そのユーリの反応にエステルは笑顔で言った。

「ありがとうございます」

そしてまたユーリ一行は奥にへと進んだ。

炎が燃える。

炎があの記憶を呼び覚ます。

あの焼き焦げた人肉の臭いを。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

青年一人、立っていた。

山のように積み重ねられた人の上に。

「炎が燃える、燃えて消える。消えては、燃えて・・・・・・・・」

淡々と、ただただ淡々と口に並べたその言葉には何か深い“意味”のように聞こえた。

その青年に屈強な男たちがジリジリと警戒しながら近寄って来る。どうやら山積みになされている奴らの関係者だろう。どの男たちの顔には焦りがあった。

この男はヤバイ――

だが男たち・・・戦士たちは歩みを止めないで、寧ろ走り込んだ。
戦士のプライドと言うものだろうか、ただそれだけの為にこの青年
に挑むらしい。だが、青年は片手にある剣を弄ぶようにして、告げ
る。

「また炎の嵐が闖入し、灰道を作る・・・・それが《炎嵐》えんらん」

炎の竜巻が戦士たちを飲み込んだ。

炎の竜巻は戦士たちを飲み込み、その熱気が溢れる炎の竜巻から然も何も無いように歩いて来る青年。

「これが傭兵ギルド『オウラウピル暁の雲』か」

炎をマントのように肩から火が伸びて火の粉が青年の口から吐かれる。

炎嵐の傭兵の歩んだ道後には、灰色に染まった虚道しか無かった。

剛嵐と炎嵐の紅い絆の約束（前書き）

すごい久々の更新（涙）

お気に入り登録数が何気にあるのに感動しました（泣）

今回はルートをメインにしたのですが、雑かもしれません（^| ^ ;
）

しかも短い（汗）

途中で“何故か”気分が気持ち悪くなり、只今苦しんでいます、ウ
ウーウイ（#+ー+）

文もおかしいかもしれません、誤字脱字ありましたら申し訳ありません、
としか言えませんが。

ふざけてんのかゴラア？　と思われたらマジすんませんッ！
気持ち悪ッ！
うえ、うええ、

剛嵐と炎嵐の紅い絆の約束

ギルドの巢窟^{ダンゲレスト}

ギルドの総本山であるこの巨大な街には数多くのギルドが結成され、正に巢窟の如く賑わっていた。

その街で一番に賑わう場所は数え切れない程に多いのだが、一番に賑わう場所として有名なのがギルド「天を射る矢」^{アルトスク}が経営するダンゲレストの酒場『天を射る重星』が名が高い。ギルド「天を射る矢」の首領にして「大首領」の意味の名を持つ「ドン」の行きつけの酒場だ。

「天を射る矢」が経営しているのだからドンが行きつけるのは当たり前だ。

ドンの好みもあって酒場でありながら甘党メニューに力が入れられており、こってりしている油物の料理の後にとても合う事で好評の噂。新興のギルドのために仕事の紹介等も請け負っている。未来のドンを夢見る若者たちが身の丈にあつた稼ぎを求めて訪れることが多い。

だが有名なのは『天を射る重星』だけではなく、傭兵集団で五大ギルドのひとつである「紅の絆傭兵団」^{ブラッドアライアンス}が経営している居酒屋『紅の流星群』も含まれる。

健全な酒場で色んなギルドの戦士たちは情報を交換したり、何かの密談をしたりと利用されることでも有名な居酒屋だ。

実際の所では、「紅の絆傭兵団」の裏取引に使う秘密のアジトである。建物の最上階にワンフロアぶち抜きで設けられた「紅の絆傭兵団」の首領・バルボスの私室があり、ユニオン本部や「天を射る矢」の本拠地を凌ぐ豪華絢爛の内装で、訪れた者を威圧していた。

そしてそのバルボスの豪華絢爛な私室に、まるで首領と対等な位を持つように一人の青年がバルボスと互いに向き合うように座っていた。

「ガッハッハッハッ!!」

バルボスはドンドンッ! と巨大なテーブルを豪快に叩く。とても機嫌が良さそうに。

「流石は《炎嵐》の異名を持つ男だ、名の通り炎の嵐が過ぎ去った後だったぜ」

バルボスは片手に持っている酒瓶を荒く振るいながら上機嫌に向かいの青年に言う。青年は目の前に置かれた豪勢な料理を口に投げ込む勢いで食べていた。

「ワシはお前さんを気に入ってるんだぜ? 何せ『剛嵐のバルボス』と言われたワシと同じ“嵐”の異名を持つとるんだからな!」

「はあ……もぐうぐ、おうふえすか」

「ガッハッハッハッ! 『オウラウヒル暁の雲』を“潰した”男の台詞にしちゃあ随分と小せえ反応じゃねえか」

『オウラウビル暁の雲』。ダングレストに本拠地を置く“中堅”ギルドだ。大手ギルドの下に付き、魔物の討伐や辺境警備などに当たる働きをしており、派手な活躍はないものの、確実な仕事ぶりで知られ、ダングレストではそこそ知名度と評価を誇っている。

「ちょっと待って」

そこでやつと青年は食べる事を止め、深く被ったフードから見えた瞳がバルボスを捉える。

「漬してなんかない、ただ魔物討伐する際にオレの技が“たまたま”誤って『暁の雲』の連中を巻き添えを食らわせてしまった、だけ」

そう言い直し、再び食事開始。

（巻き添え……ねえ）

バルボスはグビグビと酒瓶に入った葡萄酒を喉を刺激するように胃に流し込む。

流し込むその僅かの時間に、『炎嵐のルート』の実力の軌跡を見たあの光景を思い出していた。

炎嵐、正にその通り。

焼き消す無情の業火が人間を焼死させていく光景。

余りにも残酷な死に方が『焼死』だとバルボスは長い経験で知っている。

受けた事の無い者には絶対に知る事の無い“激痛”。いや激痛だけで済まされないだろう。

生き地獄。

生きながら地獄を味わいたい者が居れば真っ先に『焼死』を選べば良いだろう。

残酷にして冷酷な殺し方であり死に方。意識を自ら消してしまいたい思考の中で、氣絶させる事も赦さない燃える肉体、熔ける脂肪、^{ひか}火枯らす血流。

例えば炎が消え去った後も襲い掛かる激痛の火傷。水も通さぬ喉。ただ痛さだけを感じたまま死に逝かせる？殺し方？。

だがこのルートと言う男は死体を残したが、それは重要人物だけであり、他の者たちはただ『灰の粉』となり、自然にへと“還っていった”。

そこには『焼死』という残酷な跡では無く、『灰の粉』となる事で自然にへと人が還っていくようにバルボスはふと思ってしまったのだ。

変わらない殺し方なのに、

変わらない残虐なのに、

人を自然にへと、還したのだ。

このルート・フレイヴという男は。

胃に届いた葡萄酒はいつの間にか喉で味わった感覚が変わり、気分を向上させてくれるのに変わり無かった。

ルートはスプーンをスプーンで掬い上げながらバルボスに言葉を零す。

「だいたい“ユニオン契約”を破ればアナタの『紅の絆傭兵団』は五大ギルドとして立場が一気に窮地に立たされますよ？」

「分かってるわ阿呆が、青二才に心配されるまで落ちぶれちゃいないぞ、ワシの紅の絆傭兵団は！」

ガッハッハッハッとまた豪快に笑いながらバルボスは酒瓶をテーブルに置く。

「ワシがユニオンのトップになる」

シン、と一気にこの空間が静寂になった。ルートも食えることを止めて、バルボスの目を見る。

「そして帝国さえも圧倒する軍勢を作り、いずれは世界を支配する！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「その為には、嵐の闖入が必要不可欠だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「頼むぞ、《炎嵐》。お前の力を信用してるのだからな」

バルボスは巨大な体躯でルートの横まで近寄り、大きな、幾度の死戦を潜り抜けた掌を差し出す。

「二つの嵐がギルドを一つにする、このワシと、お前だ」

無くなった瞳の孔には、誰にも負けぬ野心の炎が渦巻いていることにルートは自己判断する。

そしてルートはその掌を己の掌を握り返す事で承諾の意思を示す。

このバルボスという男に過去、ギルドについて少なからず教示され、助けられ、ギルドの「生き様」を教えられた。

そして一番に、子供だけのギルドで馬鹿にされていた自分たちを、実力を認めてくれた数少ない大人であるバルボスに力を貸すことにルートは迷いなど無かった。

「紅い絆に約束しよう」

ルートはフードを深く被りながら呟く。

例え

どんな結末になろうとも

剛嵐と炎嵐が紅い絆に約束をした頃。

居酒屋・紅の流星群に新たな情報が入ってきていた。

帝国の姫君を保護、同時に犯罪者逮捕、現在、新興都市ヘリオードに連行中。

新興都市　ヘリオード（前書き）

冬は藁で身を包み

風は凍てつく刃の如く

夜月は寒風苦しむ我らを笑い

今宵も絶寒の中で作業す

労働とは、誠に辛きことぞ

今回は、“おりじなるきゃら”が沢山登場するが故に、飽きること
なかれ（涙）

新興都市 ヘリオード

ぐらぐらと揺れながら動く荷馬車に乗っているのは甲冑に身に纏った一人の騎士だった。

その騎士は他の騎士とは少し違う色合いをした甲冑に包んでいた。

帝国騎士団長であるアレクセイを尊敬や畏怖を込めて敬愛している『親衛隊』の一員だった。

他にも数人の騎士たちが荷馬車に乗り、背後にある荷物を慎重にしているように数秒立つと振り向いては確認していた。余程の重要なものらしい。

キシキシと木製の馬車が軋む音が騎士の耳に届くと同時に、新興都市である《ヘリオード》が見えてきた。

ダングレスト南東に建設が進められている新興都市で、仲間からの話だとあそこの執政官代理は騎士団の隊長の一人に任せたとアレクセイ騎士団長が言っていた事を聞いた。

（まあ、関係ないがな・・・）

自分たちの仕事はこの荷物を無事にヘリオードに届ける事、そして

「姫様・・・ご無事で、良かった」

エステリーゼ・シデス・ヒュラッセイン姫君。

帝国の皇位継承候補である姫様がやっと見つかり、無事に保護したとキュモール隊とシュヴァーン隊から連絡があったのだ。

だが騎士団は次期皇帝候補に挙げたのは先帝の甥であるヨードルだ。逆にエステリーゼが“仮に”亡くなっていたとすればそれはその時は騎士団にとって優位に立てる追い風だ。

だがこの親衛隊の騎士の一人はヨードルよりエステリーゼに皇帝になつて貰える方を喜んだ。

意味など無い……………訳でも無く。

ただ、ただ、単純に美しく淑やかで、優しく、慈愛のあるあのエステリーゼ様の為ならばこの騎士は喜んで人生を捧げられる事を自負している。

何故そんな彼が今亡き皇帝の直属の親衛隊に入隊しているのかと言えば、先程告げた通り、エステリーゼが皇帝になれば粉骨碎身の気持ちで臨む為だ。

だがやはり彼は【騎士団】なのだ。

騎士団はヨードルを次期皇帝に臨んでいるので本当に堪ったもんじやない、とこの親衛隊の騎士は手綱をやる気無くフルフルと揺らす。

「……姫様に、あいて」

誰にも届かぬこの騎士の言葉は虚空に浮かんでは消えていった。

ヘリオード

とある一室にて、騎士数人とその騎士の中枢に立っている女性騎士は黒い髪と黒い眼鏡、そして黒い服装といった見事に黒一色に身に包んだ青年、ヤスムネを椅子と一緒に縄で縛られていた。

「ヲイヲイ、俺は縛る趣味も無ければ縛られる趣味も持ち合わせていないでふゆっ!？」

彼の言葉はある物を突っ込まれて最後まで言えなかった。

「ヲイヲイ、私も縛られる趣味は無いが縛る趣味は持ち合わせているのよね」

「はがぁ! こえあえろー!」

「ああ? 声? 何言っただこの馬鹿変態真つ黒野郎」

「はがぁあ!？」

何故ヤスムネが喋れていないか、と言うと、シュヴァーン隊副隊長を務めているセンカ・シンシエスに黄色の直剣がヤスムネの口の中に入れられていた。剣の腕はやはり副隊長だけあり震えが無く、決して軽くは無い剣をぶれさせずにヤスムネの口の中で浮かせていた。

「・・・ふふふ、何か喋ってよ」

火照ったような顔でセンカはそんな事を言う。
勿論、今の状態で喋ろうとすれば完全に顎がグロテスクな状態に“
割れる”。

「（顎が）割れば幾分かそのくしゃれた顔もカッコ良くなるわよ、
ホラホラ喋ってよう」

「うっ、うっ、うっ、うっ、うっ、うっ」

カチカチと黄色の直剣をヤスムネの歯に当てて音を立たせる。ヤスムネは拷問紛いなこの仕打ちに更に言葉攻めで涙がホロリと流れる。流石にこれを見ていた数人の騎士たちは彼を哀れむ。

「セ、センカ副隊長。流石にこれはやり過ぎでは？」

「何か可哀想になってきました、色々」

数人の騎士がそんな事を言い出してきたので、妖しく微笑んだ後にセンカは黄色い直剣を鞘に戻す。

「こんなことをしてるのにはそれなりの意味があつてやったのよ？
お分かり？」

「わかりません！！！！」

ヤスムネはクワツ！！！！と目を見開いて縛られながらジタバタと足をセンカに向けて蹴ろうとするが逆に蹴られ『あ痛っ』と片足を片手で摩っていた。

「カルボクラムで何をしていた。雷獣」

ゴツとセンカはヤスムネの腹部に強烈なキックを繰り出す。周りの騎士たちはセンカを抑える為に数歩引き下げる。

ゲホゲホツとヤスムネは咳すると他の騎士が前に出る。

「今ルブラン小隊長がユーリ・ローウエルの罪状を確認している。お前には個人としての質問でこうやって個室で聞いているのだ」

「“訊いている”の間違いだろ・・・」

「カロル・カペル、リタ・モルディオ。そして学術閉鎖都市のアスピオ市長であり帝国が認めた魔導器全専門最高責任者で居られるコン・ネイビー博士がお前を“知らない”と言っている」

「ちょい待てっ!？」

「そんな見知らぬお前が偶然姫様が居られたカルボクラムに居たのか、それを“訊いている”」

はあ? とヤスムネは椅子を浮かせるほどに疑問な顔になる。

——はあ? えっ、何て言った? えっ知らない!?

ヤスムネは何か叫ぼうとまた口を開くが、ガポツツ! と小さな薪をくわえさせられる。

「はよ喋れ」

(再びっ!?)

むがぁー！！ と薪をくわえて叫ぶヤスムネにドロップキックを繰り出そうとするセン力を必死に騎士たちが止めていると、ガチャツ、と部屋の扉が開く。

「・・・失礼します、こちらに“ヤスムネ”が居ると聞き――」

開けた先に広がっていたのは薪をくわえて涙目になっているヤスムネに、そのヤスムネに向かって何やらドロップキックをしそうにしている女性騎士、そしてその女性騎士を必死に止めようと頑張っている複数の騎士を見て、部屋に入ろうとした人物は固まった。

「アナタ方は一体何をしていますかーッ！！」

大音量の叱咤するこの騎士も女性で、金髪を後ろに纏め、碧眼で並んでいる騎士たちを睨んでいた。騎士たちはかなり落ち込んだ様子で重そうな鎧を更に重くなったように肩が沈み、顔も沈んでいたのだが、このセンカは一切反省の色無しである。

それを見た金髪の女性騎士はキッ！ 鋭くセン力を睨む。

「だいたい貴女がここの最高責任者であるのに対し、何ですかその態度は！」

「・・・はん、『親衛隊』様は真面目な方が多くててさぞう働き者でありますねえーおほほほー！」

「改めろー！ その態度を改めてちゃんと聞けえー！」

カチャリと鞘から立派な剣を取り出してセンカに斬り掛かろうとするが慌てて騎士たちが再び止めに入る。『何しに来たんだこの人ッ！？』と騎士たちが思っているとまた扉が開く音がした。

またか・・・、と溜め息を吐きながら騎士たちが扉の方に顔を向けると、そこには紫色の髪をオールバックにした騎士二人が居た。一人は左右の耳に槍のようなピアスを付けて、もう一人は眼帯を付けている好青年だった。

「トウカ、また何かやってんのか？ 時間無えんだからな？」

「会えて嬉しかったんじゃないかな」

そしてまた二人は開けた先を見て固まった。

「止め止め！ ループループ！！ また繰り返したよコンチクショ
ー！」

ヤスムネは頑張って吐き出した薪を横目に大声を上げてやっと止めさせた。

「お久しぶりです、ヤスムネ」

そう言つて来たのは金髪碧眼の女性騎士、トウ力だった。

シュヴァーン隊副隊長のセンカや他の騎士たちは本部に帰還させた。残ったのは四人、ヤスムネとトウ力、そして騎士のような鎧を着ないで己の筋肉を示すように薄い皮鎧だけを装備した二人の騎士だけが残っていた。

「トウ力に、ランサドル兄弟か・・・」

ヤスムネは“未だに”縛られたまま三人を見て、見覚えのある顔だと気付く。

三人の恰好を見ただけでヤスムネは悟った。

「騎士団に入団したのか」

そうだ、三人共に帝国が認定している騎士甲冑に身に包んでいるのだ。しかもその三人共にアレクセイが指揮する皇帝直属の部隊『親衛隊』の鎧と服だった。

トウ力はその事を言われるまではとても嬉しそうな顔をしていたのだが、ヤスムネにそれを聞かれると直ぐに表情を曇らせた。

ランサドル兄弟と呼ばれた後の二人の男性騎士は皮肉っぽい微笑みを浮かばせて口を開く。

「まあな、あんたがギルドを離れてからただの烏合。数人は散り散りになった。スイゲツには会ったんだろ？」

耳に槍のピアスを付けている騎士にヤスムネは目を逸らす。それを見た騎士はまた微笑みを浮かす。

「アイツはあんたを憎んでた。つまりはアイツみたいなあんたを憎

んでる奴と俺らみたいによりたいようにやってる奴も居るって訳さ、
もう子供^{ガキ}じゃねえ。手前の事は手前で決めるさ」

そう言いながらヤスムネに近付いて縄を解^{ほど}く為^{ため}に後ろに回る。

「うわ、面倒な結び方しやがって・・・」

そう言いながら解いていくと、眼帯をしているもう一人のランサド
ールも口を開く。

「俺たちは？アレクセイ騎士団長？の命でここまで来ました」

びくつと反応するヤスムネ、そしてヤスムネも何故反応してしまっ
たのか後悔した。トウカの顔を見て。

「貴方はまだ、まだ苦しむ選択に進んでいるのですか！？・・・
・『人魔戦争』は、もう終わって——」

「終わってない」

ズバツとヤスムネは悲しむトウカの言葉を消すように上から言い乗
せた。

縄を解かれたヤスムネは眼帯の男性騎士の片手に持たれている“得
物”を見て手を差し出す。

「預かって貰っててありがとう、助かった」

ヤスムネはそう言いながらランサドールの片手に掴まれている自分
の愛刀であり、まだ誰も知らぬ無銘の“長太刀”を返して貰うよう
に手を差し出したのだ。

眼帯を付けたランサドルは溜め息を吐きながら返そうとするが、スツとトウカに手で静止させられてしまう。

「まだ、私が納得していません」

声が沈んでいるせいかもしれないが、発せられたその声は静けさを感じさせてしまう程に透き通っていた。

「・・・トウカは確か頑固者だったな」

「ああ、それは今も昔も変わらなく毎日が大変です」

「スパイータも大変だな、兄のジャーベリンの面倒も見ないといけないのだから」

「待て待て、俺はそんな弟に迷惑なんぞ掛けてねえ。トウカの方が酷いだろ」

んなつ！ とトウカはまさか味方であるランサドル兄弟までヤスムネの肩を持つてしまった。

「て、敵に寝返りましたね！ この裏切り者っ！」

涙目になりながらトウカはまた剣を抜き出そうとして、ピアスを付けた兄、ジャーベリンに『やれやれ、疲れる騎士ちゃんだ』と止められる。弟のスパイータはヤスムネに長太刀を渡す。だがヤスムネが長太刀を掴み、引っ張ろうとするががちりとスパイータが掴んでいる手を離さずにいた。

「トウカ程じゃありませんが、理由^{ワケ}を聞くことは出来ませんか、頭^ボ^ス

領」

スパイアは片目しかない瞳孔でヤスムネを捉える。

（理由、か……）

ここで虚言を言った所でトウカに斬り掛かれるだけだと判断したヤスムネは疲れたような目でスパイアに言う。

「……苦行を勤しむだけだ」

それだけを言うのと力付くで長太刀を奪ってヤスムネは外に繋がる廊下を歩いて行った。

残る騎士三人は互いに顔を見ようとしない、ただポツリと言葉を吐く。

「あの人は普通の苦しみでも苦しみを求め、更なる苦しみを求める」

「病気だな、おい」

「……………」

「兄さん……」

「チツ……」

理解出来ない自分に苛立ちを覚えたのかジャーベリンはヤスムネが通った扉を見ながらにそんな事を言ったが、トウカの悲しそうに黙っている事に弟のスパイアが気付き兄に『やめなよ』と目で語り

ながら次の【アレクセイの命令】に移行すること促した。

先程、アレクセイ騎士団長が指揮している『親衛隊』に邪魔されたシュヴァーン隊の副隊長であるセンカ・シンシエスは木箱の上で優雅に自分の武器の手入れをしていた。若干苛立ちを醸し出しながら、その原因はと言えば、やはり先程のヤスムネの拷問についてだ。シュヴァーン隊長を（一人の男）敬愛しているセンカにとって少し痛い結果になってしまった。

実はあの行動は実質的に上からの命令では無く、私情でセンカが勝手に行なった行為だったのだ。シュヴァーン隊長の命令なら何も疑わないセンカなのだが、最近はずっかり何も命令が下されておらず、代わりにシュヴァーンが汗水垂らして頑張っているのだ。

だからセンカも何かシュヴァーンの役に立てる為にまず『何の命令で動いているのか』を知りたかった。それで考えた結果に、あの雷^{ヤス}獣^{ムネ}を思い出したのだ。

行動の糸がまったく見えない男。

最近会った場所と言えばカプワ・ノールでの時で、ラゴウ執政官の屋敷の前にある坂で会った。

ふらふらとしていよ奴だが、昔からシュヴァーン隊長と面識があるらしいのは副隊長をしているセンカには分かった。だからシュヴァーン隊長もカルボクラムに向かえ、と命令あった時にヤスムネの事も言っていた、つまりは……。

（何かしらあの雷獣さんはシュヴァーン隊長の命令“関わっている

”――

片手で黄色い剣を横一閃に空を斬る。ヤスムネ雷獣を想像して首を斬り離れたのだ。

「センカ副隊長！」

すると情けない声で殺気を放つセンカを鎮火させられた。振り向くとそこにはシュヴァーン隊に所属している細長い男の騎士と太小さい男の騎士がカシャンカシャンと鎧を鳴らしながら走ってきた。

「アデコールにボツコスじゃない、どうかしたの。シュヴァーン隊長から命令っ」

嬉々として木箱から降りたセンカは二人に聞くと、違うといった感じに首を横に振る。

するとまるで興味を失せたように糸目で二人を見る。

「・・・じゃ何よ」

（ぬわ、相変わらずの興味の無さである！）

（でも美人だから逆に痺れるのだ／＼／＼／＼）

目の前で敬礼する二人に、センカはまた木箱に腰掛ける。

「それで用事はなんなのよ」

「はっ！ 用件とは犯罪者であるユーリ・ローウェルとの一騎討ちの許可を貰いたく馳せ参りましたのである！」

「ユーリ・ローウェル？　．．．．あぁ、エステリーゼ様を守ってもらった男の人ね。でも確かヨードル殿下直々の恩赦で無罪放免になったんじゃない——」

「ですが！　それは騎士団の正義として見逃しがたいことなのだ！」

「なので戦った後に我々が納得するか否かを決めるのである」

（面倒臭．．．．）

センカは本当に興味が無いように、また自分の剣に目を向ける。

「好きにきなさいな、シュヴァーン隊に迷惑を掛けないのなら幾らでもやれば良いわ．．．．」

ありがとうございますっ！！　と二人はセンカに許可を貰うと急激にユーリの元へと猛ダツシュして行った。

——くだらない、本当に。

自分たちが納得しないから、そんな理由で騎士が剣を抜くな。

己が所属する部隊の上司の過去を知れば、その意味が分かるだろう、とセンカは思った。

シュヴァーンもセンカも過去を話す気も無いが、騎士とはそういうものじゃないだろう、ただ剣を磨きながらセンカは思う。

今は、いや随分昔から『騎士』は墮落した職業として見られていた。貴族が騎士になる事が多く、ただ騎士として振る舞うだけで実際の所は鎧を着こんだ貴族共。身を守る鎧を装備した^{たて}ことにより『騎士』としての誇りを、品格を地へと落とした。

下町での行動は上の耳まで入っているのにそれを見過ごす。

きつと、変わらないで続くんた、この腐った騎士の道のりは。

そんな事を考えていると、

「センカ、ルブラン達を見なかったか。用事があつたんだが・・・」

「シュヴァーン隊長おん！！／＼／＼」

片目を隠すようにしている前髪とシュヴァーン隊の隊色と言って良い朱色の肩の鎧、オレンジ色の服装。シュヴァーン・オルトレインだった。

所詮は考え事。センカにとってはシュヴァーンが全てだったのだ。

カルボクラムでは滅茶苦茶な目に合ったユーリたち一行。

ギルド『魔狩りの剣』がカルボクラムの地下空洞で巨大な魔物と戦う為に乱闘になり、結局はユーリたちが巨大な魔物を退けたのだが、その後はキュモールの部隊とシュヴァーン隊に囲まれ、見事に捕縛

された。

そして新興都市に着いたらすぐに騎士団本部の一室で尋問、数々の罪状にカロルは驚き半分と呆れ半分で横から聞き、リタはまるつきり興味無しにユーリの罪状を聞き、このままどうなるのだろうと考えていれば、途中から騎士団の最高責任者であり、帝国『最強』にして『最高』の騎士、アレクセイ・ディノイアが入ってきたのだ。

エステリーゼとヨーデルの両殿下の計らいで罪は全て赦免された、との事だった。

ルブランやアデコール、ボツコス等の面々は納得いかなそうな顔でユーリを睨んでいたが、アレクセイが宿でエステルが待っているから顔を見せて欲しい、と頼まれユーリは堂々とした態度を崩さないで騎士団本部から出ていく。

「エステル、帰っちゃうんだね・・・」

ぽつりと呟いたカロルの言葉にユーリとリタの心情を刺激した。

「あんた、それで良いの？」

「選ぶのはオレじゃないだろ」

「そりゃ・・・そうだけど」

「それより、ここどこなんだ？」

カロルは人差し指を立てて自慢気に話そうとしたが、脇からニョイツと出てきた白衣の男に邪魔された。

『ここは新興都市ヘリオードと言ってねえ、新しく建設してる街なんだよ。位置的には……』

「ト、トリム港とダングレストって街の間だね。この道を東に行けばさっきのカルボクラム、西に――」

『抜けて西北方向に進むとダングレストなんだよ！』

ちよつとそれ最後まで僕が言おうとしたんだぞ！！ とカロールがいきなり現れた白衣の男、コン・ネイビーの服を掴んで追求するが『ええい！ ここで僕の博識ぶりを見せないと危ないんだよっ！ 主にキヤラと出番的にっ！！』と子供に向かって全力で駄目な義理の兄を見たりタは『……切実ねえ』と溜め息を吐きながらネイビーに鳩尾パンチを繰り出す。

ゴボオッ！ と白いガスマスク越しでも分かるように何かを吐き出したネイビーは踞って鳴いている。

「てか、この博士様は一体どこに居られたんだ？」

ユーリが踞っているネイビーを見てそう聞くと、変わりにリタがネイビーの胸ぐらを掴んで問い質す。

「妹が騎士に尋問されてる中あんた一体全体何処に居たの、かあしいらあ？」

『怖い、声色とか顔とか色々ごちゃ混ぜに怖いよりタ』

だがネイビーの腹の上に乗るようにして胸ぐらを掴んでいるので、リタの柔らかいお尻の感触にネイビーはガスマスク越しに『でへへ／＼／＼／＼』と情けない顔をしているに違いない。

そしてそれを感じ取ったリタは即座に侮蔑を含んだような眼差しで空に掌を向けると火球、つまりはファイアボールがスタンバイしているように狙いを定めて、もう一度ネイビーに問い質す。

「何才処に居たの、かあしいらあ〜？」

『シ、シルトプラスチックア結界魔導器を見ていたのでしゅ！！ えへ、えへへへ』

オラア！ と結局至近距離でファイアボールを食らったネイビーは『ごはああ！？ でもこれもリタちゃんの魔術だと思えば・・・イケる！？』と意味不明な言葉を残してリタに焼き焦げにされている。

ユーリはいつの間にか居なくなっており、カロルもぶらぶらと街に歩いて行つた。

リタは暫し考えていると、まるで超速再生したかのようなお早い復活のネイビーに頭を撫でられる。

——っんなっ／／／／！！

リタは赤面になりながらネイビーの手を払う、そして周りに人が居ないかを俊敏に確かめていた。

『もう、大丈夫だってリタ』

「ちょ、何言つてんの！？ 人前で頭撫でられるなんて恥ずかしいじゃない！」

『今居ないよ』

「た、確かにそうだけど！」

そう言つてネイビーはまたリタの頭を撫でる。ネイビーが長身になだけにリタが小さな子供みたいに見えてしまう。ガスマスクをしているネイビーなので年齢が確かでない事もあるが父親と娘と見えてもおかしくない光景だった。

「ちょ、ちよつと、だからやめっ！」

『ストリムにレイトス、ロクラーにフレック』

「……ラゴウ邸にあつた天候を操る魔導器の魔核コアに刻まれた紋の一つね、移動を表す。だから何よ」

『歴史や文化、奇妙な術式等のが数多く発掘されては現代では理解出来ない謎もあれば、頑張つてそれを解明した、としてもまた謎を生み、深める。これじゃ疲れるだけじゃないかな？』

「……どうしたの、シルトプラスティア結界魔導器を見て、何か分かつたの？」

見詰めるリタの瞳にネイビーは視線を外す。

「はあ……何かお腹空いた」

『えっ？』

突然のリタの言葉にネイビーは久しぶりに驚く。

リタも自分で言つて恥ずかしかったのか赤面になりながらも言葉を吐く。

「いくさ新興都市でも、食べる場所とかあるでしょ。コン兄の奢りね」

赤くなりながらもネイビーの袖を引きながら街中に向かうリタ。

「鬼才が聞いて呆れるわ、バカっぽい」

リタの口癖にクスツと微笑するネイビー。

「深く考えて考えて、それでも考え抜いても分からない事があつたとすれば。思い切って一回忘れれば良いのよ。コン兄は疲れてるとまた可笑しくなるから困るわこっちとしては……」

ふんつ、と鼻を鳴らしてネイビーがちゃんと付いて来ている事に気付くと袖から手を離し、周りを見渡して料理店を探すリタ。

良い妹を持つて幸せだ、とネイビーは改めて思い知ったのである。

『あつ、でもヤスムネに全金預けちゃって今残金ゼロだった』

「あの真っ黒ヤロー……!」

新興都市　ヘリオード（後書き）

スキット

《エステルはお姫様》

カロール

「それにしても、エステルがお姫様だなんて、ボクびっくりだよ」

ユーリ

「騎士のフレンと知り合いだし、育ちはいいわで、何かあるとは思ってたけどな」

リタ

「あんたは気付いてたんでしょうが」

ユーリ

「さてな」

カロール

「どうしよう？　ボク、なんか失礼なことしてなかったかな？」

ユーリ

「そうだな・・・カロールなんかより、ヤスムネやネイビーの方が危ないんじゃないか？」

カロール

「えっ、どうして？」

リタ

「ヤスムネとか言う奴、あいつエステリーゼに対してちょっと失礼じゃなかった？」

ユーリ

「そうだなあ、流石に『エステルちゃんはトイレ大丈夫？』とか皆の前で聞いて来た時はオレも焦ったな」

カロル

「えっ、何で？ ただトイレに行くか行かないかを聞いただけじゃないの？」

ユーリ

「んー・・・まあ・・・」

リタ

「ガキはほつといて、あのバカ兄だけど」

ユーリ

「研究とか言つて自分で開発した爆弾を作つてオレら巻き込んだ時は死ぬかと思つたな、つか何よりエステル巻き込んだ時点で極刑もんだろ」

カロル

「うええっ！！ ヤバくない！？」

リタ

「ずる賢い頭でちゃんと自分に刑が下されない程度には巻き込んでるんじゃないの？ そこんところは“意外”にもちゃんとしてるから」

ユーリ

「意外にもオレら死ぬ覚悟決められたがな。選択肢無し“死”直行コースに」

カロル

「ボク、何だか安心してきてる自分が怖いよ」

ユーリ

「不敬罪ならオレら含まれるが、ヤスムネとネイビーよりはマシだろうな」

リタ

「はあくバカっぽい……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6654m/>

テイルズオブヴェスペリア～ホタルブクロが咲く頃～

2011年12月19日10時54分発行